日本文化 の 原理 と 源流

＜ 原理構築　神の思想形成 まで ＞

Foundation of Kyoto culture
Principle & Origin of Japanese culture

はじめに　平安京誕生への 神仏史　　古代「循環思想」から「神々信仰」　神仏習合「観音信仰」へ

「日本文化 の 原理」の構築、その検証と活用と関連し、平安京誕生への歴史を神仏信仰面からたどりたい。 この中には、現代京都を理解するための重要な神名・神社が登場する。
また、紹介する京都周辺の山岳寺院は、奈良時代創建で、その高い歴史価値は、今、忘却の危機にある。 さらに、近年の豪雨で被災され、微力支援しながら、広報・啓蒙に取り組んでいる。

平安京前夜までの歴史、信仰は、そのあと、平安時代から現代にまでつながる、重要な文化の基礎的構造です。
したがって、日本や 京都 の全容を 理解するために、認識すべき歴史なのです。
例えば、愛宕山の寺院は、「大和葛城・鴨氏の役小角」と、「越前秦氏の泰澄」について、その起源に関わる、奈良時代の伝承を持っています。
そして、その鴨氏、秦氏たち氏族の歴史を理解するには、縄文から弥生の時代背景や神話の神々、また古墳時代にかけ渡来した人々たちの、
列島での遷移把握が必要です。
幸い、近年発展した考古学上の発見や分析、神社の文献公開、諸先生方の著書を総合することで、それらは徐々に解き明かされ鮮明となってきました。
時代に沿って、縄文から弥生、飛鳥、奈良時代から、平安京誕生までの信仰を、特に京都に関係した事柄で、以下に概説します。

古来、山代の地も、狩猟に恵みをもたらす山河に暮らした。 次に、銅鐸・鉄器などの文化をもたらした人々は、出雲など日本海側から渡来し、
今の丹後・亀岡などに拠点、そして大和に至り、三輪山山麓を本拠とした。
彼らは、水・鉄をもたらす山を崇めた。 その足跡は、山代・淡海・大和周辺の「磐座」や、「銅鐸」などの弥生遺跡から明らかとなってきました。
その中の一集団が、奈良盆地　南西に暮らした葛城鴨氏です。 今日の奈良「高鴨神社」として痕跡する一帯に暮らし、やがて新しい勢力の流入
を受け北上し、山代に至ります。 そのあと奈良時代、同じく葛城から山代へ北上したのが、山岳修験の「役小角」です。
古来からの信仰を重要とした天智天皇は、大津京守護のために、奈良の大神神社から、今の日吉大社へ出雲の神である「大己貴神」を勧請した。
天武天皇は、出雲の一族である鴨氏奉祭の上鴨神社社殿を整えたと伝えられ、また桓武天皇も平安京の護りとしたのは、賀茂社の地であります。

古墳時代、多くの渡来人の1つ、秦氏は主に北九州から河内、山代に至るが、日本海側、越前から淡海（滋賀）を経て山代に南下した秦氏の一人が「泰澄」です。
秦氏の拠点拡大や、その二つの渡来ルートの合流は、松尾大社の祭神「大山咋神」と「市杵島姫命」に伺えます。「大山咋神」は、日吉大社の奥宮磐座に残る
古代の神山信仰で、山城の松尾大社からさらに保津川を昇り、亀岡に伝わります。「市杵島姫命」は、元来、北九州の宗像大社の祭神です。
また、越前から南下した「泰澄」の「白山信仰」は、日吉大社など滋賀に多く伝わり、山城に至ります。

以上、出雲からは亀岡（当時、桑田）、大和～山代、 一方では、越前からの淡海～山代　そのような人々の流れで山代の信仰が形成され、のちに山背、都と
して山城、京都となっていきます。
出雲から伝来した「磐座」信仰、「大国主」信仰は、亀岡の出雲大神宮や愛宕神社、そして山代の山頂に至り、今日の愛宕山社寺に伝わります。
滋賀の日吉大社も、古代より、「磐座」信仰である「大山咋神」を祀り、またのちに「大国主」と同体と考えられている「大物主」の別名「大己貴神」が加わりました。
最澄は、奈良の三輪山より「大物主」の分霊を日枝山（比叡山）に勧請して、大比叡としました。

一方、仏教公伝後、飛鳥や平城では、釈迦如来、薬師如来、盧舎那仏を本尊とした寺院が主流となります。
しかし、今の京都では、その600年前後より、聖徳太子縁の「頂法寺」、「八坂寺」、「乙訓寺」、のちに役小角や泰澄とも関係する「神童寺」で、早くから観音菩薩が祀られました。
その「神童寺」のあと、同じく周辺の山々では、600年代後半から700年代にかけ、南山城の「観音寺」「海住山寺」「三室戸寺」など、観音菩薩が盛んに祀られる様になりました。
700年代初頭、行基は、元明、聖武天皇勅願などを受け、「福徳寺」、「葛井寺（現 法輪寺）」、「西方寺（現 西芳寺 苔寺）」、「宝積寺」を山岳山麓に創建しました。
その頃、隆豊禅師も、西山山岳に法相宗寺院として「金蔵寺」に観音菩薩を祀りました。のちに、桓武天皇は平安京遷都に当たり王城鎮護のため経典を埋め西岩倉山と号する。
同じく、 東方山岳では、700年後半に、天智天皇勅願、御手彫り観音菩薩の記録がある山科音羽川上流の「牛尾山法厳寺」、泰澄開山の岩間山「正法寺」が創建されました。
坂上田村麻呂は、「牛尾山法厳寺」草創となる庵にいた円珍上人と出逢い、東山に音羽山清水寺が創建される。そのため 「牛尾山法厳寺」は、清水寺奥院としての歴史を持ちます
最澄の草庵である比叡山「一乗止観院」（延暦寺）でも、創建当初の東塔「山王院」に観音菩薩が祀られた。 愛宕山と併せて平安京を四方で囲んでいます。

その愛宕山では、平安京遷都直前の781年、「慶俊」と「和気清麻呂」が、五寺を創建した。 明治の廃仏棄釈で 、その内の「白雲寺」は、修験道、地蔵信仰を
基礎としつつ、イザナミから生まれた火の神カグツチの火伏信仰を加え、現在の「愛宕神社」（奥社祭神 大国主命）となる。
当初創建の五寺の内、寺としては「鎌倉山月輪寺」、「高雄山寺（現在の神護寺）」だけが、存続します。
「月輪寺」は、「聖観音」「千手観音」「十一面観音」三体の観音菩薩を祀り、明治まで観音菩薩を本尊とする。 今は、阿弥陀菩薩を本尊とする天台宗寺院です。
神山山岳修業を起源に、平安時代の「密教」、「浄土信仰」、「白雲寺」から分霊された「将軍地蔵」（イザナミの本地仏）など、信仰習合の有り様を残す山岳寺院です。
平安時代以降、「空海」「空也」、また「法然」「親鸞」、摂関 九条家の祖「九条兼実」たちの、信仰、修業、交流の場所となっていきました。
「月輪寺」は、その歴史大河を生き残こり、現在に至ります。

この様に、出雲から伝来した「磐座」、「大国主」信仰、 そして仏教の「観音信仰」が、平安京に至る歴史において、信仰・宗教的な基礎を成しております。
またそれらの信仰は、元来 「自然信仰」から発祥した「 循環 和合 現利思想 」と「 創造 」といった　我が国の「思想文化の特性」 がもたらした　と考えます。
そして、その「特性」は、そのあとの歴史、平安京、京都での、密教、浄土、禅、法華などの信仰や、建築、文学、絵画、諸道などの文化創出に、重層し影響をあたえ続けていきます。

日本民族形成 と 出雲 周辺　旧石器 ～ 縄文、弥生初期

文化人類学者「岡正雄」「樋口隆康」著書 から 編集

旧石器時代　約3万 ～約1万年前

縄文時代　約1万3,000～約2,400年前

弥生時代 約2,400年前
（紀元前400年頃）

列島文化の発祥　旧石器 から 縄文、弥生時代 への 種族・文化習合

「 種族・文化習合 」の 概要

旧石器時代　大陸の南方北方より古モンゴロイドが渡来
　細石刃伝播、1万年前の寒冷化以降は温暖化、中部以東に狩猟遺跡多

縄文から弥生時代　（縄文時代創世記、温暖化で大陸と別れる）
　南方の海洋文化、華中華南の照葉樹林文化
　（1）母系的・秘密結社的・芋栽培－狩猟民文化（縄文中期）
　（2）母系的・陸稲栽培－狩猟民文化（縄文末期）

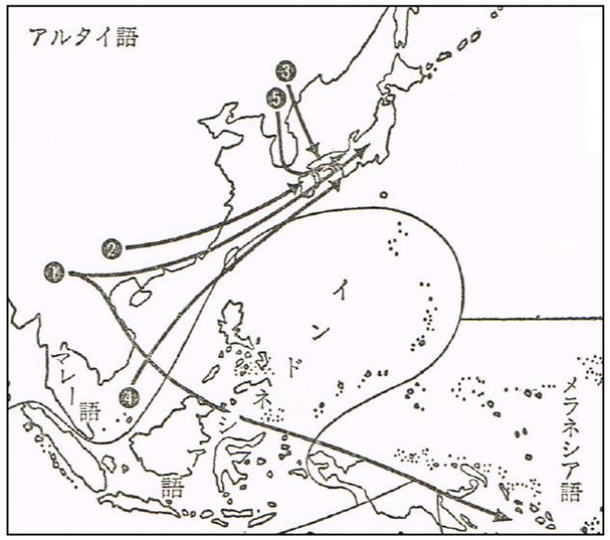
大陸の北方民族文化　（弥生初期～）
　（3）父系的・「ハラ」氏族的・畑作－飼畜民文化（弥生初期）
　父系祖先共同起源の観念に結ばれた外婚的父系親族集団 ハラカラ・ヤカラ

大陸の南方 水稲栽培と漁労
　（4）男性的・年齢階梯的・水稲栽培－漁労民文化（弥生初期）

大陸・半島の騎馬的支配文化　（弥生末期）
　（5）父権的・「ウジ」氏族的－支配者文化父系の親族集団

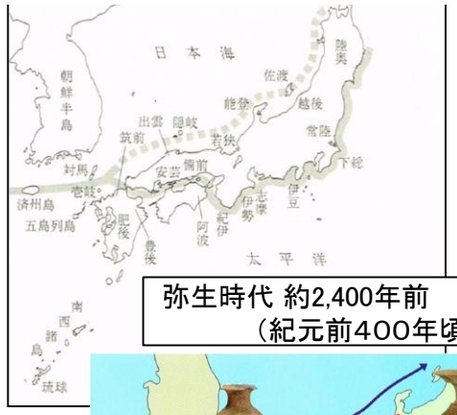
中国大陸の江南地方、オセアニア海洋民族の影響
　・トーテミズム　動物などを部族の始祖、守護霊とする思想
　「自分と似たようなもの」が祝福あるいは生命力を与えると考えられた。
　彼らは、部族ごとに石、光線、動物、植物とさまざまな形で表され、
　異なる世界から来る マナ を共有
　母系制 や イモ栽培、発酵保存食品、入れ墨、貝類での装飾などの風俗
東南アジア、インドネシアの影響　　・抜歯の風習

縄文時代 ① ②　　弥生時代 ③④ ⑤



文化人類学者「岡正雄」「樋口隆康」著書 から 編集

海人（海夫、海部）の道



弥生時代 約2,400年前
（紀元前400年頃）

列島に残る続文化　　東北部の続縄文　南西部の続弥生　沿岸地域の続海人・・・「木下忠」「網野善彦」著書から図引用

古事記 海人族 の 記憶　　海人族は航海に長じ、漁労も兼ねる海洋集団。 のち安曇/住吉・宗像氏族として名付く集団。
胎盤を海岸に埋めて海に流す習俗　江戸時代 漁民寄合「惣津」 済州島～北西九州 海上生活者「家船」などに、その足跡を残した。

安曇/住吉系海人　渡来当初、北九州海域を根拠地とし、のち瀬戸内海中心に沿岸と島々、さらに鳴門海峡を出て紀州沿岸を回り、伊勢湾に入り込み伊勢海人として一大中心点を構成した。　さらに外洋に出て東海道沿岸から伊豆半島ならびに七島の島々に拠点をつくった。 そして房総半島から常陸沿岸にかけ分布した。
山陰沿岸を北上した一族もあった。 出雲杵築、丹波安曇郷（和名妙）などに、安曇氏、海部氏の痕跡。

宗像系海人　手づかみ漁、弓射漁，刺突漁など潜水漁を得意とした。本拠を筑前宗像郡鐘ヶ崎に置き、筑後・肥前・壱岐・対馬・豊後の沿岸に進出、さらに日本海側では向津具半島の大浦、出雲半島と東進、但馬・丹波・丹後から 若狭湾に入り、能登半島・越中・越後・佐渡に渡り、羽後の男鹿半島に及ぶ。

「 古事記 原文」 変体漢文　岩波古典文学大系本（訂正 古訓古事記）　近代デジタルライブラリー　国宝「真福寺本」照合済

「伊邪那岐命 と伊邪那美命」

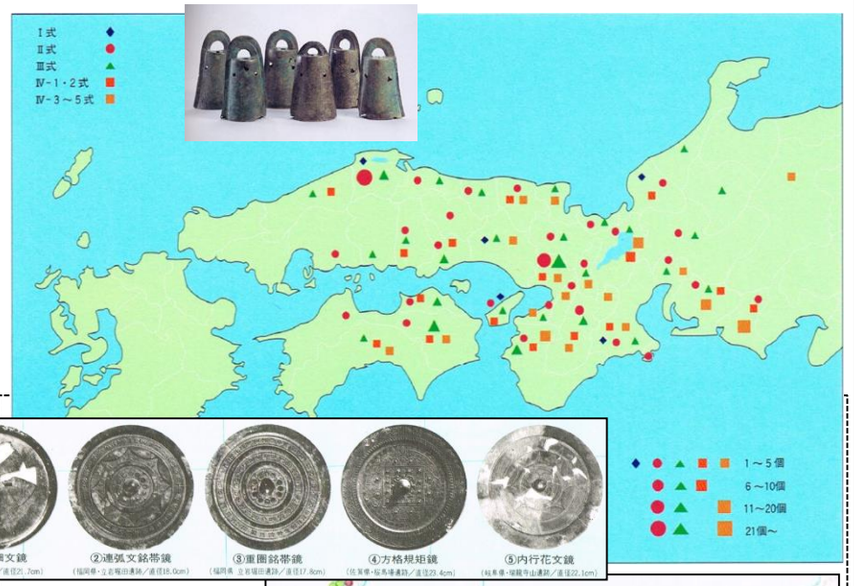
海神、名大綿津見神、次生水戸神、名速秋津日子神、次妹速秋津比賣神。自大事忍男神至秋津比賣神、幷十神。
（中略）次生**風神**、名志那都比古神、此神名以音。次生**木神**、名久久能智神、此神名以音。次生**山神**、名大山上津見神、次生**野神**、名鹿屋野比賣神。亦名謂野椎神。自志那都比古神至野椎、幷四神。
（中略）次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神。次底筒之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中筒之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神。訓上云宇閇。次上筒之男命。此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、**墨江**之三前大神也。於是洗左御目時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**。須佐二字以音。（中略）故、伊邪那岐大御神、詔速須佐之男命、何由以、汝不治所事依之國而、哭伊佐知流。爾答白、僕者欲罷妣國根之堅洲國。故哭。爾伊邪那岐大御神大忿怒詔、然者汝不可住此國、乃神夜良比爾夜良比賜也。自夜以下七字以音。故、其伊邪那岐大神者、坐**淡海之多賀**也。

「天照大神 と須佐之男命」

（前略）故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒、打折三段而、奴那登母母由良邇、此八字以音。下效此。振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而、自佐下六字以音。下效此。於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命。此神名以音。亦御名、謂奥津嶋比賣命。次市寸嶋上比賣命。亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。（・・・　注　宗像三女神の記述）
（中略）故、其先所生之神、多紀理毘賣命者、坐胸形之奥津宮。次市寸嶋比賣命者、坐胸形之中津宮。次田寸津比賣命者、坐胸形之邊津宮。此三柱神者、胸形君等之以伊都久三前大神者也。故、此後所生五柱子之中、天菩比命之子、建比良鳥命、此出雲國造、无邪志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牟國造、津嶋縣直、遠江國造等之祖也。次天津日子根命者、凡川內國造、額田部湯坐連、茨木國造、倭田中直、山代國造、馬來田國造、道尻岐閇國造、周芳國造、倭淹知造、高市縣主、蒲生稻寸、三枝部造等之祖也。

出雲と、奈良や 京都を結び付ける、歴史的な手掛かりはいくつもある。
縄文・弥生遺跡の分布、「神奈備　磐座」「銅鐸」「櫛描文土器」「出雲國造神賀詞」などである。
縄文時代は、山陰から近畿、中部、関東にかけ、他の地域と異なる「諸磯様式土器」遺跡が連なる。
「櫛描文土器」は「唐古・鍵遺跡」などから出土した、弥生時代通期、奈良の代表的古代遺物である。
「纏向遺跡」では、壊されたと考えられる「銅鐸」の破片が見つかっており、勢力交替の証との説もある。
また、奈良や京都では発見されていないが、「四隅突出墓」は、出雲と丹波、北陸を結ぶ重要な遺跡である。

諸磯様式土器
（埼玉）塚屋遺跡



「銅鐸」 出土分布

出雲から山陰、畿内及び瀬戸内と四国、そして中部地方へと、主たる出土地域を変遷しながら拡大した。
弥生時代を通じ、これら地域の、人々の交流、祭祀・文化の共通を証明する手掛かりである。当初は小型で
鐸鈴の形状　徐々に大型化　祭祀利用が主説。
神事で 銅鐸（鐸鈴）を鳴らす・・・下鴨神社（ 同社によると、この伝承は鎌倉時代まで遡り、現在も大切に
保存され、行われている ）

櫛描文土器
唐古遺跡

「櫛描紋 土器」 出土分布

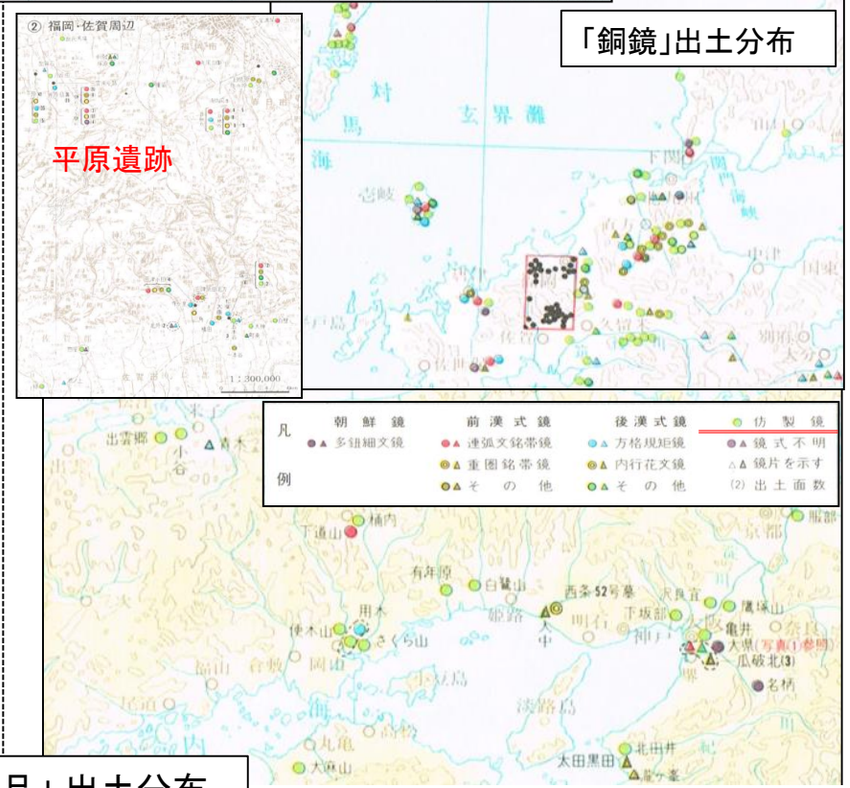
弥生式土器の紋様には、条痕紋、櫛描紋、縄紋、条痕紋十縄紋、櫛描紋＋縄紋、櫛痕紋＋櫛描紋
＋縄紋がある。 その中で、櫛描紋＋縄紋土器 は、弥生前期から中期にかけ地域を拡大し、
出雲の「布田遺跡」や、大和の「唐古・鍵遺跡」など、現在の中国地方から近畿地方にわたり出土される。
一方、九州や中部、関東では、その他の紋様土器が主に出土している。
この紋様の地域差、時代は、銅鐸の出土とも一致し、山陰から近畿、出雲と大和との文化伝播、交流を示す。

比較として 「銅鏡」 出土　　北九州から畿内へ　　「 織る文化 」 絹製品伝播と共通

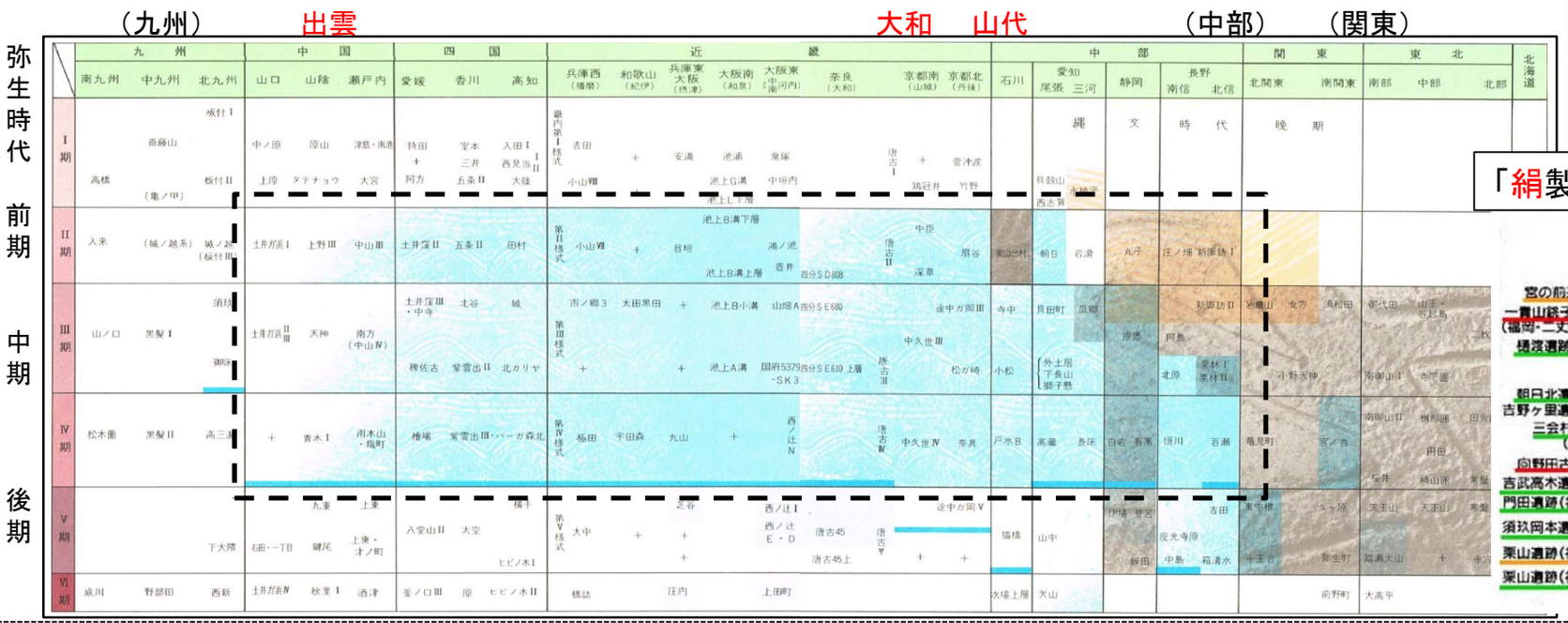
弥生時代の銅鏡には、朝鮮鏡・中国鏡・仿製鏡の三種類がある。
この内、朝鮮式は、中国大陸東北部、沿海州、朝鮮半島に分布するが、日本では九州から近畿で散見、出土は少ない。
弥生時代中期、北部九州では、甕棺墓に中国鏡が副葬され、この頃から信仰、勢力的性格を伴ってくる。
主に前漢式鏡である連弧文銘帯鏡・重圏銘帯鏡、草葉文鏡・星雲文鏡などが出土。
後期には、後漢式鏡である 方格規矩鏡、内行花文鏡に遷移する。
その弥生後期、中国地方から近畿、わずかであるが中部にも、仿製鏡（国産鏡）が急激に広まる。
銅鏡は宝器として珍重され、後期になって副葬され始めるようになった後漢鏡は、不老長寿への祈りを込めた文が
鋳出され、その鏡を持った人は長寿や子孫の繁栄が約されるというものだった。

内行花文鏡

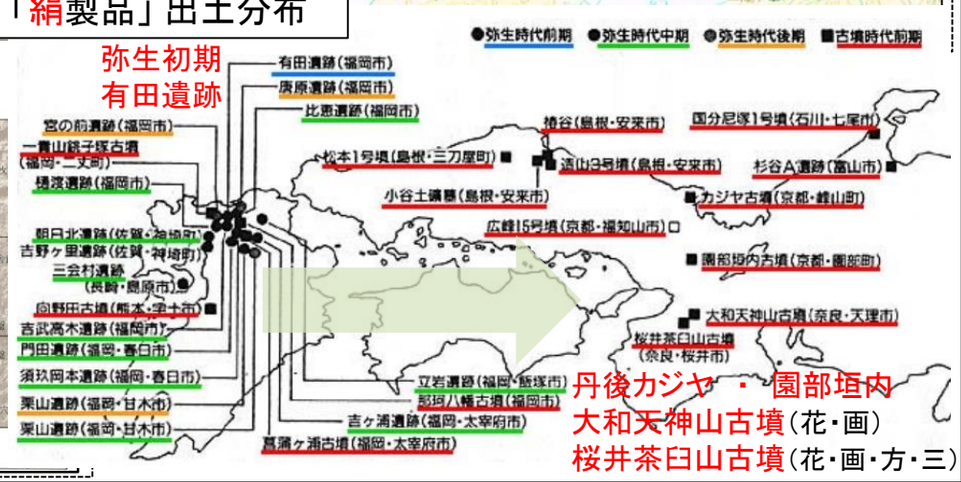
「銅鏡」出土分布



「櫛描紋土器」出土分布

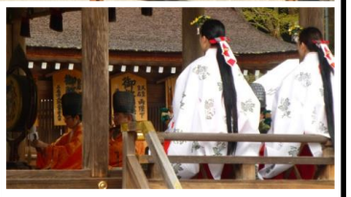


「絹製品」出土分布



「出雲大神宮」

京都市内より、西方、保津川の上流方向となる亀岡に所在する。 主祭神は、「大国主命」「三穂津姫命」である。
古来の磐座信仰に起源し、平城京遷都の直前、元明天皇期 和銅2年（709年）大神朝臣狛麻呂社により社殿が創建される。
927年成立の「延喜式」では、丹波国桑田郡「出雲神社」と記され、また、古来より霊験著しいとされる神を祀る「式内名神大社」（しきないみょうじんたいしゃ） 226社 313座 の1つとして列せられる。
平安時代中期に成立した「一の宮」の制では、「丹波国一の宮」とされ、律令制において国司が任国内で、初めに参拝する神社と定められた。
「一の宮」は、当時の国制毎に全国で68社あり、現在も、神社の歴史的価値を表現する敬称とされている。
出雲大神宮は、地理的には、東から順に、おおよそ滋賀の坂本、比叡山、上賀茂神社、愛宕山、そして西に延長した直線上に位置する。
そして、主祭神が「大国主命」（出雲 国津神系）「三穂津姫命」（天津神系）である事実は、ある時代における「出雲」から「丹波」、「大和」との勢力や 文化の共通性、さらには、国津神と天津神の「和合」が覗える。
この亀岡には、国津神、天津神、賀茂氏、秦氏たちを各系統とする神社が多く集まる。 多様な信仰、人々が混交した歴史的要所である。
亀岡を流れる保津川、桂川の下流には、同じ頃、古来の日吉からの磐座信仰「大山咋神」に、海神宗像の神「市杵島姫命」を加えて、秦氏が松尾大社を創建した。　そして、桂川と鴨川とは、784年に桓武天皇が長岡京と定めた場所で合流する。
桓武天皇は、大津京鎮護のため、大神神社から「大己貴神」を勧請した天智天皇の系統である。 のち、平安京遷都の際には、「大己貴神」と同じ出雲の神統である賀茂社を鎮護の社とする。 大同2年(807年)上賀茂神社の別雷神、下鴨神社の賀茂御祖神、ともに正一位となり、伊勢神宮に次ぐ地位が与えられた。『日本紀略』　現在、ここ大神宮では毎年4月18日、疫病祓いの「鎮花祭」が行われ、下賀茂神社からの玉串が筆頭に奉納、出雲と賀茂の関係が生きている。そして平安時代末期に初見される、雨乞いやその願済ましの意味を本来とする芸能、「出雲風流花踊り」が近代に復活され、この祭りに歴史を添える。



「三穂津姫」　（みほつひめ）　高皇産霊尊の娘で、大物主神あるいは大国主神の后。 『日本書紀』葦原中国平定の場面の第二の一書に登場 「保津川」由来の説がある。大己貴神（大国主）が国譲りを決め、幽界に隠れた後、高皇産霊尊が大物主神（大国主の奇魂・和魂）に対し「もしお前が国津神を妻とするなら、まだお前は心を 許していないのだろう。 私の娘の三穂津姫を妻とし、八十万神を率いて永遠に皇孫のためにお護りせよ」と詔した。　ミホツヒメの「ツ」は「の」の意味で、ミホの女神という意味になる。 出雲の美保神社（島根県松江市）では、大国主神の子の事代主神と祀られる。丹波の出雲大神宮（京都府亀岡市）では大国主神とともに主祭神となっており、大国主神の后とされている。村屋坐弥冨都比売神社（奈良県磯城郡田原本町）では大物主神とともに主祭神となっており、大物主神の后とされている。

「日本書紀　原文」 和化漢文体　　巻第二　神代下　第九段　第二節一書　「葦原中国平定」（国譲り）

於是、大己貴神報曰「天神勅教、慇懃如此。敢不從命乎。吾所治顯露事者、皇孫當治。吾將退治幽事。」
乃薦岐神於二神曰「是當代我而奉從也。吾將自此避去。」即躬披瑞之八坂瓊、而長隱者矣。故經津主神、以岐神爲鄕導、周流削平。
有逆命者、即加斬戮。歸順者、仍加褒美。是時、歸順之首渠者、大物主神及事代主神。乃合八十萬神於天高市、帥以昇天、陳其誠款之至。

時高皇産靈尊、勅大物主神「汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三穂津姫、配汝爲妻。宜領八十萬神、永爲皇孫奉護。」乃使還降之。即以紀國忌部遠祖手置帆負神定爲作笠者、彦狹知神爲作盾者、天目一箇神爲作金者、天日鷲神爲作木綿者、櫛明玉神爲作玉者。
乃使太玉命、以弱肩被太手繦而代御手、以祭此神者、始起於此矣。且天兒屋命、主神事之宗源者也、故俾以太占之卜事而奉仕焉。
高皇産靈尊因勅曰「吾、則起樹天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋矣。汝、天兒屋命・太玉命、宜持天津神籬、降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉。」乃使二神、陪從天忍穗耳尊以降之。

これにより、大己貴神は「天神の申出は過分なほどに行き届いており、おっしゃるように致しましょう。私が治めているこの地は皇孫が治めてください。私は退（しりぞ）いて幽事（かくれたること＝神事）を司りましょう」とお答えし、岐神（ふなとのかみ）を二神に薦めて、「この神が私に代わってお仕えします。私はこれから隠れます」と申されて、八坂瓊（やさかに＝大きな玉）を身につけて永久（とこしえ）に隠れられた。
そこで、經津主神は岐神を先導役とし、国中を巡りながら平定していった。反抗する者がいれば斬り殺し、従う者には褒美を与えた。この時、従った神の長は大物主神（おほものぬしのかみ）と事代主神（ことしろぬしのかみ）で、八十萬神を天高市（あまのたけち）に集め、皆を伴って天に昇り、本心を述べさせた（＝服従の誓をした）。高皇産靈尊は大物主神に「あなたが國神を娶るようなら、先の誓いを疑ってしまうので、私の娘の三穂津姫（みほつひめ）を妻にして欲しい。そして、八十萬神を率いて、永遠に皇孫を守って欲しい」と言われて、帰り降らせた。
紀國（きのくに）の忌部（いみべ）の祖神（とほつおや）の手置帆負神（たおきほおひのかみ）を作笠者（かさぬい）と定め、彦狹知神（ひこさちのかみ）を作盾者（たてつくり、たてぬい）とし、天目一箇神（あまのまひとつのかみ）を作金者（かなつくり）とし、天日鷲神（あまのひわしのかみ）を作木綿者（ゆふつくり）とし、櫛明玉神（くしあかるたまのかみ）を作玉者（たまする）とした。太玉命（ふとたまのみこと）が、『以弱肩被太手繦而代御手（よわかいなにふとたすきをかけて、みてしろとして＝若輩ではあるが立派な襷を掛けて、天孫に代わって）、大己貴神を祀るようになったのは、これが始まりである。天兒屋命（あまのこやねのみこと）は『主神事之宗源者也』、太占（ふとまに）によって仕えさせた。
高皇産靈尊は「私は天津神籬（あまつひもろき）と天津磐境（あまついはさか）を造り、皇孫のために祭祀をしよう。
天兒屋命と太玉命は、天津神籬を守って、葦原中國に降り皇孫のために祭祀をしなさい」と命じ、二神を天忍穗耳尊に従わせて降らせた。

出雲大神宮　　神体山 御蔭山
式内社（名神大社）、 丹波国一宮
創建年代　社伝、元明天皇期　和銅2年（709年）社殿創建
大神朝臣狛麻呂　　現社殿 1305年足利尊氏
大国主命　縁結び・金運一福の神
三穂津姫命　五穀豊穣の神
高産霊尊の子で、大国主の国譲りの際に大国主の后となったと伝えている。　保津川名 由来伝承
天夷鳥命（あめのひなどりのみこと）出雲国造りの神
上の社
素戔嗚尊（スサノオノミコト）厄難消滅の神
櫛稲田姫尊（クシイナダヒメノミコト）家内安全の神
笑殿社
事代主命（コトシロヌシノミコト）商売繁昌の神
少那毘古名命（スクナヒコナノミコト）医薬・健康の神
稲荷社
宇迦之御魂神（ウカノミタマノカミ）五穀豊穣・商売繁昌の神
春日社
建御雷之男神（タケミカヅチノオノカミ）武勇の神
（磐座）天児屋根命（アメノコヤネノミコト）受験・勉学の神
辨財天社
市杵島姫命（イチキシマヒメノミコト）財運・女性・芸能の神
黒太夫社
猿田毘古神（サルタヒコノカミ）導きの神
大山祇神（オオヤマツミノカミ）山の神
崇神天皇社
崇神天皇（スジンテンノウ）第10代天皇
御蔭山（御神体山）
国常立尊（クニノトコタチノミコト）国土安泰の神

考古前提　出雲 と 大和・京都　　信仰・文化・氏族を繋なぐ 証

出雲と、奈良や京都を結び付ける、歴史的な手掛かりはいくつもある。

「高鴨神社」　「葛木御歳神社」　「 鴨都波神社」　「飛鳥坐神社」　「賀茂御祖神社」

京都の、鴨、加茂の源流となる、奈良の「高鴨神社」。 京都を含む、全国の鴨（賀茂・加茂）神社の総社である。
大和朝廷成立以前、奈良盆地の西南端に勢力していた鴨族たちの本拠である。
　この地域は、南方吉野川沿いの「宮滝遺跡」などに痕跡する縄文狩猟生活を基層にしている。 同社や、近隣の南郷住吉神社、高天彦神社では秋祭りに栗の木を中心とした祭祀が現存し、その名残りを繋いでいる。
　弥生稲作生活の遺構は、「高鴨神社」から、北東方向の「葛木御歳神社」さらに低地に下った「鴨都波神社」（祭神 事代主神など）周辺にある。 そして古墳時代は、秋津遺跡、極楽寺ヒビキ遺跡、南郷遺跡に、その勢力の強さを留める。
また、「飛鳥坐神社」は、それら西方に位置し、大神神社周辺との中間地点であり、大国主の第一子で、国譲りした「事代主神」や　飛鳥神奈備三日女神（加夜奈留美命）などを祭神とする。
「山代國風土記」に、賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭神である賀茂建角身命について、「大倭の葛木山の峯に宿り坐し・・・」と記し、鴨県主の祖となるその神が、高鴨神社地域に暮らした鴨族と関係していることを示す。
神事で 銅鐸（鐸鈴）を鳴らす・・・下鴨神社 (同社によると、この伝承は鎌倉時代まで遡り、現在も保存され、行われる)

（ Ⅰ式：弥生前期　　Ⅱ Ⅲ Ⅳ式：中期　　Ⅴ期　後期 ）

飛鳥坐神社

「高鴨神社」　「出雲國造神賀詞」

出雲の大穴持命（大国主命）の子「阿治須岐高日子根命（迦毛之大御神）」を主祭神とし、「下照比売命・天稚彦命」を配祀する。
そして「出雲國造神賀詞」の中で、その主祭神は、他の出雲の四神の一柱として「皇孫ノ命の近き守神」と、語られている。
また、「坐せ」と奏上した「高鴨神社」所在地など、四つの場所は、「日本書紀」神武東征の際の、守る大和側の警護の要地でもある。

「出雲國造神賀詞」は、奈良時代以前から行われていた、出雲国造による朝廷への忠誠表意である。（延喜式所収内容）
国造の就任行事の一部として、朝廷に参向。 献物を捧げ、この「神賀詞」を奏上した。
　記録では、『続日本紀』 霊亀2年（716年）出雲臣果安（「出雲風土記」を勘造した広嶋の父）による奏上が初見。また、この頃、出雲の勢力が、その地域内で、東部「熊野大社」の地から、西部「出雲大社」の地に、本拠を変遷したとも考えられている。
『続日本後紀』によると、その後「出雲國造神賀詞」は、平安京が落ち着いた頃、天長10年（833年）まで実施されていたとされる。
この詞や「出雲風土記」では、藤原氏が春日大社祭神とした氏神 「建御雷之神」は登場しない。

「出雲國造神賀詞」　　以下の「高御魂命」は、古事記の「高御産巣日神」のこと　　同様に、「天穂比命」は「天之菩卑能命」で、葦原中国を平定するために最初に高天原から派遣されたが、大国主神に媚へつらって復奏せず、のちに)出雲国造（いずものくにのみやつこ）らの祖先とされる神のこと

八十日日（やそかび）はあれども、今日の生日の足日に、出雲国々造（某）、恐みかしこみも申し賜わく、
かけましくもかしこき明きつ御神と、大八嶋國しろしめす、天皇（すめら）命の大御世を、手長の大御世といわいとなして（もし後のいわいの時には後の字を加えよ）
　出雲の國の青垣山の内に、下つ石根に宮柱太く知り立て、高天原に千木高く知りいます、伊射那伎の日眞名子、加夫呂伎（かぶろぎ）熊野大神、櫛御氣野命（くしみけぬのみこと）、國作りましし大穴持命（おおなもちのみこと）、二柱の神を始めて、百八十六（ももやそあまりむつ）社にいます皇神等（すめがみたち）を、（それがし）が弱肩に太襷（ふとだすき）取りかけて、いつ幣（ぬさ）の緒を結び、あめのみかびかぶりて、いずの眞屋に、麁草をいずの席（むしろ）と苅り敷きて、いつへ黒益の、あめのみかわに齋こもりて、志都宮に忌い静め仕へ奉りて、朝日の豊榮とに、祝いの返事（かえりごと）の、神賀（かむほぎ）の吉詞（よごと）、奏し賜はくと、奏す。

高天の神王、高御魂命の、皇御孫の命に、天の下大八嶋國を事避しまつりし時、出雲臣等が遠ツ神、天穂比命を、國體見に遣はしし時に、天能八重雲を押別けて、天翔り國翔りて、天ノ下を見廻りて、返事申し給わく、

豊葦原の水穂ノ國は、昼は五月蝿なす水沸き、夜は火瓮の如く光く神在り。　石根・木立・青水沫も事問ひて、荒ぶる國あり。然れども鎮め平げて、皇御孫ノ命に、安國と平けく知ろしまさしめんと申して、己ノ命の皇子天夷鳥命に、布都怒志命をそえて、天降し遣わして、荒ぶる神等をはらい平け、國作之大神をも媚び鎮めて、大八嶋國の現ツ事・顯事事よさしめき。

すなわち大穴持命の申し給わく、皇御孫ノ命の静まり坐を大倭國と申して、己ノ命の和魂を、八咫ノ鏡に取つけて、倭ノ大物主櫛厳玉命と御名をたたえて、大御和の神奈備に坐せ、
己ノ命の御子 阿遲須伎高孫根ノ命 の 御魂 を、葛木の鴨　の 神奈備　に坐せ、
事代主命の御魂を、宇奈提に坐せ、賀夜奈流美命の御魂を、飛鳥の神奈備に坐せて、皇孫ノ命の近き守神と貢り置きて、八百丹杵築ノ宮に静まり坐しき。

是に親神ろき・神ろみノ命宣りたまはく、汝天穂比命は、天皇命の手長大御世を、堅石に常石にいわいまつり、いかしの御世にさきわへまつれと仰せ賜しつぎてのままに、供齋（もし後のいわいの時には、後ノ字を加えよ）仕へまつりて、朝日の豊榮登りに、神のいやしろ・臣のいやしろと、御祷の神寶、たてまつらく、と奏す。

白玉の大御白髪まし、赤玉の御あからびまし、青玉の水ノ江ノ玉の行きあいに、明ツ御神と大八嶋國しろしめす、天皇命の手長大御世を、御横刀（みはかし）廣らにうち堅め、白御馬の前足ノ爪・後足（しりへあし）ノ爪、踏立つる事は、大宮の内外の御門の柱を、上つ石根に踏堅め、下つ石根に踏凝らし、振立つる耳のいや高に、天下をしろしめさむ事のしるしのため、白鵠（しらみどり）の生御調（いきみつき）のもてあそびものと、倭文（しず）の大御心もたしに、彼方（おち）の古川岸、此方（こち）の古川岸に、生い立つ若水沼間の、いや若えに御若えまし、すすぎ振るおどみの水の、いやおちに御おちまし、まそひの大御鏡の面を、おしはるかして見そなす事のごとく、明ツ御神の、大八嶋國を、天地日月と共に、安らけく平らけく　しろしめさむ事のしるしのためと、御祷ノ神寶をささげもちて、神の禮白（いやしろ）・臣の禮白と、恐みかしこみも、天ツつぎての神賀の吉詞、もほし賜はく、ともおす。

　平安時代初期、出雲国の神についての記述。　天長10年（833）、奈良時代から平安初期にかけての令に関する諸家の説を公定した「令義解」が清原夏野らにより奏上、翌年施行された。
その中で、『 天神とは、伊勢・山城の鴨・住吉・出雲国造の斎く神等類これなり。 地祇とは大神・大倭・葛木の鴨・出雲の大汝神等類これなり 』　この解釈の根拠は、天平10年（738）頃、成立の大宝令の注釈書である「古記」の説とされる。その「古記」は、養老令の注釈書として、860年頃に編纂された「令集解」に含まれる。　「令集解」は、惟宗直本という学者による私撰の注釈書であり、天神地祇の区別に公の根拠は無い。 それよりも、平安時代初期においても、古来からの出雲や鴨への注目、信仰の強さが、受継がれていることに着眼したい。

記紀と史実　考古 と 記紀集約 から仮説　倭での 二つの和合

和合思想

神武天皇、崇神天皇、この時代には以下の通り、考古学的に二種の新しい動きが認められる。
考古的内容、記紀、その他文献を並列し、時代別で横に同期させた。
先入していた大和の氏族や信仰と習合し、和合していくことに注目したい。なぜなら戦乱を示す人骨出土は多くない。 以下掲載の各古墳の年代順は詳細には特定されていないが、概略、副葬鏡種の増加がその証と解釈できる。

考古的資料　　記紀

縄文晩期
弥生前期
前400年頃

出雲　　大和

出雲 から 丹波、淡海、大和へ弥生中期（紀元前200～紀元後50年） 全盛
（後期にかけ、新勢力の流入を受けて、各地方勢力に分断）

中期

加茂岩倉遺跡　　神庭荒神谷遺跡

銅鐸 畿内との流通　　出雲型銅剣 製作

唐古・鍵 遺跡　弥生時代通期
中期～後期全盛全国から ヒスイ、土器など集積
銅鐸の主要製造地

中期後半
紀元前後

銅鐸
大量埋納

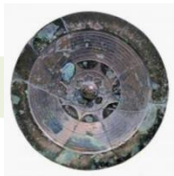
主 に 銅剣
銅矛・銅鐸
大量埋納

丹波畿内勢力
吉備勢力

後期
50年

九州勢力　神武天皇
弥生中期までは 北九州を主とした 鏡威信
内行花文鏡
後期には仿製鏡分布 が中国、近畿以東 に及ぶ

出雲・山陰 勢力維持



大和盆地 西方
鴨族との習合

弥生
終末
200年～
250年頃
古墳時代
初期

弥生後期　平原遺跡
大型内行花文鏡
内行・方格規矩鏡

四隅突出墓
西谷古墳群

（古墳時代前期）
神原・大成・造山
三角縁神獣鏡

古墳時代前期衰退
248年頃
「卑弥呼」没

崇神天皇

古墳時代 初頭
内行花文鏡 と 画紋帯神獣鏡
ホケノ山　大和天神山古墳

画紋帯神獣鏡は、大阪湾
周辺地域に、拡大集中

黒塚古墳　画紋・三神
桜井茶臼山　花紋・画紋・方格・三神
椿井大塚山　花紋・画紋・方格・三神

前方後円墳
鉄器

300年頃

三角縁神獣鏡
北九州
　石塚山　舶載
　3C中～4C初
　原口古墳（初頭）
　赤塚古墳3C末
南九州
　西都原3C中

石塚山、赤塚、原口
椿井大塚山は
同笵鏡とされる

出雲　4C中
神原神社古墳
景初三年銘 三神

350年以降　三角縁神獣鏡　急減
柳本古墳群も衰亡
崇神天皇御陵とされる古墳群一帯

400年代

＊ ホケノ山の内行花文鏡は長宣子孫の銘　現大神神社が保存

大和盆地 東方

纒向 遺跡
180～350年

200年代前半
大型掘立柱建物
突線鈕式銅鐸 破片

3C中～後半
ホケノ山古墳
箸墓古墳

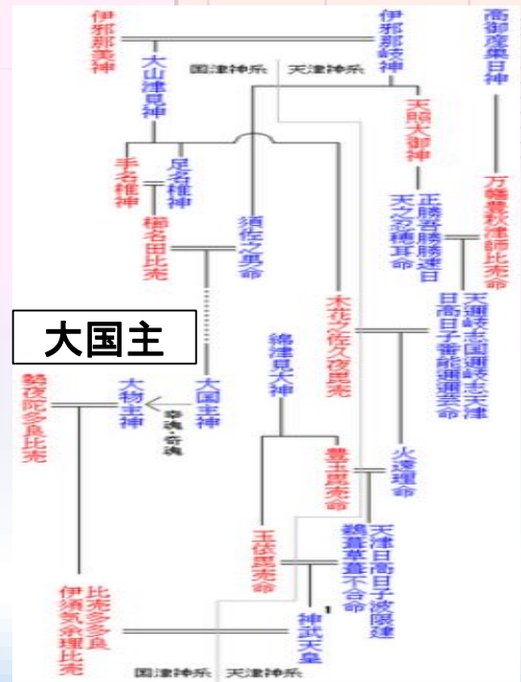
画紋帯神獣鏡

垂仁天皇、景行天皇
纒向之日代宮 時代

出雲神武系・崇神系
氏族和合

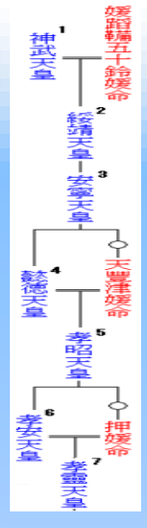
国譲 神話

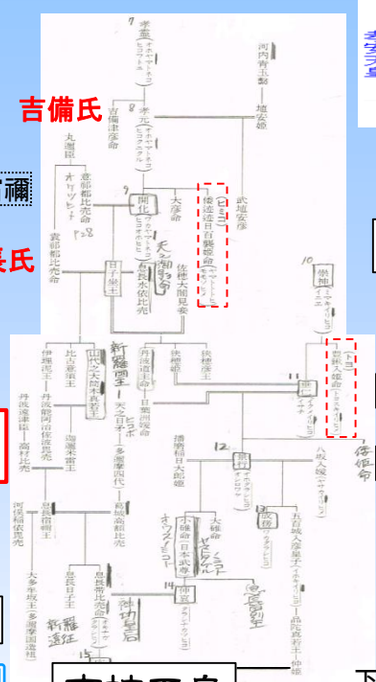
弥生末期～古墳時代前期　中国　三国～五胡十六国時代



神武天皇から
孝元天皇まで

神話時代





下段 系図出展
林屋辰三郎 氏

史実時代

その他 文献など

前150年頃　稲作文化
　九州より畿内に伝来
前100年頃　銅鐸の鋳造開始

皇統との姻戚・血縁
　大国主・・・日本書紀
　事代主　鴨氏
　・・・日本書紀の一書や先代旧事本紀

100年頃　大和を中心に小国家出現

100年後半「倭国乱る」
　邪馬台国卑弥呼の共立
　・・・出典「魏志倭人伝」

250年前後　内乱と収束
　「国中不服」「壱与～國中遂定」
　・・・出典「魏志倭人伝」

皇統との姻戚・血縁
　息長氏・吉備氏・丹波氏・葛城氏

350年前後　蝦夷・熊襲を平定
　統一と県の制定
古墳文化の伝播　丹波　吉備　越　東海

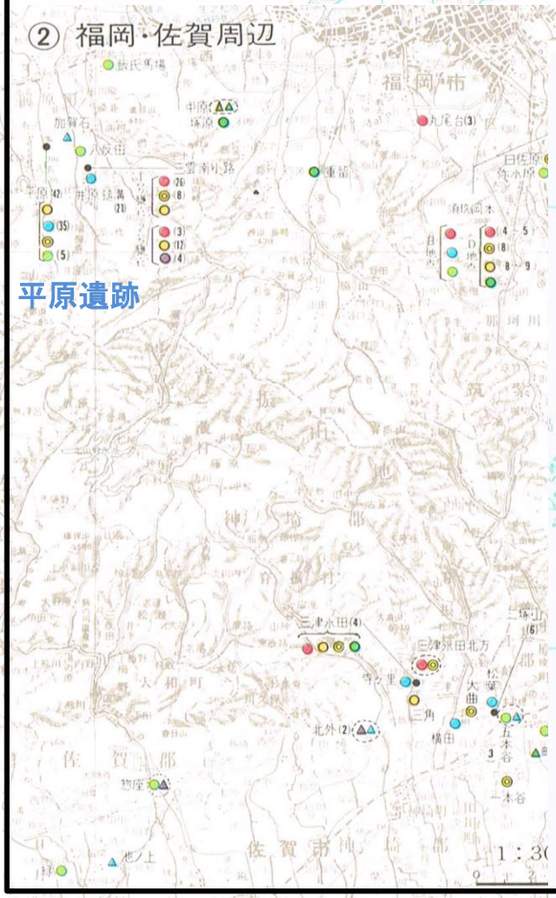
391年　新羅を征伐
　・・・　出典「広開土王碑」
400年代　応神天皇 即位
　（南山代葛城・息長王系）

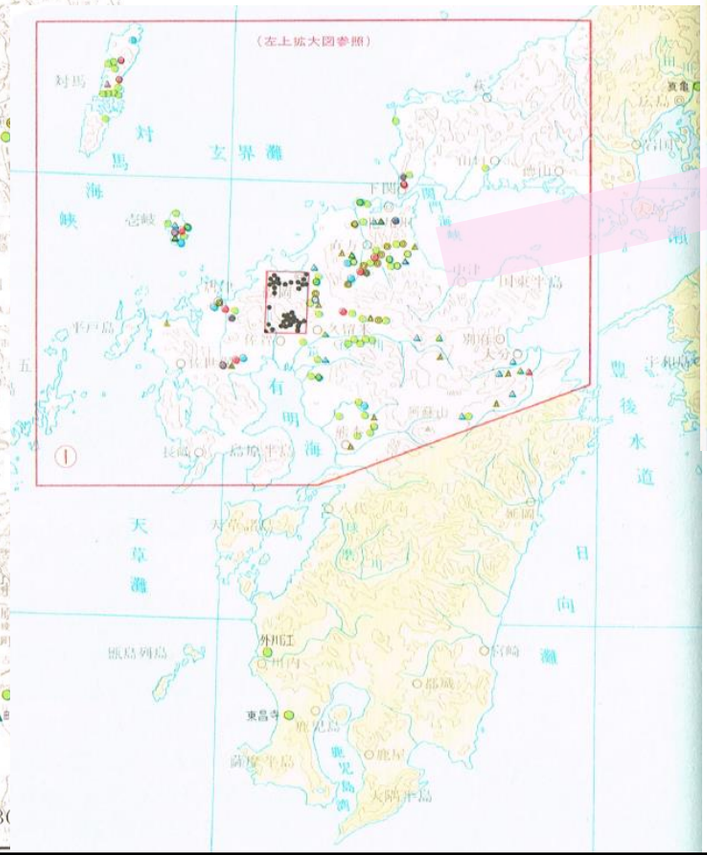
① 直前　畿内の状況　新式銅鐸
淡海に大型が多く出土　唐子・鍵遺跡に製造跡

② 北九州勢力の存在
弥生後期、後漢式鏡（方格規矩鏡、内行花文鏡）
弥生後期には、仿製鏡分布 が 中国、近畿以東 に及ぶ

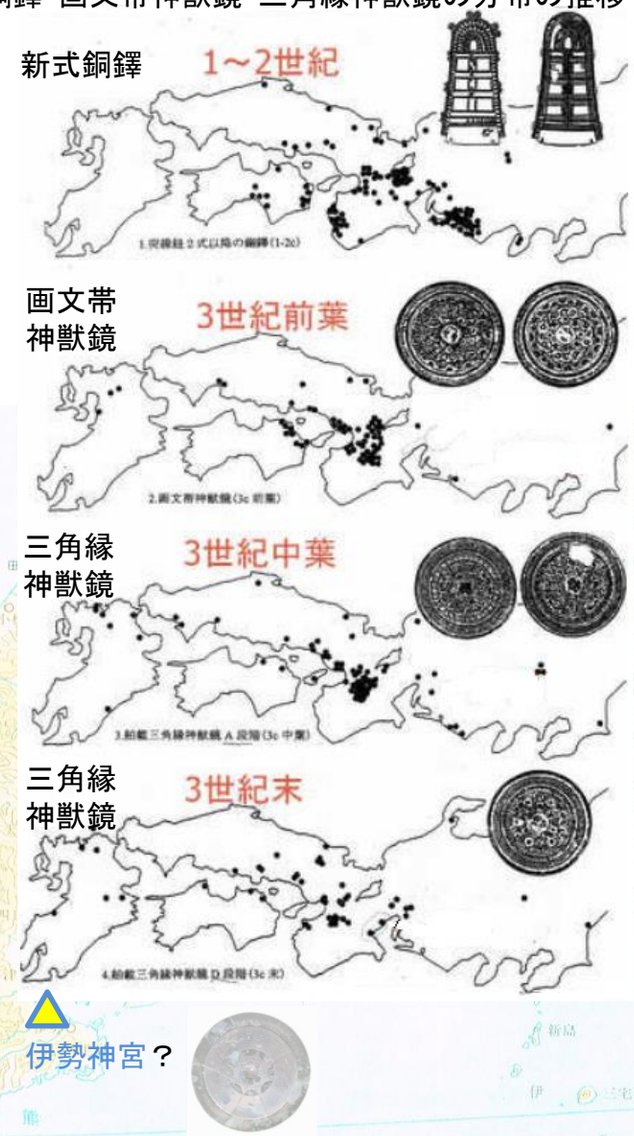
内行花紋鏡　畿内伝来の後は
③ 畿内、大阪湾周辺のまとまり　画紋帯神獣鏡

④ 瀬戸内周辺への拡大　三角縁神獣鏡

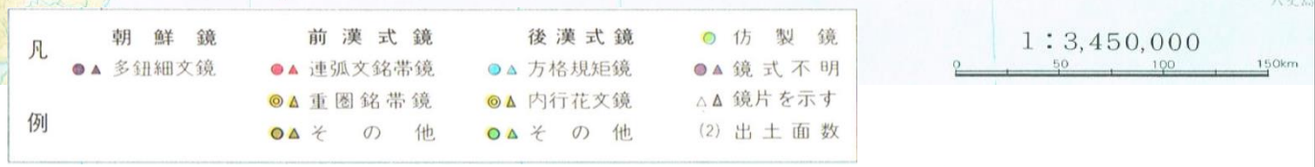




新式銅鐸・画文帯神獣鏡・三角縁神獣鏡の分布の推移



考古学者（原田大六氏、森浩一氏）は、「皇太神宮儀式帳」の本鏡内容器の記事などを元に、福岡県糸島市にある平原遺跡出土の大型内行花文鏡（46.5cm）と、同様の大きさ文様と推定。
九州からの神武東征に表現され、のちに祭器となる 鏡文化の流入



①多鈕細文鏡（大阪府・大県遺跡／直径21.7cm）　②連弧文銘帯鏡（福岡県・立岩堀田遺跡／直径18.0cm）　③重圏銘帯鏡（福岡県 立岩堀田遺跡／直径17.8cm）　④方格規矩鏡（佐賀県・桜馬場遺跡／直径23.4cm）　⑤内行花文鏡（岐阜県・瑞龍寺山遺跡／直径22.1cm）

日本文化 の 原理 と 源流

＜ 原理構築　神の思想形成 まで　「古事記」 ＞

Foundation of Kyoto culture
Principle & Origin of Japanese culture

古事記には、その当時の日本人の「自然」への価値観が描かれている。それは、奈良から平安、そして安土桃山から江戸時代へと、表現を多様し継承される。『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』などの韻文「上代歌謡」、「和歌」の世界で、季節、植物、風景は、歌の舞台や比喩となった。
飛鳥・奈良時代の衣装から始まる「彩」と呼ばれる「色彩」では、空の移ろいを表現した。 平安時代の「大和絵」では、「平等院鳳凰堂壁扉画」、東寺伝来「山水屏風」、「鳥獣人物戯画」など、樹木や動物など 自然への憧憬が描かれた。「源氏物語」で語られた四季花鳥は、「絵巻」で再現され、「雅」な色彩となり、やがて安土桃山時代の襖絵で、金、墨と和合し、「絢」として絢爛する。 作庭やその鑑賞は、平安王朝の別業や浄土寺院、桃山では武家・茶室前庭、江戸初期には貴族や大名の大規模庭園にまで発展。 現代でも、社寺、遊興施設、住宅と一体となり、その価値を高めている。

その古事記の中で、「自然」は、どの様に尊厳され、その信仰は、いつ発生した と語られているだろうか？　その時代特定と併せて、以下に検証したい。
古事記が完成したのは、奈良時代、和銅5年712年　元明天皇の時代である。 その時から遡り、時代特定の手掛かりはどこに語られているだろうか？　たとえば、長い物語でも最初の部分となる、「伊邪那岐命と伊邪那美命」の物語で登場する地名、神社所在地。それは、現代に伝わる「墨江」（大阪の住吉大社の地）、「淡海之多賀」（滋賀の多賀大社の地）である。しかしながら、物語はまだ「天照大御神、月讀命、須佐之男命」が誕生したばかりで、神話の最中である。信仰起源としては、大変興味深い記述であるが、神社創建のことではないため、時代特定には利用できない。 その後、「天の岩屋戸」「天孫降臨」として 神々の誕生期が終わり、「神武東征」を経て、ようやく「垂仁天皇」、「景行天皇」時代の**纒向之日代宮**が登場する。これは、考古学上「纒向遺跡」と照合できる、 物語で（実在の是非が問われる天皇陵以外）初めて登場する手掛かりである。 その場所からは、古事記にも登場する古代祭祀の供物 桃の実や、大集落遺跡・建築物・西日本から関東の外来土器が発掘され、また日本史上初の前方後円墳を含むことから、弥生時代から古墳時代への転換期、200年から350年と時代推定、学会の主論とされる。 つまり、古事記に戻ると、「景行天皇」前後数代の時期が、弥生時代末期から初期古墳時代と結論できる。 250年頃と推定されている「箸墓古墳」倭迹迹日百襲姫命（宮内庁治定）は、立地、時代とも近隣である。
以上、念の為、古代史と古事記を同期させた。したがって、古事記に登場する神々は、その「纏向遺跡」以前、縄文から弥生時代にかけ誕生したことになる。すなわち人々が狩猟、稲作で生活していた時代である。その神々の内、具体的に役割・由来が記載されているのは、以下掲載の「古事記原文」下線部分である。そこでは、海神、水戸（河口）神、風神、木神、山神、野神が誕生する、このあと誕生する神々も考慮すると、特に 海（水）、山の関係の神々が多い。 つまり、アマテラスやスサノオ、オオクニヌシが誕生する前に、彼らより重要な神々として誕生させたことに高い価値観、信仰が伺える。 さらに、彼らやその子孫は 海神・山神の姫たちを妻とする。 天孫降臨する邇邇藝命の妻は、**山神**大山上津見神の娘「木花之佐久夜毘売（コノハナノサクヤビメ）」、また、神武天皇の母も**海神**大綿津見神の娘「玉依毘売命（タマヨリビメ）」である。通観すると、自然神から皇神への神概念、信仰の遷移が浮き彫りとなる。 そして、またここでも母系による**「和合」**が表現されていることに注目したい。
古代日本で、自然は、狩猟の山麓、稲作の水など、現実の生活に「恩恵・現世利益」をもたらし、一方では猛威を振るう「畏怖」の対象である。そこに魂を感じ、木、草、山、川、岩、嵐、雷などを対象に「自然信仰」が発生した。その価値観が古事記で神々の有り様に描かれている。「神山・神奈備磐座」などの存在も、その地域の「現世利益」を願う「自然信仰」の証だ。

「 古事記 原文 」　変体漢文　岩波古典文学大系本（訂正 古訓古事記）　近代デジタルライブラリー　国宝「真福寺本」照合済

「伊邪那岐命　と伊邪那美命」

（前略）既生國竟、更生神。故、生神名、大事忍男神。次生石土毘古神、訓石云伊波、亦毘古二字以音。下效此也。次生石巣比賣神、次生大戸日別神、次生天之吹上男神、次生大屋毘古神、次生風木津別之忍男神、訓風云加邪、訓木以音。次生海神、名大綿津見神、次生水戸神、名速秋津日子神、次妹速秋津比賣神。自大事忍男神至秋津比賣神、幷十神。
此速秋津日子、速秋津比賣二神、因河海持別而、生神名、沫那藝神、那藝二字以音。下效此。次沫那美神、那美二字以音。下效此。次頬那藝神、次頬那美神、次天之水分神、訓分云久麻理。下效此。次國之水分神、次天之久比奢母智神、自久以下五字以音。下效此。次國之久比奢母智神。自沫那藝神至國之久比奢母智神、幷八神。
次生**風神**、名志那都比古神、此神名以音。次生**木神**、名久久能智神、此神名以音。次生**山神**、名大山上津見神、次生**野神**、名鹿屋野比賣神。亦名謂野椎神。自志那都比古神至野椎、幷四神。
（中略）
於是詔之、上瀬者瀬速、下瀬者瀬弱而、初於中瀬墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神。訓禍云摩賀。下效此。次大禍津日神。此二神者、所到其穢繁國之時、因汚垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、神直毘神。毘字以音。下效此。次大直毘神。次伊豆能賣神幷三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神。次底筒之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中筒之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神。訓上云宇閇。次上筒之男命。　此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。　其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、**墨江**之三前大神也。於是洗左御目時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**。須佐二字以音。（中略）故、伊邪那岐大御神、詔速須佐之男命、何由以、汝不治所事依之國而、哭伊佐知流。爾答白、僕者欲罷妣國根之堅洲國。故哭。爾伊邪那岐大御神大忿怒詔、然者汝不可住此國、乃神夜良比爾夜良比賜也。自夜以下七字以音。故、其伊邪那岐大神者、坐**淡海之多賀**也。

「天照大神　と須佐之男命」

（前略）故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒、打折三段而、奴那登母母由良邇、此八字以音。下效此。振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而、自佐下六字以音。下效此。於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命。此神名以音。亦御名、謂奥津嶋比賣命。次市寸嶋上比賣命。亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。
（中略）又食物乞大氣津比賣神。爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稲種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神產巢日御祖命、令取茲、成種。
（中略）故、其櫛名田比賣以、久美度邇起而、所生神名、謂八嶋士奴美神。自士下三字以音。下效此。又娶大山津見神之女、名神大市比賣、生子、大年神。次 **宇迦之御魂神**。
（中略）天之冬衣神。此神、娶刺國大上神之女、名刺國若比賣、生子、大國主神。亦名謂大穴牟遲神、牟遲二字以音。亦名謂葦原色許男神、色許二字以音。亦名謂八千矛神、亦名謂宇都志國玉神、宇都志三字以音。幷有五名。

「崇神天皇」

卽以意富多多泥古命、爲神主而、於御諸山拜祭意富美和之大神前、又仰伊迦賀色許男命、作天之八十毘羅訶、此三字以音也。

「景行天皇」

大帶日子淤斯呂和氣天皇、坐**纒向之日代宮**、治天下也。此天皇、娶吉備臣等之祖、若建吉備津日子之女、名針間之伊那毘能大郎女、生御子、櫛角別王。次大碓命。次小碓命。亦名倭男具那命。

日本文化の特性を検証するため、古事記を手掛かりに、古代の「自然」に対する高い価値観を確認した。 また、その発祥時期を自然の神々誕生と記された縄文、弥生時代とした。
ここでは、我が国の自然環境とその特性の関係について考えてみたい。 先人の様々な研究成果を元にし、さらに追論して、その関係を明らかにしていきます。

古代日本で、自然は、狩猟の山麓、稲作の水など、現実の生活に「恩恵・現世利益」をもたらし、一方では猛威を振るう「畏怖」の対象である。そこに魂を感じ、木、草、山、川、岩、嵐、雷などを対象に「自然信仰」が発生した。 その価値観が 古事記で神々の有り様に描かれているのである。 「神山」、「神奈備　磐座」などの存在も、その地域の「現世利益」を願う「自然信仰」の 証である。
以上の様に、思想の発生理由を仮説した。 しかし、この様な生活は日本だけでは無い。 地球上の人々は、その時代や期間は違うが、狩猟と農業という総論では、同じ様な生活をしていた。
では、日本固有と言える他の理由が、他にあるはずである。 その理由は「国土の立地・地形」と「気候」、そこからもたらされる「自然環境」にあると考えます。 以下に、その根拠を明らかにします。

この地球の自転により、地表付近に発生する偏東風は、大陸の西側に乾燥した地中海気候を生じさせる。 エジプト・メソポタミア・インダスという世界3大文明は、いずれも地中海的気候を持つ畑作牧畜文明地帯である。 そのため、西欧の畑作牧畜文明は、環境の変化や消費、集団の拡大に、乾燥地帯での畑作生産が追いつかず、新たな場所に移動、時には 征服する必要があった。
一方、我が国の縄文時代、また縄文から弥生時代への移行期には大きな騒乱も無く「和合」が進められた。 その歴史の源は、「列島を取り巻く環境がもたらす山からの恩恵」である。 暖流が温暖と、豊富な雨量をもたらし、森林を育む。 そして山の水が川となり下流に集まる。 その水は森が生んだ栄養含み、川や沿岸を、貝や魚の良き生き場とする。 縄文時代においては、その多くの河川、山麓環境で採種・漁撈を分かち合った。 それは、気候が一定の範囲で定まると、安定かつ豊富な自然を循環させるからである。 西欧と比較し明らかに生活環境は異なる。
弥生時代への移行では、漁撈を共通に、採集に水稲稲作が加わり、次第に稲作が主となる。 ここでも大きな混乱はなかった。なぜか？　もともと陸稲の生産効率を改善する水稲であり、先住者の狩猟、漁撈とは棲み分けられた土地活用だからである。 漁撈技術にも好影響があったに違いない。 また、山、森林からの恩恵を共通、つまり価値観も異ならないからである。
同じ価値観は、信仰を違えず、自然の循環サイクルの中で「和合」した。 その前提条件は、自然への 感謝と畏怖 である。

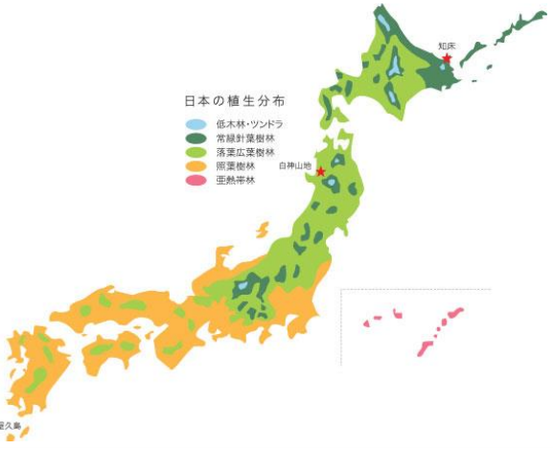
その自然循環は、天地の柱、生死の「循環思想」をもたらした。　のちの仏教伝来 「彼岸と此岸」「浄土信仰」 が、我が国で根付いた理由でもある。
信仰の遺跡　天と繋ぐ柱、再生思想
・環状列石（ストーンサークル）環状土籬（周提墓）環状木柱列（ウッドサークル）　古事記 「 伊邪那岐命と伊邪那美命 」より　於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿
「円＋柱」で 生活の場「村・大地」そして「山」「神奈備山」へと広がったのではないか。　諏訪大社　御柱祭　出雲大社の心御柱、伊勢神宮心御柱はそんな縄文の祭祀の今の姿。
・土偶　埋葬　再生信仰　屈葬、村の中心に墓地、周縁に居住地　祖先崇拝。 死産児の遺骨を、住居近辺のトイレや玄関など、女性がよくまたぐ場所に埋葬して再生を願う、近年まで残った風習
四季を持つ「日本の森」があって初めて生まれた言葉、そうした風土で生まれ育った日本人だからこそ、自然の音を捉えそれを言葉に置き換えるという、たぐい稀な資質を有していた。
日本特有というべき無数の「擬態語・擬音語・擬声語」、それに「言霊（ことだま）」という思想がある。
日本では「もの」という言葉に、物質以外の要素を詰め込んできた。「物思い・物語・物静か・物の怪・物のあわれ・物忌み…」と、物質でないモノには事欠かない。 その一方でモノづくりの場においても、モノに魂を吹き込むという日本人の特性に、「マナ」という（モノに霊性を認める）心根の継承がある。
語源的に見ても「マナ」と「モノ」とは共通性がある。 交易にあたる人たちを、マレビト（稀れ人）＝まろうど（客人）と呼び、手厚くもてなしてきた。
そうした（モノ＝マナに関わる）精神的拠り処が、今に生き続け、世界で類を見ない日本の「進物文化」 となる。

文化の堆積、混流の場所　縄文時代の生活環境 と 歴史

地球気候サイクルで温暖化傾向となった晩氷期、縄文時代創世期　約1万3000年前に、日本列島は大陸と別れる。 先住の人々と、その後も、大陸や朝鮮半島、南西諸島から、渡来した人々が縄文文化の主役で、遺跡分布が語る様に、全国に漁撈採種で暮らした。 当時は、ブナ・コナラ・トチノキ・クルミ・シナノキなどの落葉広葉樹が主勢でクリ、クルミを生食、早くから創造、開発された土器でドングリをアク抜きし、魚、シカ、イノシシなど肉と煮炊きした。
6500年前以降、また温暖化が到来し、大きな環境変化があった。 照葉樹林の拡大である。落葉広葉樹林の花粉が急減。替わって、アカガシ・シイノキ・ツバキ・モチノキなどの常緑広葉樹、温暖帯針葉樹であるマツ（松）・スギ（杉）・ヒノキ（檜）・マキ（槙）などが増加する。 反対にブナやミズナラの落葉広葉樹の森が後退。 縄文文化の中心はさらに東北に移る。
ヒョウタン、アズキ、エゴマ、ウリ、ヒョウタン、ゴボウなどは早期に、縄文晩期にはイネ（陸稲）、オオムギ、ヒエ、キビ、アワ、ソバなどの雑穀やアズキ、大豆なども栽培されていた。
日本の豊かな森山には多種類の動物・鳥類が生息する。 森（が生んだ腐葉土）が濾過した栄養分に満ちた水は、泉となって涸れることなくこんこんと湧きだして小川となり、それがいくつも集まって川となる。日本中ではこうした大小無数の川が海に注ぐ。森の落ち葉はバクテリアによって分解されて川の植物プランクトンのエサとなり、植物プランクトンは動物プランクトンのエサになる。そこから発生する多彩な食物連鎖によって、マス（鱒）・サケ・ヤマメ・イワナ、それにアユ・コイ（鯉）・ウナギ（鰻）・ハゼ（鯊／沙魚）・フナ（鮒）など多くの魚が育つ。
川が注ぎ込むことで淡水と海水の混じり合う汽水帯では、沢山の魚介類や海藻類が育つ。日本を取り巻く沿海部や内海では、イワシ（鰯）・アジ　（鰺）タイ（鯛）・チヌ・カレイ（鰈）・ヒラメ（鮃）・カサゴ・スズキ（鱸）・サワラ（鰆）など、それに南からカツオ（鰹）・サンマ（秋刀魚）・マグロ（鮪）・ブリ（鰤）などの回遊魚、北にはサケ（鮭）・タラ（鱈）・ニシン（鰊）・カニ・イカなどが豊富に獲れる漁場がある。

縄文後期 約4000年前、一時的な寒冷化で海水面が低下、貝類の好漁場であった干潟が縮小し人口も停滞あるいは減少する。その状況下2300年前、渡来の人々により、西日本から水稲稲作が本格的に拡大、弥生時代が始まる。 そこでは、残っていた縄文の人々と共生が始まる。
弥生時代には、工具や耕起具、調理具などに石器を多く使ったが、次第に石器にかえて徐々に鉄器を使うようになった。青銅器は当初武器として、その後は祭祀具として用いられた。また、農具や食膳具などとして木器もしばしば用いられた。

日本 の 気候 と 植生



① 天地初發
あめつちはじめてあらわれしとき

天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）
高御産巣日神（たかみむすひのかみ）
神産巣日神（かむむすひのかみ）

造化の三神
ぞうかのさんしん

② イザナギとイザナミ
共生み

③ 国生み

④ 神産み

火之迦具土神
ひのかぐつちのかみ

大山津見神
おおやまつみのかみ

豊宇気毘売神
とようけのかみ

⑤ イザナギ 身禊

⑥ 三貴神

月読命

住吉三神

建速 須佐之男命

天照大御神

宇迦之御魂神
うかのみたまのかみ

木花佐久夜毘売
このはなさくやびめ

武御雷神
たけみかずちのかみ

宗像三神
市寸嶋比売命

天火明命
あめのほあかりのみこと

邇邇芸命
（ににぎのみこと）

闇淤加美神
くらおかみのかみ
日本書紀：高靇
たかおかみ（のかみ）

大山咋神
おおやまくいのかみ

出雲神話

大国主神

神武天皇

迦毛大御神

「八幡」神
『続日本紀』天平9年（737）初見
天平勝宝元年（749）宣命
「広幡乃八幡(ヤハタ)大神」
九州宇佐から、八幡 神入京
＊　小野妹子「三宅八幡宮」
社伝　推古天皇15年（607）遣隋後

建速 須佐之男命
（たけはや すさのおのみこと）
天照大御神
（あまてらすおおみかみ）
月読命（つくよみのみこと）

⑥ 三貴神

⑦ アマテラスとスサノオの誓約
天岩屋戸

天降り

国宝 海部氏「勘注系図」、物部氏「先代旧事本紀」で
彦火明命は別名、天火明命、
邇芸速日命（ニギハヤヒ）、
天照國照彦天火明櫛玉邇速日命（尊）

⑧ 国譲
大国主　武御雷神

⑨ 天孫降臨
天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能 邇邇芸命
（ あめにきしくに にきしあまつひこ ひこほの　ににぎのみこと ）
三種の神器
大山津見神の娘、木花佐久夜毘売と結婚

⑩ 海幸彦・山幸彦

⑪ 東征

美和之 大物主神　勢夜陀多良比賣（せやたたらひめ）の娘
富登多多良伊須須岐比賣命（ほとたたらいすすきひめのみこと）と結婚

日本書紀一書曰、
大國主神、亦名 大物主神、
亦號國作　大己貴命、
亦曰 葦原醜男、亦曰八千戈神、
亦曰 大國玉神、
亦曰 顯國玉神。

「山城国風土記」
賀茂別雷命・賀茂建角身命・神伊可古夜日売・玉依日売

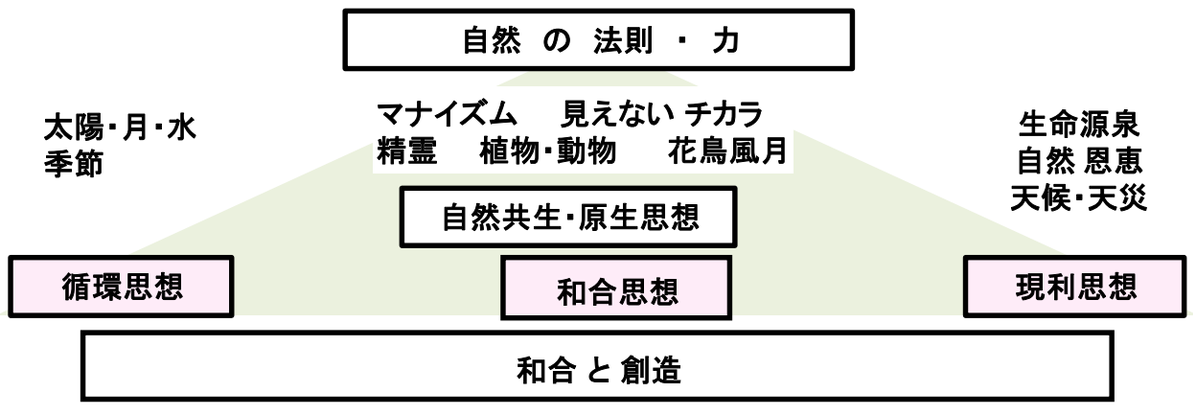
我が国の文化源流を古代にもとめる時、その手掛かりは縄文、弥生時代の遺跡や出土品、そして文書、伝承古き神社となる。 またそれらは、文化の中核となる信仰を伝える。手掛かりは、相互に検証されることで、仮説は補強され、時には、通説とされる内容が矛盾として浮き彫りとなる。

文書の手掛かり、「古事記」「日本書紀」などの研究は、特に江戸時代の国学者から活況となり、幕末から明治、そして昭和以降の天皇尊厳の変遷を経て、現在に至っている。また、その間、明治維新後の廃仏棄釈や民間信仰禁止政策、第二次世界大戦後のGHQ神道指令による「国家神道廃止」など、神仏信仰環境は安寧ではなかった。

しかし、長い武家政権の末期に起こった国学、その後の神仏混乱を経て続く「記紀研究」は、我が国古代信仰の中に、日本人、日本文化の源流を求める 同じような心情であろう。京都、奈良などへの社寺参拝、浄土教はじめ仏教信仰、歴史的文化財への憧憬、祭りや、しきたり、風習は、なぜ行われるのか。単純に他動的習慣ではない、隠れた特性がそこに存在するはずだ。

「古事記」には、元明天皇期712年、太安万侶より撰上された当時の、皇族、氏族の政治的脚色がある。 しかしまた、政治的にしろ、彼らの系譜が関係する様々な神の立場や性格、また、大和・出雲など実際の国土地名が登場する部分に特徴があり、信仰文化の特性や史実が潜んでいる。 そして、神々には、祀る神、祀るとともに祀られる神、祀られるだけの神、祀りを要求する祟りの神という性格の違いがあるとされ、天照大御神、大国主たちは、祀るとともに祀られる神である。なぜなら「葦原中国の平定」において、高御産巣日神は常に天照大御神に共に、「日本書紀」では高御産巣日神が単独で派遣する神を命じており、「神武東征」でも同様である。 稲羽（因幡）兎救出で、八十神に殺された大穴牟遲神（大国主）を蘇らしたり、少名毘古那神とともに葦原中国を作堅其國と命じたのは、神産巣日神である。 つまり、「高御産巣日神」や「神産巣日神」は、天照大御神や大国主が祀る神々である。 そして、古事記神代記において、天地初發之時、於高天原で、初めに誕生（存在）したのは「天之御中主神」であり、次にその二柱「巣日神」が誕生した。 また、祀られるだけの神は、山神、川海神などで、祟りの神は、御諸山上神（美和之大物主神）となる。 では、古事記が語る、その初めに誕生し祀りの頂天にある「天之御中主神」とは何か？ どんな信仰、思想が表現されているのだろうか？ どの様に解釈すれば古代の精神を理解できるだろうか？

日本文化の特性　基本原理 の 体系



「 天之御中主神 」とは 何か？　（ 道教の影響を前提として ）

それは、自然の法則・力 と考える。 なぜなら、そのあとに誕生した「高御産巣日神」は別名「高木神」、神の依ります神籬（神体木）、天地を繋ぐもの 出雲大社、伊勢神宮の心御柱に表現される。同じ時に関係し、違う場所や立場から指導・影響を与える。 まさに 現世利益 である。

そして、「神産巣日神」 は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を蘇らせる 循環再生 を表す。この神代再生は、世代・時間の継承を表現している。

つまり、その頂天に語られる「天之御中主神」は、「場所」と「時間」 の概念で、それぞれ「高御産巣日神」と「神産巣日神」とに繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考える。

三神は、日本文化の特性として今回仮説した原理を構成する基本要素であり、「天之御中主神」と、天津神系「高御産巣日神」と　国津神系「神産巣日神」が、ほぼ同時に誕生することに、異なる信仰文化の「和合」の思想が伺われる。 また「産巣」の名を持つ二神は「創造」の象徴でもある。
創造されたモノは、人々に「場所」と「時間」 の関係で繋がる「神への信仰、祭祀」の理由となる。
この神を祀る「彌久賀神社」は出雲大社南方　延長五年（927年）『延喜式神名帳』 神門郷の筆頭。

「 古事記 原文 」　変体漢文　岩波古典文学大系本（訂正 古訓古事記）　近代デジタルライブラリー　国宝「真福寺本」照合済

「別天神五柱～神世七代」

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神。訓高下天云阿麻。下效此。次高御產巢日神。次神產巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。
次國稚如浮脂而、久羅下那州多陀用幣流之時、流字以上十字以音。如葦牙因萌騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神。此神名以音。次天之常立神。訓常云登許、訓立云多知。此二柱神亦、獨神成坐而、隱身也。上件五柱神者、別天神。

「伊邪那岐命　と伊邪那美命」

於是天神諸命以、詔伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而、言依賜也。故、二柱神立訓立云多多志。天浮橋而、指下其沼矛以畫者、鹽許々袁々呂々邇此七字以音。畫鳴訓鳴云那志。而、引上時、自其矛末垂落之鹽累積、成嶋。是淤能碁呂嶋。自淤以下四字以音。

於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿。於是問其妹伊邪那美命曰、汝身者如何成。答曰吾身者、成成不成合處一處在。爾伊邪那岐命詔、我身者、成成而成餘處一處在。故以此吾身成餘處、刺塞汝身不成合處而、以爲生成國土。生奈何。訓生云宇牟。下效此。伊邪那美命、答曰然善。爾伊邪那岐命詔、然者吾與汝行廻逢是天之御柱而、爲美斗能麻具波比。此七字以音。如此之期、乃詔、汝者自右廻逢、我者自左廻逢。約竟廻時、伊邪那美命、先言阿那邇夜志愛上袁登古袁、此十字以音。下效此。後伊邪那岐命、言阿那邇夜志愛上袁登賣袁、各言竟之後、告其妹曰、女人先言不良。雖然久美度邇此四字以音。興而生子、水蛭子。此子者入葦船而流去。次生淡嶋。是亦不入子之例。

「天照大神と須佐之男命」

又食物乞大氣津比賣神。爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神產巢日御祖命、令取茲、成種。

「大國主神」

於是八上比賣、答八十神言、吾者不聞汝等之言。將嫁大穴牟遲神。故爾八十神怒、欲殺大穴牟遲神、共議而、至伯伎國之手間山本云、赤猪在此山。故、和禮此二字以音。共追下者、汝待取。若不待取者、必將殺汝云而、以火燒似猪大石而轉落。爾追下取時、卽於其石所燒著而死。爾其御祖命、哭患而、參上于天、請神產巢日之命時、乃遣蜡貝比賣與蛤貝比賣、令作活。爾蜡貝比賣岐佐宜此三字以音。集而、蛤貝比賣持人而、塗母乳汁者、成麗壯夫訓壯夫云袁等古。而出遊行。

The Japan code

日本人の「モノ」へのこころ を 以下に解説する。

まず、「モノ」「タマ」「カミ」 や「産霊」「結び」「清浄心」などの関係について、「日本文化の原理」 により、古代の感覚を図示した。 それは、「見えないモノ、チカラ」の気配を感じるこころから始まった。

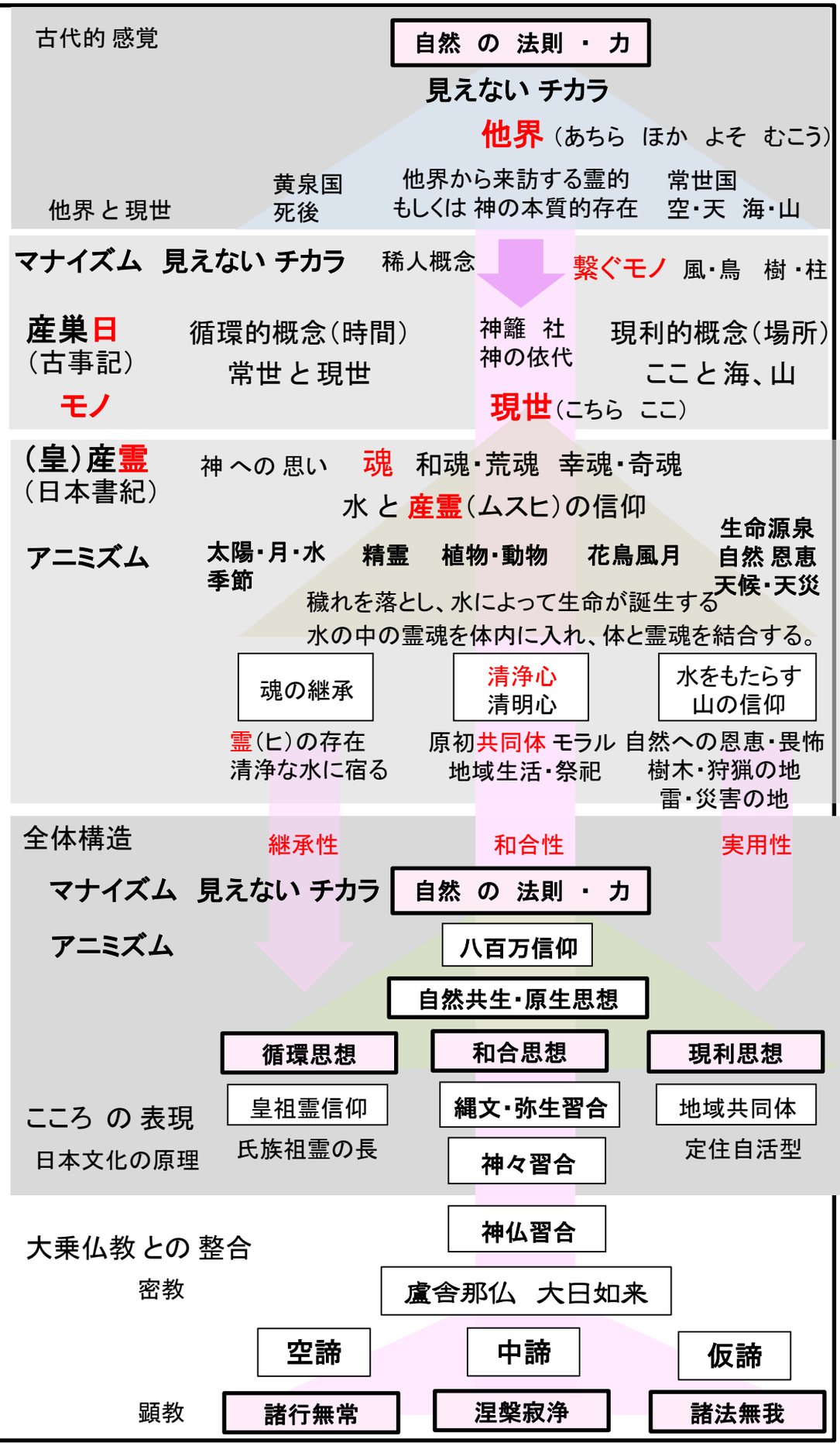
日本の原始的信仰宗教としてアニミズムとする見解が、ごく一般的だが、実は、マナイズムを想定しないと説明できないことがある。
アニミズムとは、宗教の起源を論じたイギリスの人類学者タイラーが提唱した原始宗教の生命万物の「霊」観念で、人格的超自然観である。その後マレットは、コドリントンがポリネシア信仰で紹介した超自然的・神秘的で非人格的な力への信仰、自然観に注目し、アニミズムの前段階の観念としてマナ、マナイズムを定義した。マナイズムは霊魂の存在を前提とせず、超自然的な力そのものが物体その他に宿ると信じる。自然物、自然現象に対する尊敬や畏怖(いふ)の態度の総称であり、まさに現代的な課題でもある。
古事記では、初めに誕生する、「天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)」「高御産巣日神(タカミムスヒノカミ)」「神産巣日神(カミムスヒノカミ)」「宇摩志阿斯訶備比古遲神(ウマアシカビヒコヂノカミ)」「天之常立神(アメノトコタチノカミ)」「國之常立神(クニノトコタチノカミ)」「豐雲上野神(トヨクモノカミ)」は、「隠身」なりとする。 一方そのあとに生まれる伊邪那岐命(イザナギ)・伊邪那美命(イザナミ)については、その序文で「二霊為群品之祖神」と記す。 つまり万物の生みの親として神名に「霊」の文字が使われている。
前述のいわゆる造化三神の「隠身」は、彼らの神名が「霊」を保持せず、万物生命の誕生とは直接に関係が無い。そして非人格的な「見えないモノ、チカラ」として記されていることに注目しなければならない。
「高御産巣日神」と「神産巣日神」は、産巣日(ムスヒ)神として超自然的な力を保持するが、あえて神名に「霊」を持ちいないマナとして表現されている。 中西進先生は著書『こころの日本文化史』の中で、「マナ」から日本語としての「モノ」への母音交替を指摘、縄文土器に超越的な力の表現をみる。そして「大物主大神」のモノであり、モノが依りついた三輪山の神である、とされる。 その著書では触れてはいないが、既に古事記神代記に「物」は登場し、萌え上がった物から神が誕生したと、力としてのモノを表現している。

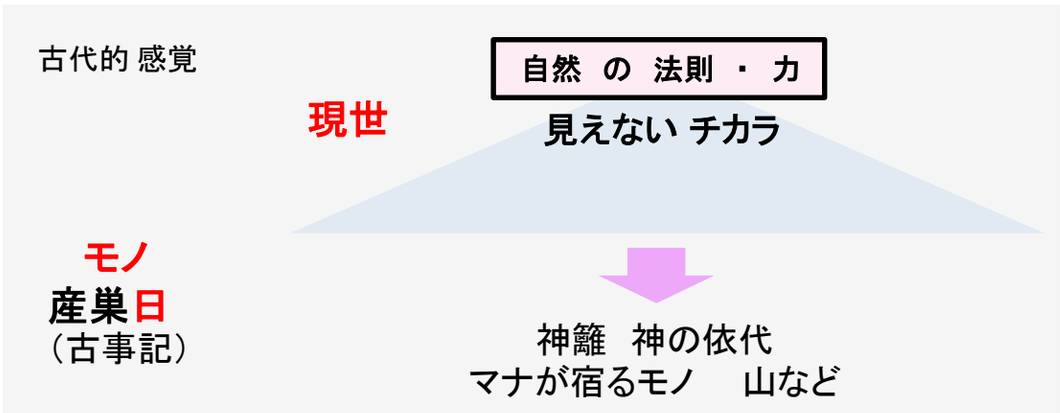
古事記上巻 (神代記) 天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神訓高下天、云阿麻。下效此、次高御產巢日神、次神產巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。 次、國稚如浮脂而久羅下那州多陀用幣流之時流字以上十字以音、如葦牙、因萌騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神此神名以音、次天之常立神。訓常云登許、訓立云多知。此二柱神亦、獨神成坐而、隱身也。(後略)
(序) 臣安萬侶言。夫、混元既凝、氣象未效、無名無爲、誰知其形。然、乾坤初分、參神作造化之首、陰陽斯開、二靈爲群品之祖。(後略) ・・・ 二霊は、イザナギとイザナミのこと

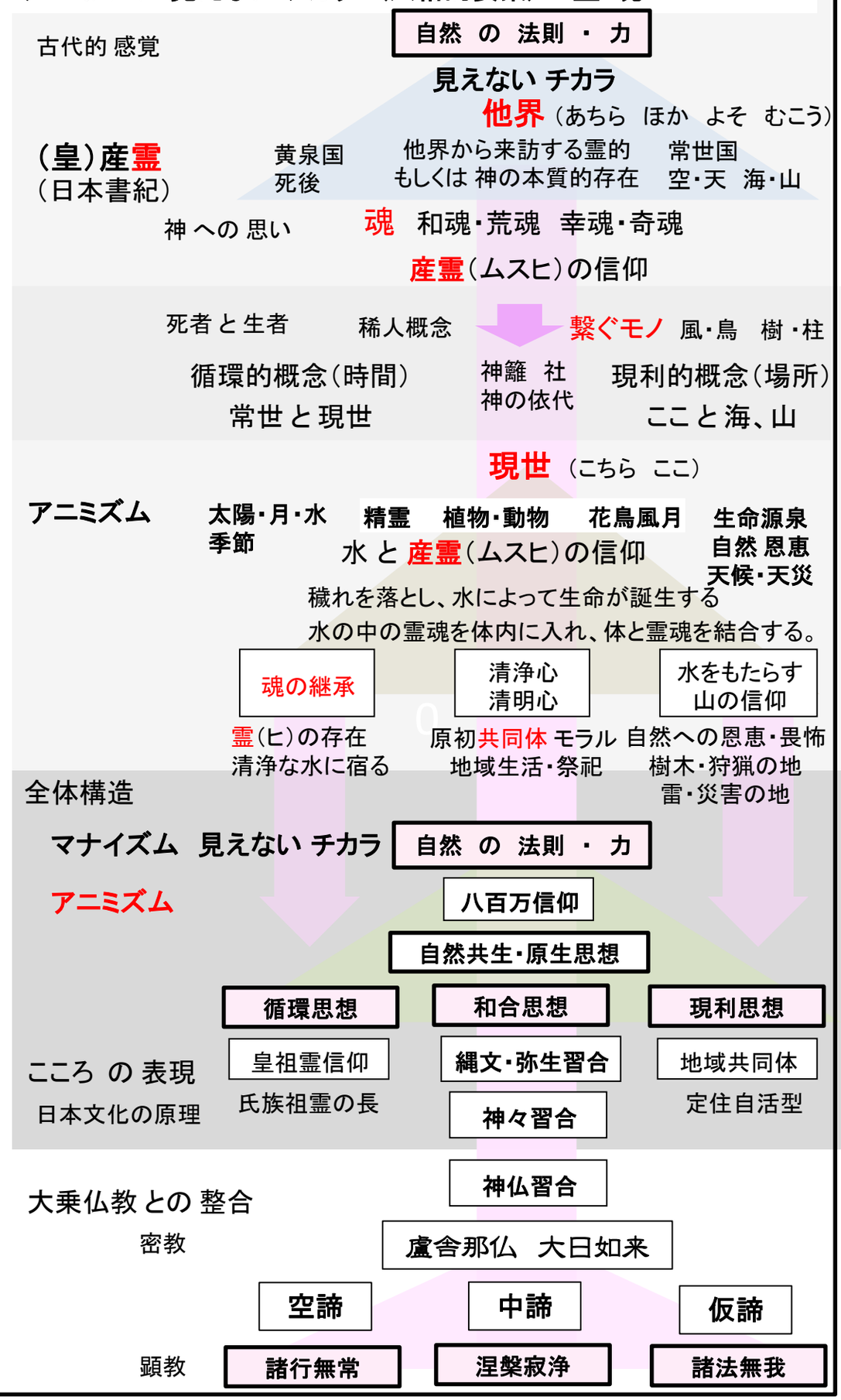
但し「高御産巣日神」「神産巣日神」は、日本書紀では、その一書で「高皇産靈尊」「神皇産靈尊」とされる。これは対外的書物の性格上、のち皇祖神となる大日霎貴(おおひるめのむちのかみ)(一書云、天照大神)を日の唯一神格とするためである。すなわち太陽の持つ生成(ムス)力の意図的な分離として、「日」ではなく「霊」とし、逆に「皇」は、特に高皇産靈尊において、天皇との関係を強調するものである。

「産巣日」ムスヒは、天照大神以前の太陽神の神格を表現している。なぜなら古事記の中で、天照大神が生まれる前の物語で、すでに光がある見える世界が描かれている。「霊」の部首「雨」は太陽と同じく「天」と関係するが、今日「霊」は「ヒ」と読まない。やはりその神名は古事記用例の「日」が原語・原意であり、超自然的な力、マナイズムとしての太陽神、太陽光の自然力への信仰である。太陽と霊はなじまない。

ちなみに「物の怪」のモノは広義にはマナに近い自然的または超自然的な霊のことで, この正体不明の霊的存在が人に憑依して病気にしたり命を奪ったりすると考えられる現象を〈物の怪〉という。物の怪は平安時代の文献に頻出し, 邪悪な霊の発現をいうことが多い。その正体はたいてい嫉妬や怨恨をもった生霊や死霊であり, のち鬼の形でイメージされた。「世界大百科事典」







マナイズム・アニミズム と　他界観

マナイズムにおける見えないチカラには、死後の他界観はない。 あくまでも非人格的要素を持つ。
アニミズムは、人格的要素として霊の観念を持ち、その観念における見えないチカラは、死後の他界観における見えない霊と、現世における見えない霊の二種がある。

このことが日本文化にとって重要だが、現世においては、見えないチカラを持つものとしてのモノと、同じく見えない存在としての霊が存在すると観念される。

我が国では特に民俗学的に死後を含む「他界の世界」が身近であるとの見解がある。なぜであろうか？
その理由として、マナイズムのモノとアニミズムの霊が、それぞれの見えないもの、存在という共通性を媒介に、同一視されていくところにあるのではないか、と仮説する。 つまり、身近なモノが、本来は死後を含む他界の存在である霊の観念を引き寄せて、霊までをも身近に観念させたのではないか、と考える。
モノに対する愛着もそのようなこころの顕れである。 しかしながら、そもそもモノと霊に対する観念は、別々の概念であることを認識しなければならない。 なぜならモノには、死後の他界観は無いからである。
なお死後を含む「他界」（あの世）と「人間界」（この世）の近接性について当論「他界の時代」で論及する。

原始宗教の超自然観は二つに大別される。（一）超自然的存在・対象に人格的要素を認めるものと、（二）これに多少とも非人格的要素を認めるものとである。
人格的要素の基本的なものは、霊的存在（スピリチュアル=ビーイングズ）＝霊魂（ソウル）・死霊（ゴースト）・精霊（スピリット）である。一般に霊魂は人間の身体に宿る霊的存在、死霊は死者の霊的存在、精霊は人間以外の諸存在に宿る霊的存在、すなわち神霊・祖霊・霊鬼・妖精など、とされる。しかしどの原始社会においても超自然的存在がこのように明瞭に区分されているわけではない。実際には一つの語によって複数の、あるいはすべての霊的存在を意味していることが少なくない。霊的存在の特徴は、その宿り場を自由に離脱し、人間・社会の吉凶禍福に直接間接に影響を与えると信じられている点にある。
非人格的要素は一般に呪力・神秘力として把握されていることが多い。メラネシアやポリネシアにおける「マナmana」観念はその典型的なものである。マナは神や人間から動植物・自然現象・自然物・人工物に宿り、モノからモノへと転移し得る。しかし一切の存在が無差別にマナを有しているとは見なされない。
人間も他の存在も並みはずれた力能を示すとき、マナを有するとされるのである。

学説的には超自然的存在・対象に人格的要素を認めるもの、すなわち人格的超自然観をアニミズムと呼び、これに対して非人格的超自然観をマナイズム・アニマティズム・プレ=アニミズムなどと呼ぶ。
死霊・祖霊崇拝、シャーマニズム、ナチュリズム（自然崇拝）、高神・多神崇拝、フェティシズム（呪物崇拝）、トーテミズム、ウィッチクラフト（妖術）、ソーサリー（邪術）などの原始的諸宗教形態は、いずれも前述の二つの超自然観を基盤として成立している。

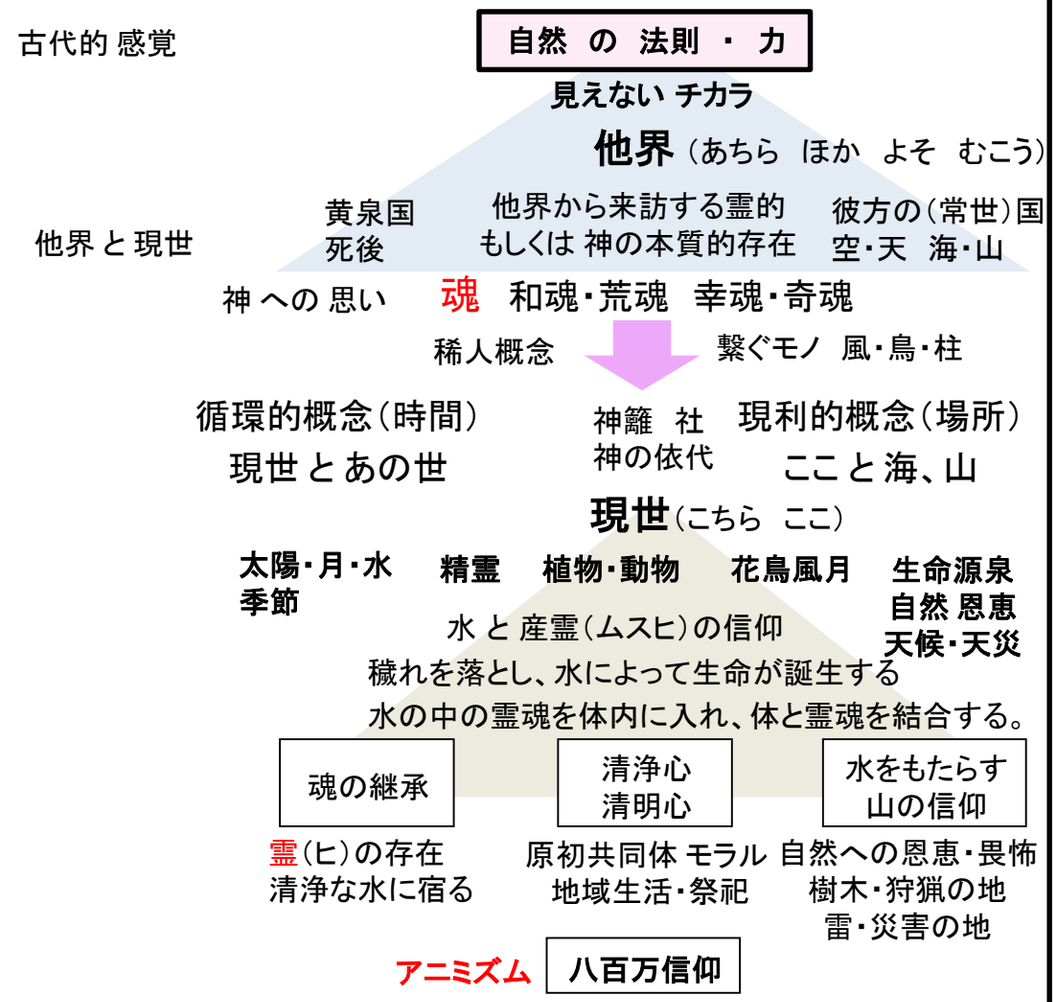
モノに対するマナイズムの次に、生命の誕生と関係するカミ（神）、タマ（魂・霊）のアニミズムがある。
「魂」と「霊」とは、霊にも御霊（みたま）の読みがあり、一般的にはその区別は定かではない。
「魂」には主に神の作用として和魂・荒魂や天皇の鎮魂、魂振の用例がある。「霊」は、かつて「みずち/水霊」「のつち/野霊」「いかずち/雷」の「チ」、「わたつみ」「やまつみ」の「ミ」にも用いられ、神や自然の霊の意で、神秘的な力を表した。また、「霊」は祖霊、御霊（ごりょう）、怨霊など、神から人間などへ用例が拡大された。このことから、概ね、貴神崇敬性の「魂」、世俗汎用性の「霊」と区別できると考える。

元日本民俗学会会長の宮田登先生は「世界大百科事典」“神”の論述で、タマの顕著な特色は，それがつねに浮遊している霊であり，外来から何物かに付着し，またそこから去っていくという傾向をもっている、とする。（その点で非人格的要素として呪力・神秘力のマナがモノからモノへと転移し得るマナイズムの要素が強い）　タマは、外来魂といえる。たとえば稲のタマは稲魂とか宇迦之御魂神（記）倉稲魂（紀）と表現されている。稲魂が，稲穂や穀物に付着することにより豊穣がもたらされると考えられている。この稲魂が基礎となり，神話では保食神や登由宇気神（記）大気津比売神といった穀物神が成立する。

霊魂は、人間の身体に宿ると観念されている超自然的存在である。霊魂に対する観念は、人間に限らず動植物などの万物に霊が宿るとするアニミズムの観念に包含される。宗教の起源を論じたタイラーは、宗教のなかで最も簡単で原始的なものが「霊的存在」に対する信仰であると規定し、「霊的存在」には人間の身体に宿る霊魂、死霊、精霊という人間以外の霊や浮遊霊との三種類があり、霊魂や精霊の観念から神祇・神の観念に発展したと説いている。タイラーの説くアニミズム観念のうち、それが宗教の起源であるとする考えや進化論的な考え方に対しては各種の批判があり、また霊魂と精霊との区別も民族によって必ずしも一様でないことが明らかにされている。しかし霊魂や精霊に対する信仰は、原始や未開社会の宗教のみではなく、諸宗教においても重要な問題であり、霊魂・精霊などの遊離・憑依によって夢・幻覚・病気・予言、幸・不幸などを説明することも多く、霊魂や精霊を操作したり、排除や憑依させたりすることによって治病、託宣をする宗教的職能者の活躍が世界各地で認められる。

日本においては、霊魂を古代よりタマと呼び、魂・霊の漢字をあててきた。タマは人間の霊魂のみではなく、動植物などにも宿るものとされ、タマの遊離によって病気や死が説明されており、タマの遊離を防ぐ鎮魂（たましずめ）、それとは逆に体内で静止した霊魂を活動させようとする魂振（タマフリ）などの儀礼が古代より盛んに行われてきた。その意味では、日本人の霊魂観もアニミズムの概念に包摂できる。
霊魂に限ってみても幾つかの区別がなされており、古代における和魂（にぎみたま）・荒魂（あらみたま）、幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま）などの区別もその一つであるが、生者の遊離した霊魂を生霊（いきりょう）、死者の霊を死霊、子孫より祀られ非個性的な清らかな霊を祖霊とする区別も古くからの一般的観念である。死霊は子孫からの祭祀を重ねられることにより祖霊となり、子孫を守護する存在となるものであるが、その一方で、非業の死をとげた者、この世に未練を残して死んだ者の霊は御霊（ごりょう）と呼ばれ、この世にさまざまな災厄をもたらすと信じられてきた。この祖霊と御霊という二つの観念が、日本人の霊魂観の基本をなしている。もっとも御霊という漢字をあててミタマと読み、天皇家の先祖霊を指す用法が『続日本紀』にみられる。しかし奈良時代末から平安時代にかけての頻発する政変・災害などを背景にして、非業の死をとげた者の怨霊が災厄をもたらすものとされ、貞観五年（八六三）、早良（さわら）親王以下の怨霊を鎮めるための御霊会が国家的レベルで執行された。また平安時代に災厄の要因とされたモノノケ（物怪）も、生霊・死霊・遊離霊などが主たる内容であったといえる。霊魂の処理は、仏教の普及によって次第に僧侶に委ねられるようになり、近世の寺請制度、寺檀関係の形成によって確立したものであるが、それでもなお、あるき巫女（みこ）・修験者・聖・行者などの下級宗教者の関与が認められ、とりわけ災厄の原因となる諸霊の処理に大きな役割を果たしてきた。

和魂 と 荒魂　奇魂　幸魂　古く日本人は神の霊魂の作用および徳用を異なる作用を持つ霊魂の複合によると考えた。すなわち，静止的な通常の状態における神霊の作用および徳用を〈和魂〉とし，活動的で勇猛，剛健，ある意味では常態をこえるような荒々しい状態における作用および徳用を〈荒魂〉と考えた。神霊も平常のときには一つの神格に統一され別個のはたらきは見せないが，時と場合に応じて分離し，単独に一個の神格としてはたらくものと信じられた。



ニギとアラは対語で，〈和妙（にぎたえ）〉〈荒妙（あらたえ）〉（《延喜式》），〈毛麤物（けのあらもの）〉〈毛和物（けのにぎもの）〉（《古事記》）などの用例がある。《古事記》《日本書紀》には，崇神天皇のとき，疫病のために多くの民が死んだのは大物主神のたたりであるとみえ，それは〈荒魂〉のたたりであると説かれる。

和魂だけをまつる場合も，荒魂だけをまつる場合もある。《日本書紀》では，神功（じんぐう）皇后の〈三韓征伐〉に際して，〈住吉三神の和魂は王身（みついで）に従って寿命（みいのち）を守り，荒魂は先鋒（さき）となって師船（みいくさのふね）を導き守ろうとした〉とあり，長門住吉神社には住吉三神の荒魂がまつられている（住吉大社の三神は和魂もしくは荒魂、両説がある）。 ほかに荒魂をまつっている例としては，伊勢の皇大神宮（内宮）の別宮荒祭宮（あらまつりのみや）には天照大神の荒魂が，豊受大神宮（外宮）の別宮多賀宮（たがのみや）には豊受大神の荒魂がそれぞれまつられている。 なお，神の霊魂の作用および徳用を言い表したものには，ほかにも〈奇魂（くしみたま）〉〈幸魂（さきみたま）〉などがある。奇魂とはすべてのことを知りわきまえしむる魂で，幸魂とは幸いをもたらす恵みの魂で，ともに和魂から分化したものと考えられる。この幸魂・奇魂の語は、『日本書紀』神代宝剣出現章第六の一書で、大己貴神のそのはたらきを示すことで記し、『日本紀私記』で幸魂は「是左支久阿良之无留（さきくあらしむる）魂也」と註しているように、人を幸福にさせる神の霊魂で、奇魂は不思議な力を持った神の霊魂の意。

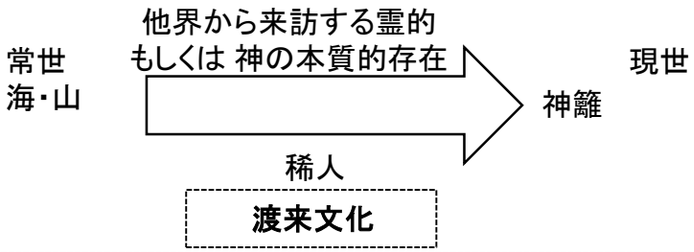
渡来文化への価値観について考えてみたい。 それは、渡来人と共に、あるいは単独で流入、選択、習合しながら、我が国の文字、制度、信仰、風習、建築などに取入れられてきた。公には鎖国の時代があったにせよ、途切れない渡来文化への関心は、どんな心情がもたらしたものか？大陸、半島からの流入、そして、室町時代頃に起源し戦後に極まる欧米文化が記憶に新しい。　その源流は、神籬（ひもろぎ）を依り代として降臨する神、その擬似として、稀に到来する人「稀人」への期待、歓迎する心情、信仰であると考えます。
神社の原点、記紀神話、遺跡から、日本文化の重要な特性である、その源流について考察したい。

手掛かりとなる記述 ・・・神籬（ひもろぎ）

古来、日本人は自然の山や岩、木、海などに神が宿っていると信じ、信仰の対象としてきた。そのため、古代の神道では神社を建てて社殿の中に神を祭るのではなく、祭の時はその時々に神を招いてとり行った。その際、神を招くための巨木の周囲に玉垣をめぐらして注連縄で囲うことで神聖を保ち、古くはその場所が神籬と呼ばれた。つまり、神籬とは、臨時に神を迎えるための依り代となるものである。
「ひ」は神霊、「もろ」は天下るの意の「あもる」の転、「き」は木の意とされ、神霊が天下る木、神の依り代となる木の意味。

飛鳥時代以降、仏教寺院の影響を受けて、神社が建てられるようになり、祭りも社殿で行われるようになったが、古い形の神社は、建物の中に玉垣を設けて常盤木を立てて神の宿る所とし、祭るもので、後にこの常盤木を神籬と呼ぶようになった。「日本書紀」「葦原中国平定」（国譲り）では、祭祀のため高皇産霊尊が「天津神籬」「天津磐境」を造る場面が登場する。「天津磐境」は、社殿発生以前に神を祭るため、臨時的に設けられた小規模な石囲いの施設のことで、対して磐座は常設的な祭祀の対象で、神の座となる石である。
古事記にも邇邇藝命が高天の原の「天之石位」を離れ降臨する場面がある。　貴船神社の「石庭」は天津磐境を想定した重森三玲の作。 今日、神籬は地鎮祭などで用いられる。

その神籬を依り代として、至りくる神の擬似として「稀人」の語がある。 折口信夫は、『まれびとの最初の意義は、神であつたらしい。時を定めて来り臨む神である。 大空から、海のあなたから、或村に限つて、富みと齢と其他若干の幸福とを齎して来るものと、村人たちの信じてゐた神の事なのである。』とした。琉球の「にらいかない」と同様に、古事記 天の窟戸の条「常夜行く」の「常夜」とこよは「絶対の闇が続く」死霊の住み賜う国である。 そこには人々を悪霊から護ってくれる祖先が住み、毎年定期的にその祖霊がやってきて、人々を祝福してくれるという信仰を持つ。（この信仰は、仏教公伝後、盂蘭盆会にも受継がれる）　奈良時代には、光明的な富と齢との国として「常世」の「とこよ」に変化し、古事記垂仁期「多遅摩毛理」の派遣先、浦島子の行く先となる。と後述を要約する。「海のかなた」（海上他界観）から「天上」、「地上のどこか」へと、水平から垂直方向に、「常世」の場所は転化されつつ、神、そして稀人は、その様な処から到来すると考えられ歓迎された。 同様の価値観で、海から来る 渡来文化、渡来人を歓迎、和合習合したと考える。 古事記の海人族の記憶　安曇/住吉・宗像氏族と名づく 海洋集団の存在も影響したかもしれない。



・関係する 神事 ・・・ 禊祓　　『 禊祓　気吹放てむ　その国は　海のかなたか 海の底 』
延喜式巻八「祝詞「六月晦大祓祝詞」より　『 呑ては　気吹戸に坐す気吹主と云神　根国底之国に気吹放てむ　如此気吹放ては　根国底之国に坐す速佐須良比咩と云神　持さすらひ失てむ 』
・関連する 遺跡、建築 ・・・ 天と繋ぐ柱
縄文時代の遺跡に、環状列石（ストーンサークル）環状土籬（周提墓）環状木柱列（ウッドサークル）がある。
これらは、天と繋ぐ柱として祭祀的存在とされ、「神山」「神奈備」信仰を経て　出雲大社の（心御柱）岩根御柱、伊勢神宮の心御柱、諏訪大社の御柱祭など、その様な縄文祭祀遺跡の今の姿と考えます。
古事記 「 伊邪那岐命と伊邪那美命 」より　　於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿

「日本書紀　原文」 和化漢文体　　巻第二　神代下　第九段　第二節一書
「葦原中国平定」（国譲り）
於是、大己貴神報曰「天神勅教、慇懃如此。敢不從命乎。吾所治顯露事者、皇孫當治。吾將退治幽事。」
乃薦岐神於二神曰「是當代我而奉從也。吾將自此避去。」卽躬披瑞之八坂瓊、而長隱者矣。故經津主神、以岐神爲鄕導、周流削平。
有逆命者、卽加斬戮。歸順者、仍加褒美。是時、歸順之首渠者、大物主神及事代主神。乃合八十萬神於天高市、帥以昇天、陳其誠款之至。

時高皇産靈尊、勅大物主神「汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三穗津姬、配汝爲妻。宜領八十萬神、永爲皇孫奉護。」乃使還降之。卽以紀國忌部遠祖手置帆負神定爲作笠者、彥狹知神爲作盾者、天目一箇神爲作金者、天日鷲神爲作木綿者、櫛明玉神爲作玉者。
乃使太玉命、以弱肩被太手繦而代御手、以祭此神者、始起於此矣。且天兒屋命、主神事之宗源者也、故俾以太占之卜事而奉仕焉。
高皇産靈尊因勅曰「吾、則起樹天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋矣。汝、天兒屋命・太玉命、宜持天津神籬、降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉。」乃使二神、陪從天忍穗耳尊以降之。

これにより、大己貴神は「天神の申出は過分なほどに行き届いており、おっしゃるように致しましょう。私が治めているこの地は皇孫が治めてください。私は退（しりぞ）いて幽事（かくれたること＝神事）を司りましょう」とお答えし、岐神（ふなとのかみ）を二神に薦めて、「この神が私に代わってお仕えします。私はこれから隠れます」と申されて、八坂瓊（やさかに＝大きな玉）を身につけて永久（とこしえ）に隠れられた。

そこで、經津主神は岐神を先導役とし、国中を巡りながら平定していった。反抗する者がいれば斬り殺し、従う者には褒美を与えた。この時、従った神の長は大物主神（おほものぬしのかみ）と事代主神（ことしろぬしのかみ）で、八十萬神を天高市（あまのたけち）に集め、皆を伴って天に昇り、本心を述べさせた（＝服従の誓をした）。高皇産靈尊は大物主神に「あなたが國神を娶るようなら、先の誓いを疑ってしまうので、私の娘の三穗津姬（みほつひめ）を妻にして欲しい。そして、八十萬神を率いて、永遠に皇孫を守って欲しい」と言われて、帰り降らせた。

紀國（きのくに）の忌部（いみべ）の祖神（とほつおや）の手置帆負神（たおきほおひのかみ）を作笠者（かさぬい）と定め、彦狹知神（ひこさちのかみ）を作盾者（たてつくり、たてぬい）とし、天目一箇神（あまのまひとつのかみ）を作金者（かなつくり）とし、天日鷲神（あまのひわしのかみ）を作木綿者（ゆふつくり）とし、櫛明玉神（くしあかるたまのかみ）を作玉者（たますり）とした。太玉命（ふとたまのみこと）が、『以弱肩被太手繦而代御手（よわかいなにふとたすきをかけて、みてしろとして＝若輩ではあるが立派な襷を掛けて、天孫に代わって）、大己貴神を祀るようになったのは、これが始まりである。天兒屋命（あまのこやねのみこと）は『主神事之宗源者也』、太占（ふとまに）によって仕えさせた。
高皇産靈尊は「私は天津神籬（あまつひもろき）と天津磐境（あまついはさか）を造り、皇孫のために祭祀をしよう。
天兒屋命と太玉命は、天津神籬を守って、葦原中國に降り皇孫のために祭祀をしなさい」と命じ、二神を天忍穗耳尊に従わせて降らせた。

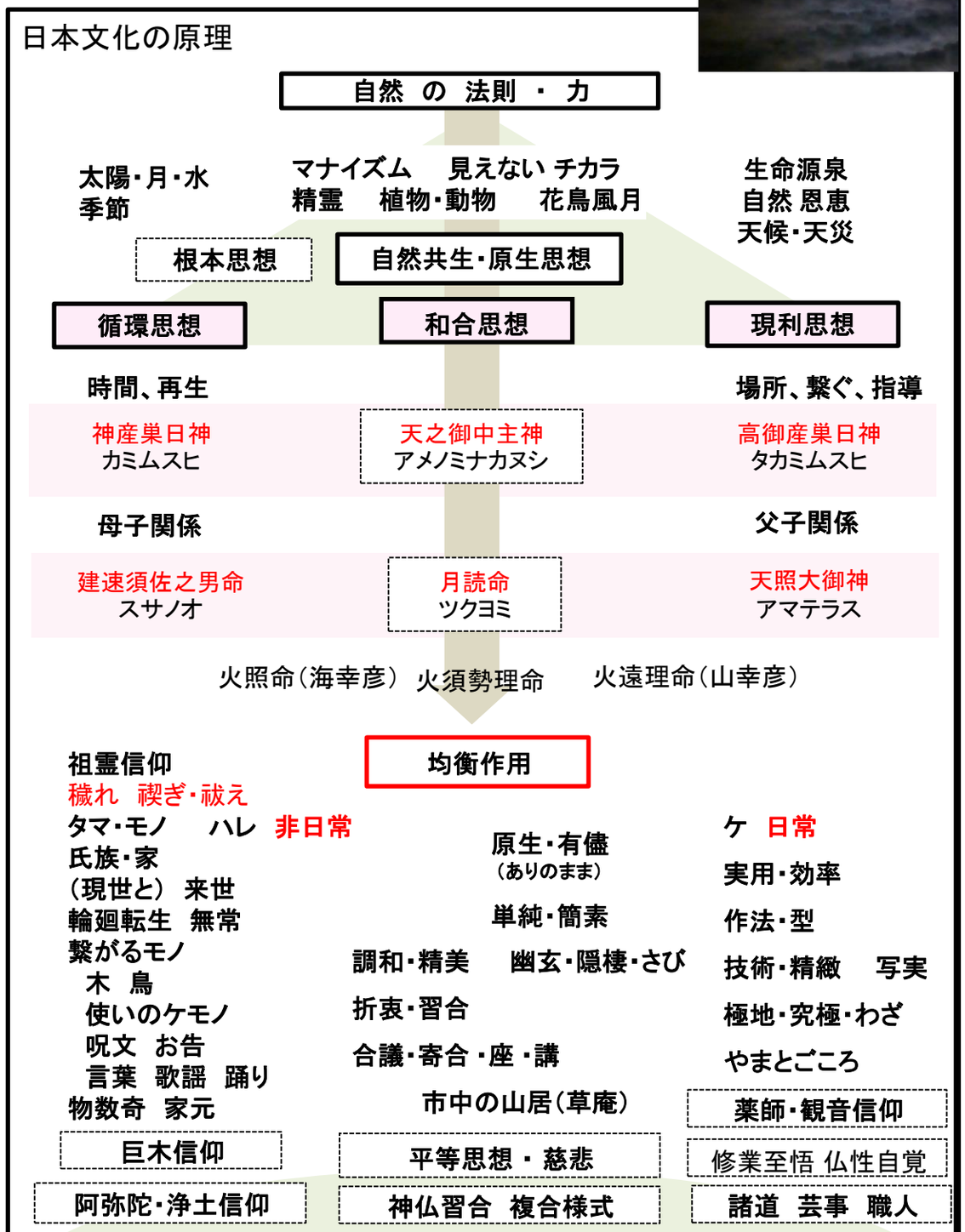
日本文化 の 原理　「古事記の思想」「天之御中主神」たち の意味

原理を仮説し、信仰・文化の歴史を辿っている。
その過程で「循環的なもの」と「現利的なもの」との間で「均衡作用」があることに気付いた。
仏教では、阿弥陀如来に対する薬師如来や観音菩薩。 また、天台智顗 の「三諦円融 」空仮中の均衡は、それを受け入れることで浄土信仰や禅・日蓮誕生の土壌となった。闘争する武家に対して、静寂なる茶道や禅。 茶道は、武家など日常に対する非日常を均衡させる作用。 絵画では花鳥画に対する水墨画で均衡した。 その均衡をもたらした源が自然の法則・力を潜在する日本文化であり、和合的な現象として現れたと考える。 神仏習合はその代表であり、戦う神 と 鎮魂の仏 である。
古事記、古代から中世まで日本文化の原理を仮説・検証してきたが、改めて逆に「均衡」を意識して古事記をふりかえると、「天之御中主神」と「月読命」がその作用で共通していることに気がつく。 両者は同時に誕生した活動的な他の二者の間で、無作為な力・作用である「均衡」を象徴しているのではないか。「天之御中主神」と「月読命」、そして、火照命（海幸彦）を兄に火遠理命（山幸彦）を弟に持つ「火須勢理命（ほすせりのみこと）」も同様で、いずれも天津神・国津神ではなく、ただ存在を記される。

冒頭に提起した「天之御中主神 」の意味、それは、自然の法則・力 と考えた。
なぜなら、そのあとに誕生した「高御産巣日神」は別名「高木神」、神の依ります神籬（神体木）、天地を繋ぐもの 出雲大社、伊勢神宮の心御柱に表現される。 そして、「神産巣日神」は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を 蘇らせる 循環再生 を表す。この神代再生は、世代・時間の継承を表現している。つまり、その頂天に語られる「天之御中主神」は、「場所」と「時間」の概念で、それぞれ「高御産巣日神」と「神産巣日神」とに繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考えた。 その解釈は誤りではなかったが、その「自然の法則・力」がもたらした具体的な力、すなわち「均衡作用」とも言える。
とすれば、古事記の**「月読命」の意味は何か？** その神も同じ作用をもたらし、国譲りを演出したと考える。 天照大御神に象徴される「太陽」と建速須佐之男命の「大地」、昼間の太陽は大地を熱っする。しかし、特に晴れた夜には、放射冷却で大地は逆によく冷える。 太陽と大地の熱循環（交流）作用が高まっている状態だ。 その晴れた夜には「月」がよく見える。 太陽と大地の好循環は月の作用と考えたに違いない。自然に敏感で稲作など農耕が主な生活では、ごく自然な発想、信仰と考える。
「国譲り」の主体は大国主とその代理者や天照大御神に派遣された者たちだが、その前に月読命を登場させた意味は、「国譲り」の予言、伏線であろう。二者択一ではなく二者均衡の支点と考える。 その存在は、いわゆる二極の「間」と表現したら理解しやすいかもしれない。
自然の法則・力から誕生した和合の神格が、「天之御中主神」であり、「月読命」である。
では、その神話の基本思想は誰のものか？ 記紀編纂を勅命した人、武力で皇位についた天武天皇は語りずらい。 最終的な編集者、藤原不比等にとっては、祖神の活躍が最重要であった。

その思想の草案者は、やはり「和」の思想家、聖徳太子と考える。古事記の神話部分などは「国記」を反映しただろう、そして十七条憲法とは、均衡させる作用、和合思想で結びつく。京都の月読神社は、顕宗3年（487）、阿閉臣事代(あへのおみことしろ)が朝鮮任那渡航の際、壱岐から分霊した元来は海神である。現在は秦氏松尾大社の摂社で、その境内に 聖徳太子を祀る社がある。月読神社によると、太子は月読神を崇敬したとされ、ここに祀られていることがその証である。また、その仮定だと、聖徳太子以前に鏡威信が天照大御神の様な固有名詞で信仰化されていたことになる。
日本書紀は、推古28（620）年　推古天皇、聖徳太子による歴史書、「天皇記」「国記」「臣・連・伴造・国造百八十部等の本記」が編纂されたと記す。それら書物は、皇極5年（645）乙巳の変の際に、蘇我蝦夷の家とともに燃やされ、船恵尺（ふなのえさか） により「国記」のみ取り出されて残ったと記録する。船恵尺の子供が道昭で、入唐し玄奘と同じ房に住して学問し、招来した法相宗は奈良時代に栄えた。
「国記」編纂の約100年後、712年 「古事記」が、720年には「日本書紀」が撰上された。

ユング心理学の権威で元文化庁長官の河合隼雄先生『中空構造日本の深層』では、この無為な中央にのみ注目している。しかし日本文化の理解にとっての重要は、両極の思想軸の発見、認識である。



日本文化の源流　　産巣日（ムスヒ）掬ぶ・結ぶ こころ

「産日、産霊（むすひ）」 から 「水を掬ぶ（むすぶ）」 **「結ぶ」へ**

この言葉は、天皇の皇祖霊信仰、穀物の起源を語り、また仏教では先祖供養などを誕生させた。
我が国の「 生命誕生・魂の継承 」の思想、「結ぶ」の源流 を辿る。

「結び」の語源である『産巣日・産霊（むすひ）』は、日本の神信仰における重要な概念である。「産（むす）」は生じる、「霊（ひ）」は神秘的、霊的な働きを示す。 つまり『ムスヒ』とは天地万物を生み出す霊的な働きのことを言う。
古代から続いてきた日本の信仰心である「森羅万象に神が宿る」という考え方の根幹をなす。
もうひとつ、むすびには『水を掬ぶ（むすぶ）』という意味がある。水を両手のひらで掬って（すくって）飲む動作を『水を掬ぶ（むすぶ）』と言う。日本の古代信仰では水の中に霊魂を入れてそれを人間の体の中に入れることで、体と霊魂を結合させるという意味があった。その動作をした者は非常な威力を発揮して来る。この技法を「禊」とした。
そして、この水の「掬び」と、何かを結んだり結合する意の「結び」には、深いつながりがある。 内在するものを外部に逸脱しないようにした外的な形を「むすび」という言葉で表現した。水の掬びの信仰は今はもう廃れたが、このような動作を今日「結ぶ」と言うようになったのです。 （ 折口信夫『産霊の信仰』より抜粋、要約 ）

① 宮中八神 と「産霊（むすび）」

宮中で祀られていた宮中八神 八神殿（はっしんでん）は、日本の律令制下で古代から中世の間に神祇官西院に設けられた、天皇守護の8神を祀る神殿である。大同2年（807年）編纂『古語拾遺』と延長5年（927年）『延喜式』神名帳とで表記は異なるが、同じ神を指す。うち5神に「ムスヒ（ムスビ）」が含まれている。 神産日神（カミムスビ）と高御産日神（タカミムスビ）と以下、産霊に関係する三柱と、その以外の三柱である。
玉積産日神は『古語拾遺』の「魂留産霊」と同神で、「タマツメ（タマトメ）」は魂を体に留める（鎮魂）という意味である。
生産日神の「イク」は「イキ」（生き、息）と同根で、むすひの働きを賛える語である。
足産日神の「タル」は、その働きが満ち溢れている（足りている）様子を示す。

大宮売神は、宮殿の人格化とも内侍（女官）の神格化ともいわれ、君臣の上下を取り持つ神。
御食津神は、食物を司る神、
事代主神は、言葉を司る神とされる（出雲系の事代主神とは異なるとされる）。

祭神8神は天皇に直接関わる重要な神々であるが、そのうちに皇祖神であるアマテラス（天照大御神）が含まれていない。

② 「高御産巣日神」について

「古事記」では誕生や葦原中国の平定の命令神としての多くの記述がある。「日本書紀」 巻第二 神代下では「皇祖」とされ、出雲国造「神賀詞」では「高天の神王」（たかあまのかみおや）とされる。
そのことから、原初の最高神はタカミムスヒ（高御産日神/高皇産霊尊）であったとする説がある。 「日本書紀」で、アマテラスは第10代崇神天皇の時に宮廷外に出された（のち伊勢神宮）と記され、7世紀末頃にタカミムスヒは宮中に、アマテラスは伊勢に住み分けたとする説もある。 崇神天皇以前の皇祖として、アマテラス と 神武天皇 を設定したのは天武天皇だろう。

③ カグツチの別名 「ホムスヒ」（火産霊）

火の神。火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ；迦具土神）、火之夜藝速男神（ひのやぎはやをのかみ）、火之炫毘古神（ひのかがびこのかみ）と表記。『日本書紀』では、軻遇突智（かぐつち）、火産霊（ほむすひ）と表記される。イザナミは火の神カグツチを生んだことで陰部を火傷して亡くなった。それを怒ったイザナギはカグツチを斬り殺すが、その際に「山神八柱」や、「建御雷之神など雷火神や剣神ら八柱」が化生している。多数の神を生み出す神ということで「むすひ」の神なのであるが、ここから「むすひ」の、死んでもなお多くの命を生み出すという、生命の連続性の象徴という意味が見えてくる。「連続」とはすなわち「結び」（むすび）である。

和久産巣日神、ワクムスビもその時に誕生し、死んでから多数の穀物などを生み出している。『日本書紀』では稚産霊と表記される。神名の「ワク」は若々しい、「ムスビ」は生成の意味であり、穀物の生育を司る神である。食物神のトヨウケヒメ（豊受比売神）を生み、『日本書紀』ではその体から蚕と五穀が生じている。 他の食物神の大気都比売（オオゲツヒメ）・保食神（ウケモチ日本書紀）などと同様に、稲荷神（倉稲魂命）（うかのみたま）と習合し、同一視されるようになった。オオゲツヒメは、神産みにおいてイザナギとイザナミの間に生まれたとの記述がある。
高天原を追放されたスサノオは、鼻や口、尻から食材を取り出し、それを調理していたオオゲツヒメを、汚い物を食べさせていたのかと斬り殺した。その死体、頭から蚕、目から稲の種、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が生まれた。

④ 熊野速玉大社 ： 熊野速玉大神 熊野夫須美大神（むすび産霊神） 熊野本宮大社 ： 家都美御子大神（食物神）

（参考） 忌部氏である斎部広成、大同2年（807年）編纂の『古語拾遺』によると、初代神武天皇の時に皇天二祖（天照大神・高皇産霊神）の詔のままに神籬を建て、高皇産霊・神皇産霊・魂留産霊・生産霊・足産霊・大宮売神・事代主神・御膳神を奉斎したといい、編纂当時の祭祀はこれに始まるという。
△カムロギ・カムロミと産霊神　　始源神の天之御中主が親で、高御産巣日が長男 、津速産霊（ツハヤムスビ）が次男、神産巣日を三男とする。
△氏族と産霊　　高皇産霊神は伴・佐伯の祖、津速産霊神は中臣朝臣の祖、神皇産霊神は紀直の祖。

総角結び　agemaki musubi
無防備な背後を守り、生命の緒をつなぎとめる護符としてつけられている。この総角結びは中央の結び目の形から「入型」と「人形」に分けられます。
日本武具には「人形」を使い、部屋や調度品の装飾には入型が使われる。

古事記　「 産霊 神々の位置付け 」

神産巣日神 ①
カミムスヒ

天之御中主神
アメノミナカヌシ

高御産巣日神 ②
タカミムスヒ

伊邪那岐神
イザナギ

伊邪那美神
イザナミ

大気都比売神
オオゲツヒメ

カグツチ 雷
火之迦具土神 ③
別名　火産霊　愛宕神
ホムスビ

五穀・蚕

「山神 八柱」
「建御雷之神ら
雷火神・剣神　八柱」

和久産巣日神
ワクムスビ

（子）豐宇氣毘賣神
トヨウケヒメ

建速須佐之男命
スサノオ

月読命
ツクヨミ

保食神
五穀・蚕
（日本書紀）

天照大御神
アマテラス

（子）宇迦之御魂神（稲荷神）
（ウカノミタマ）
大年神　（稲・穀物神）　役割は？　　皇祖の系統

ハレ・ケ　穢　禊・祓　　タマ・モノ　殯（モガリ）　鎮魂　魂振　（招魂　みたまふり）

「神産巣日神」について　　古事記の中には、古代生活における「循環」信仰、思想 も描かれている。
黄泉の国（死者の国）を訪問した伊邪那岐命（いざなぎのみこと）が死の穢れに触れ禊祓をした際に、悪霊はらいや、時、病気治療、道案内、食料、航海、漁労など十二の神が誕生したという記述。 そして、目耳鼻口陰尻から食物を出した大氣津比賣神を、須佐之男命（すさのお）が穢れとして殺した時に、神産巣日御祖命がそれら食物を 種とした記述がある。
また、死んだオオナムチノカミ（大国主神）の下へキサカヒヒメ（赤貝），ウムギヒメ（蛤）を派遣して再生させている。
　それらは高御産日神にはない生命再生の象徴である。「ハレ」は清浄性・神聖性、「ケ」は日常性・世俗性、そして「ケガレ」は不浄性だが、ケガレは稲の霊力であるケが枯れた状態、つまり「ケ枯れ＝ケガレ」であり、そのケガレを回復するのがハレの神祭り、その結果、生活に必要な活力が誕生、再生されるといった 循環の信仰、思想である。

「ハレ」と「ケ」は、日本人の生活リズムを表現した言葉で、漢字で書く場合ハレには「晴」、ケには「褻」の字が当てられている。民俗学者・柳田國男（明治8年～昭和37年）によって注目され、 かつての日本人の生活にはハレとケの二つの時期があり、両者ははっきりと区別されていた、と主張。「ハレ」とは、神社の祭礼や寺院の法会、正月・節句・お盆といった年中行事、初宮参り・七五三・冠婚葬祭といった人生儀礼など、非日常的な行事が行われる時間や空間を指した。 そしてハレ以外の日常生活（普段の労働や休息の時間・空間）が「ケ」であるとして、このハレとケとの循環リズムから日本の生活文化が分析できると唱えた。
　非日常である「ハレ」の日は、単調な生活に変化とケジメをつける日であり、この日には人々の衣食住に大きな変化が表れ、例えば特別な日にのみ着用される「晴れ着」を着たり、家や部屋には普段とは違う装飾を施したり、酒・米・魚・餅・団子・赤飯・肉・寿司といった日常生活では口にしない食物が供せられるなど、非日常的な世界が設定された。
ハレの場における酒は、味を楽しむより、酔う事によって共同体を構成する人々が連帯感を深める事が目的であったとされる。 今日使われる「晴れ着」「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉は、いずれもハレの概念に基くものである。 一方、ケとは、日常生活そのものを指し、普段着を意味する「褻着」（けぎ）や日常食を意味する「褻稲」（けしね）などの民俗語彙から抽出された概念といわれる。柳田は、このハレとケの循環の中に稲作を基礎とする民族生活があった事を指摘、 江戸時代後半以降は飲酒、魚食や肉食が日常化し、人々の服装も色鮮やかになっていくなど、ハレの日常化が進み、近代化と共にその両者の区別が曖昧になってきている事を指摘した。
　古代の「死生観」において、「ケガレ」る 魂「タマ」は生霊であり、生霊が抜けた肉体が行く世界が「モノ」である。 縄文時代には屍を村外に遠ざけたことから、「ケガレ」の意識が強く表れている。弥生時代には、土器など死者への副葬品が後期にかけて増加する。そして、この副葬品は、古事記の葬儀に登場する「殯」に用いられたと考えられている。
　「殯」とは、死の直後「タマ」はすぐには「モノ」の世界に行かず滞留すると考えられ、「鎮魂」の歌舞、辞で「魂振」れ をして屍に呼び戻し、死者と生者の「タマ」を結合する儀式である。
「魂振」の意義は、弥生時代の祖霊信仰、飛鳥時代の皇祖信仰に基づく、地位と資産の継承にある。 臣下が「誄」（るい しのびごと）すなわち忠誠・服従する様子、またその儀式の場所として、飛鳥淨御原宮内の「御窟殿」（みむろでん）の存在が、「魂振」と共に日本書紀の天武期に多く記録されている。 壬申の乱のあとの混乱鎮静への取組が伺われる。

「魂振」については、祭祀を司る**物部氏**の記事が明確である。以下、**石上神宮**での行事より （同社には、鎮魂八神と大直日神（おおなびのかみ）を祀る天神社がある）
饒速日命の御子様に宇摩志麻治命（うましまじのみこと）がおられました。宇摩志麻治命は、初代の天皇である神武天皇と皇后の聖寿の長久を祈られる時、天璽十種瑞宝を用いて鎮魂祭（みたまふりのみまつり）を斎行されました。これが鎮魂祭の初めとなったことが『先代旧事本紀』に記されています。この物部氏の鎮魂は、御魂を振動させる「御魂振り（みたまふり）」と「玉の緒」を結ぶことが中心です。「玉の緒」とは玉を貫きとめる緒（ひも）のことで、玉（たま）と同音の「魂（たま）・命」を結び留めることを表しています。現在も、石上神宮では11月22日夜に「鎮魂祭（ちんこんさい）」を、また節分前夜に「玉の緒祭（たまのおさい）」を斎行しています。

「 古事記 原文 」　変体漢文　岩波古典文学大系本（訂正 古訓古事記）　近代デジタルライブラリー　国宝「真福寺本」照合済

「伊邪那岐命　と伊邪那美命」

（前略）是以伊邪那伎大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音。穢國而在祁理。此二字以音。故、吾者爲御身之禊而、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐 此三字以音。原而、禊祓也。
故、於投棄御杖所成神名、衝立船戸神。次於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神。次於投棄御囊所成神名、時量師神。次於投棄御衣所成神名、和豆良比能宇斯能神。此神名以音。次於投棄御褌所成神名、道俣神。次於投棄御冠所成神名、飽咋之宇斯能神。自宇以下三字以音。次於投棄左御手之手纏所成神名、奥疎神。訓奥云於伎。下效此。訓疎云奢加留。下效此。次奥津那藝佐毘古神。自那以下五字以音。下效此。次奥津甲斐辨羅神。自甲以下四字以音。下效此。次於投棄右御手之手纏所成神名、邊疎神。次邊津那藝佐毘古神。次邊津甲斐辨羅神。右件自船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前、十二神者、因脱著身之物、所生神也。
於是詔之、上瀬者瀬速、下瀬者瀬弱而、初於中瀬墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神。訓禍云摩賀。下效此。次大禍津日神。此二神者、所到其穢繁國之時、因汚垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、神直毘神。毘字以音。下效此。次大直毘神。次伊豆能賣神幷三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神。次底筒之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中筒之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神。訓上云宇閇。次上筒之男命。此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、**墨江之三前大神**也。於是洗左御目時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**。須佐二字以音。

「天照大神　と須佐之男命」

（前略）故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒、打折三段而、奴那登母母由良邇、此八字以音。下效此。振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而、自佐下六字以音。下效此。於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命。此神名以音。亦御名、謂奥津嶋比賣命。次市寸嶋上比賣命。亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。
（中略）又食物乞大氣津比賣神。爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稲種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神產巢日御祖命、令取茲、成種。

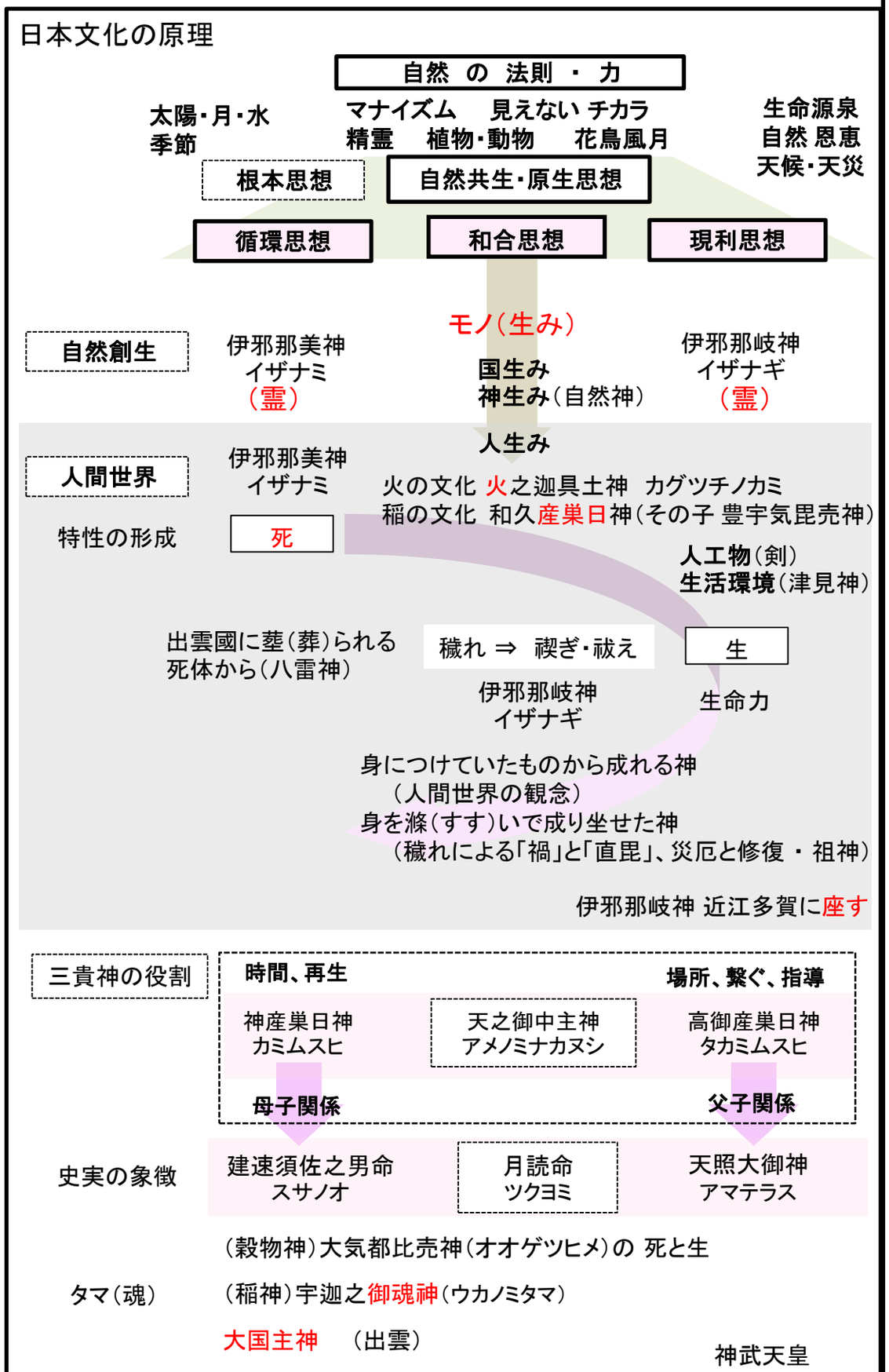
「葦原中國の平定」 天若日子の葬儀

（前略）此時阿遲志貴高日子根神自阿下四字以音。到而、弔天若日子之喪時、自天降到、天若日子之父、亦其妻、皆哭云、我子者不死有祁理。此二字以音。下效此。我君者不死坐祁理云、取懸手足而哭悲也。其過所以者、此二柱神之容姿、甚能相似。故是以過也。於是阿遲志貴高日子根神、大怒曰、我者愛友故弔來耳。何吾比穢死人云而、拔所御佩之十掬劒、切伏其喪屋、以足蹶離遣。此者在美濃國藍見河之河上、喪山之者也。其持所切大刀名、謂大量、亦名謂神度劒。

古事記には、自然創生、人間世界、そして異なる文化の習合として三貴神の物語が描かれている。
伊邪那岐（いざなき）神と伊邪那美（いざなみ）神は、古事記の序文で「二霊為群品之祖神」と記される。
万物の生みの親としてその神名に「霊」の文字が使われ、国生みや神生みを成す。ここで重要なことは、その二神によって「死」と、「生の穢れ」と「再生」が描かれていることである。死後、黄泉の国に行った伊邪那美神と、そのから引き返した邪那岐神との間で、「千引き石」を境に人間の生死を宣言している。伊邪那美神は、神として始めて死ぬが、伊邪那岐神は多賀に坐す（古事記）、もしくは淡路に隠れた（日本書紀）とされる。　また人間を自然と断絶せず「青人草」「人草」と表現している。
これらの伊邪那岐神と伊邪那美神との物語で、「霊」と関係して記述される一連の内容は、我が国文化の古層として、「自然と人間との共通概念」を論証するために重要な手がかりである。
柳田國男の研究者で石文化研究所の小畠宏充所長は著書『日本人のお墓』で、伊邪那美を「自然」（ものの次元）、伊邪那岐を「文化」（たまの次元）と解釈し、「千引き石」を文化的な墓石の原点とする。

最後、其妹伊邪那美命、身自追來焉。爾千引石引塞其黄泉比良坂、其石置中、各對立而、度事戸之時、伊邪那美命言「愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭。」爾伊邪那岐命詔「愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百產屋。」是以、一日必千人死・一日必千五百人生也。故、號其伊邪那美神命、謂黄泉津大神。亦云、以其追斯伎斯此三字以音而、號道敷大神。亦所塞其黄泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黄泉戸大神。故、其所謂黄泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也。

記・紀神話の全体は、天上の神々の世界である高天原（たかまがはら）に淵源する皇室の神聖性と、皇室による国土と国民の支配の正統性を説明する目的で貫かれ、多様な話にもそれぞれに皇室の王権神話の一部としての意味と位置付けが与えられ、これが日本神話の一つの大きな特徴となっている。
天地開闢（かいびゃく）の後にまず活躍を語られるのは、伊邪那岐神・命と伊邪那美神・命で、原初には一面の海だった下界に、最初の陸地の淤能碁呂嶋（おのごろじま）を作ってその上に降り、兄妹で結婚してまず日本の国土の島々を生み、次に多くの神々を生んだが、しまいに火の神を生んだために伊邪那美は、火傷を負って死んだ。伊邪那岐は、地下の死者の国の黄泉国まで妻を連れ戻しに行くが、失敗して地上に帰り禊（みそぎ）をすると、最後に左の目から天照大御神が、右の目から月読命が、鼻から建速須佐之男（すさのお）命が誕生し、天照大御神は高天原を、月読命は夜之食国を、建速須佐之男は海原を支配せよと、伊邪那岐から命令される。だが素戔嗚尊はこの命令を聞かずに泣き続け、怒った父に追放されると、天照大御神に会いに高天原に昇って行き、そこで邪心のないことを証明するために誓約（うけい）をし、姉神は弟神の十拳剣から三女神を、弟は姉が身に帯びていた珠から天之忍穂耳（あめのおしほみみ）命ら五男神を出生させる。建速須佐之男はそれから、高天原で乱暴を働き、天照大御神が怒って天石屋（あまのいわや）に閉じ籠る。太陽が隠れたため、世界が常夜（とこよ）になる。天神たちは相談して、皇室の神器となる八咫鏡（やたのかがみ）と八坂瓊（やさかに）の玉を作って榊に掛け、天宇受賣（あめのうずめ）命が踊りながら乳と陰部を露呈し神々を哄笑させるなど、賑やかな祭をし、天照大御神を天石窟から招き出した上で、建速須佐之男を下界に追放する。建速須佐之男は出雲で八岐大蛇（やまたのおろち）を退治し、その尾から出た草那芸剣（くさなぎのつるぎ）を天照大御神に献上し、生命を助けてやった櫛名田比賣（くしいなだひめ）と結婚する。その子孫の大国主（おおくにぬし）神が、神産巣日神の手の指の間から漏れ落ちて下界に来た不思議な小人の神の少名毘古那（すくなびこな）神と兄弟になり、協力して国造りをすると、天照大神が天忍穂耳命をその国に降らせ支配させようとして、大国主神のもとにつぎつぎに使者を派遣し、命令を伝えさせる。大国主神が最後に使者に来た建御雷之男（たけみかずち）神らの神威に屈し、ついに国譲りを承知すると、天照大神は天忍穂耳命の願いを聞き、この神の代りに誕生したばかりのその子どもで自分の孫の邇邇藝命（ににぎのみこと）に、三種の神器を授け、五伴緒（いつとものお）命らの天神たちを従わせ地上に降らせる。この天孫降臨の一行は、出迎えた猨田毘古（さるたひこ）神の案内で、日向の高千穂峯（たかちほのたけ）に降る。それから邇邇藝命と、その子で山幸彦の火遠理命（ほおりのみこと）、さらにその子で神武天皇の父となった鵜葺草葺不合（うがやふきあえず）命まで、三代の皇祖神は日向に住み、その物語である日向神話が記紀神話の終幕を構成し、このあと神武天皇の東征となる。



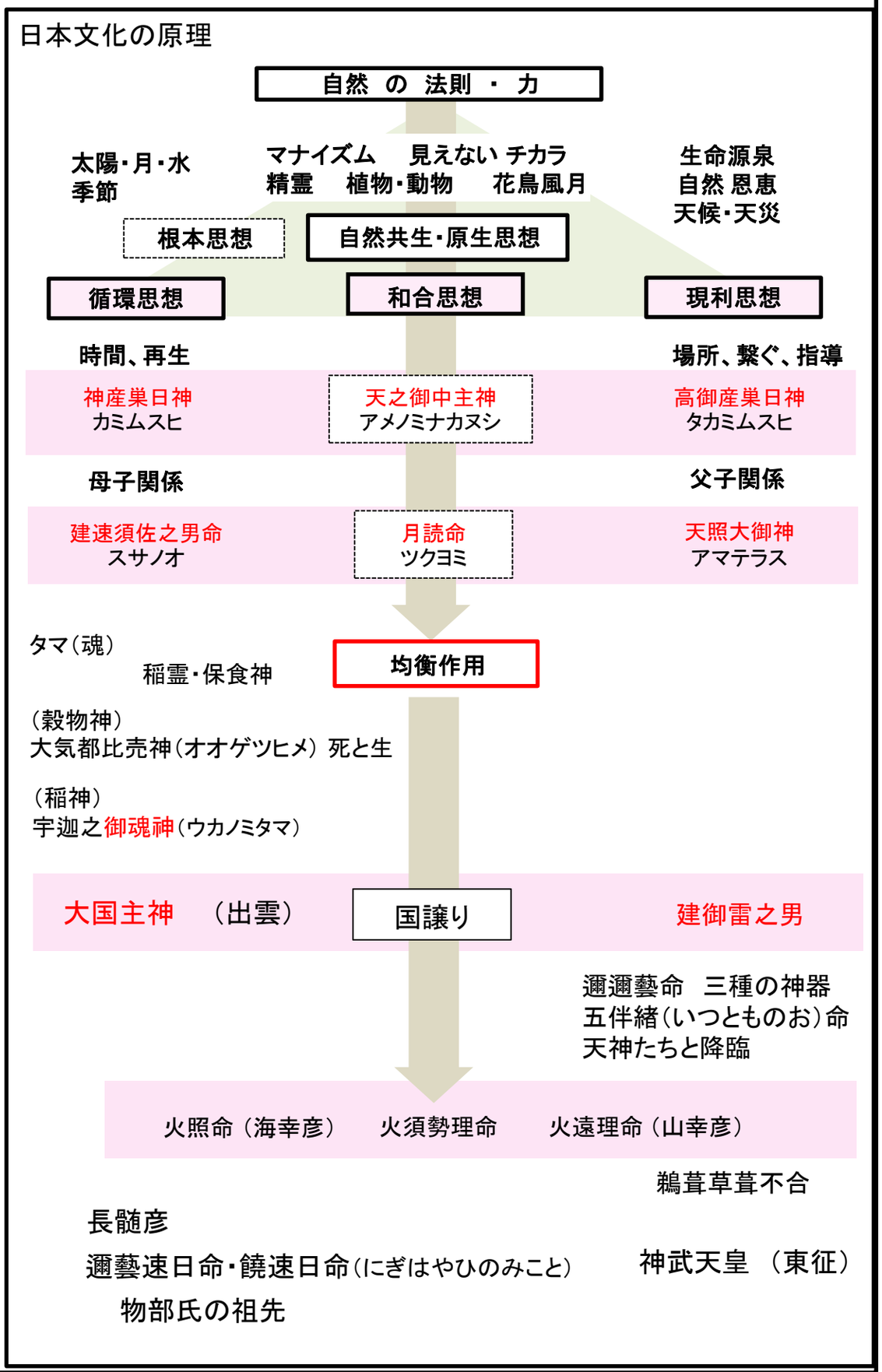
大国主神は、出雲国造（いずものくにのみやつこ）の祖神で、今日、出雲大社の祭神である。
そして、京都、愛宕神社の奥宮に祀られていることも、見逃してはならない。

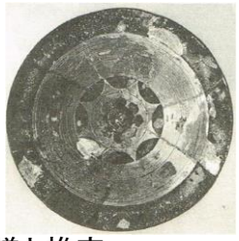
大国主神は、須佐之男の系統として、神産巣日神の助けによって　生死復活を繰り返し、国造りに至る。
大国主神が誕生する前には、天上界から追われた須佐之男に食事させようとした大気都比売神（オオゲツヒメ）の 死によって、蚕、稲の種、粟、小豆、麦、大豆が生まれた。またその系統には、宇迦之御魂神があり、この神もまた、今日、伏見稲荷大社（下社）の祭神となっている。つまり片や高御産巣日神と天照大御神の系統に対し、時間軸の継承、循環的系統として、再生しつつ受け継がれる稲霊・保食神の系統を形成、国造りする大国主神登場の基盤を成している。（紀：倉稲魂命イザナギイザナミの子）
遡れば、イザナミの死から誕生した和久産巣日神の子、豊宇気毘売（とようけひめ）神も保食神としてそれらと同性質の神であり、もちろん天照大御神を祀る伊勢神宮内宮に対し外宮の豊受気毘売神である。
これらに、我が国国家草創期における二つの文化・思想の習合関係が表現されているわけである。

大国主神は、古事記では、大穴牟遅神（おおなむちのかみ）、葦原色許男神（あしはらのしこおのかみ）、八千矛神（やちほこのかみ）、宇都志国玉神（うつしくにだまのかみ）などの別名がある。
日本書紀で別名は、大物主神（おおものぬしのかみ）、大己貴命（おおなむちのみこと）、葦原醜男（あしはらのしこお）、八千戈神（やちほこのかみ）、大国玉神、顕国玉神（うつしくにたまのかみ）とする。
根（ね）の堅州国（かたすくに）（死者の国）の須勢理毘売（すせりひめ）ほか、八上比売（やがみひめ）、沼河比売（ぬなかわひめ）など多くの女性を妻とした。
多くの別名は、各地で各段階で発生した諸神格が、日本神話の綜合期にまとめあげられたもので、その中で、神名として出雲大社などに残ることから、大国主神は最も新しい成立と考えられる。歴史の現実として日本は本来多数の原始国家に分かれ、それぞれに小さい国主がいたが、古代日本の統一が大きく進んだと思われる。その統一のありようは、縄文から弥生時代の、出雲から紀州熊野、北陸、中部地域における、土器種別や、磐座祭祀、銅鐸出土の共通性に見出される。

ちなみに、大国主命の別名、大物主神は、大国主命の幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま）とされている（日本書紀）。 三輪（みわ）氏の祖神で、この神には勢夜陀多良比売（せやだたらひめ）や倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）との聖婚を語られている（古事記、日本書紀）。 蛇神、雷神でもあり、農耕神でもある。 三輪山の「 山の神」で、大神（おおみわ）神社（奈良県）の祭神である。
三輪山は磐座祭祀の地で、その西方の唐古・鍵遺跡などからは銅鐸が出土している。「かんなび山」の名称をもつ山は諸国にあるが、三輪山がもっとも著名である。このほか大和（奈良県）など近畿から出雲（島根県）に多いため、出雲系の神を祀ったものであろうとする説が有力である。

『古事記』の大国主神を主人公とする物語は，（1）オオナムチが種々の苦難，試練を克服して大いなる国主となる物語，（2）ヤチホコの神の妻問い物語，（3）少名毘古那神（すくなびこなのかみ）（少彦名命）との協力による国作り物語，（4）葦原中国の主として天津神に国譲りする話の4部分からなる。
（1）において、オオナムチには多くの兄（八十神（やそがみ））がいたが，1日かれらは因幡（いなば）の八上比売（やかみひめ）のもとへ求婚に出かける。 途中赤裸（あかはだ）の兎と出会い，八十神が兎をいっそう苦しめたのに対しオオナムチは懇切に療法を教えて救い，よって袋を背負い従者の身なりをした末弟のオオナムチがヤカミヒメを得ることとなった。それを怒った八十神はオオナムチを欺いて二度にわたり殺すが，そのつど母神の刺国若比売が神産巣日神にお願いしたりして、助けられて蘇生する。
そのあと紀の国の大屋大屋毘古神から助けられて、祖神スサノオのいる根（ね）の国へ逃れる。
根の国ではスサノオから課された蛇の室（むろ），むかで・蜂の室，野焼きなどの難題を解決した。
葦原中国との境の黄泉比良坂まで追いかけてきたスサノオから、スサノオの娘須勢理毘売命を妻となし，またスサノオから奪った宝器〈生大刀（いくたち）生弓矢（いくゆみや）〉を、正式に授かった。 大国主神は、それをもって八十神を追い払い初めて国を作った。
つまり、大国主神は、生死復活を繰り返して、その国造りに至るわけである。





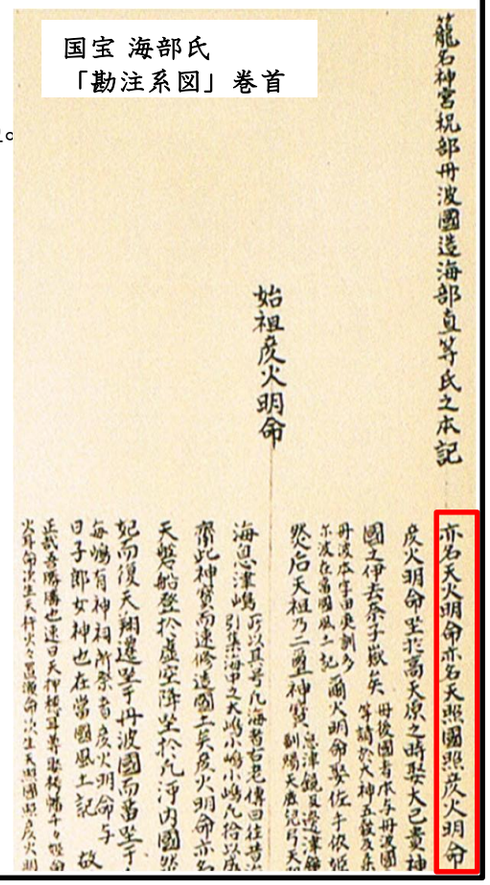
伊勢神宮 の 神的構造 とは
外宮に「豊受大御神」、内宮に「八咫鏡」を神体とする「天照坐皇大御神」を祀る。
「 神山に昇る太陽発祥の地に、光の依代 鏡を祀る信仰、 「豊受大御神」、「天照坐皇大御神」は、出雲と神武 **神々和合の母系二神 である。**
しかし、神話と史実の狭間としての「和合」の原点は 神話では、天照大御神の長男で、天孫降臨する「邇邇芸命」の父親とされる男、邇芸速日命（ニギハヤヒ）にあった。
邇芸速日命は、国宝 海部氏「勘注系図」で、別名「天照　國照　彦天火明命」として その役割が語られている。 その和合の有様とは・・・ 本見解の論拠を、以下に解説する。

信仰の発祥 ・・・「八咫鏡」の検証
考古学者（原田大六氏、森浩一氏）は、「皇太神宮儀式帳」の本鏡内容器の記事などを元に、福岡県糸島市にある平原遺跡出土の大型内行花文鏡（46.5cm）と、同様の大きさ文様と推定。
九州からの神武東征に表現され、のちに祭器となる 鏡文化の流入である。ちなみに大型化は銅鐸や古墳と同様に日本ならではの文化的傾向。 この鏡は天照大神の岩戸隠れの際に「日本書記」で石凝姥命が作ったとされ、『古事記』では伊斯許理度売命と表記。 鏡作坐天照御魂神社は、「 天照國照彦天火明命」 と 石凝姥命ら を祀る。

出雲系始祖との関係 ・・・「天照大御神巡行」の検証
『倭姫命世記』によれば、天照大神奉斎の御杖代として、崇神天皇皇女 豊鍬入姫命が大和笠縫邑（現 檜原神社）から丹波・紀伊・吉備から大和。 倭姫命が大和から伊賀・近江・美濃・尾張を経て伊勢に入り、神託により皇大神宮（伊勢神宮内宮）を創建したとされる（御杖代は依代として遷幸を助ける役割）。
伊勢神宮を創建するまでに天照大神神体である八咫鏡を順次奉斎した場所は「元伊勢」と呼ばれる。日本書紀では倭姫命が全て巡行と記されている。
籠神社によると、丹波奉斎の地は吉佐宮、同社奥宮「真名井神社」で、彦火明命を祖とする海部氏が「豊受大御神」を世襲奉斎する。
彦火明命は別名、天火明命、邇芸速日命（ニギハヤヒ）、天照國照彦天火明櫛玉邇速日命（尊）（国宝 海部氏「勘注系図」、物部氏「先代旧事本紀」が根拠）、出雲系海部氏と物部氏の氏祖共通を語る。 つまり「豊受大御神」は出雲系の神であり、この巡行は、神武勢力への出雲勢力の帰順、そして和合である。

出雲系神社 における「豊受大御神」の系譜　『丹後国風土記逸文』 国宝『海部氏勘注系図』より
磐座から発祥した五穀農耕の祖神、宇迦之御魂神。 倉稲魂命（うかのみたま）と同神。彦火明命が娶った大己貴神の娘、天道日女命が、本神から五穀及び桑蚕等の種を賜い、眞名井掘りて水を濯ぎ、水田や陸田開墾し種蒔、瑞穂が田に充ち満ちた。「真名井」は『出雲国風土記』意宇郡条に「眞名井社」、『延喜式神名帳』出雲国意宇郡に「真名井神社」記載。 桑田（亀岡）出雲大神宮でも、神山、岩座に発する滝に宇迦之御魂神「稲荷社」を祀る。 この地は秦氏の歴史が有り、伏見稲荷大社と関係する。 出雲から丹波、山代。そして伊勢への信仰系譜である。

神々和合 ・・・ 外宮「豊受大御神」 の意味
「倭姫命世記」では、雄略天皇22年、天照大神神託を倭姫命が受け、丹波比治真名井より伊勢国度会郡山田原に移し奉祭。倭姫命の記事以外は伊勢神宮全体としても認める歴史である。
すなわち、出雲と神武の神々和合である。 雄略期は、皇統内部の紛争が多発、また一方では皇統への和邇・吉備・葛城氏の姫たち入内 が集中。 倭姫命登場は崇神期と時代を違え重なり母系による和合を象徴している。外宮「豊受大御神」は代々、度会氏が神職として奉職したが、中世には度会家行が、豊受大神は天之御中主神・国常立神と同神であり、外宮は内宮よりも立場が上であるとする伊勢神道（度会神道）を唱えた。 その「神道五部書」の一書が 『倭姫命世記』である。 現在、伊勢神宮では 「外宮先祭」を公認している。
『元伊勢籠神社御由緒略記』にも、豊受大神は、またの名を「天御中主神」「国常立尊」とし、その顕現の神を倉稲魂命（稲荷大神）、そして、「天御中主神」は、宇宙根源の大元霊神で、五穀農耕の祖神、水の徳が顕著で生命を守る、とする。 また、『海部氏勘注系図』 冒頭で、天照豊受皇大神、天照大神 和魂とする。
籠神社の奥院「真名井神社」磐座に祀られている「豊受大御神」は、ここでは「天御中主神」を同名とし当論で指摘した「自然の見えないチカラ」への信仰を裏付ける。



国宝 海部氏
「勘注系図」 巻首

磐座 と 鏡 ・・・ 大神神社 と 伊勢神宮
大神神社の神体三輪山の東方に伊勢神宮は位置する。 神体の山を超える様に、太陽が昇る場所 となる。 鏡、光、太陽の信仰の関係が、その位置の説明となる。
大和の神体は不動である。 出雲から丹波、大和へと伝来したその信仰、氏族の源流を逆に辿り、「豊受大御神」 を選択したと考える。 大神神社摂社の檜原神社は「倭笠縫邑」の地であると伝えられ、元伊勢の一つ。 この地から巡行した理由でもある。
作者不詳の能「三輪」終りの部分の歌に「思えば伊勢と三輪の神。一体分身の御事。今更、なんと、いわくら（磐座・言わくら）や」 との言葉があり、ここでも伊勢神宮との関係を示唆している。

物部始祖、邇速日命とは　記紀では、東征した神武に「天津瑞」（あまつしるし）を献上、元来は祭祀を担う。
『先代旧事本紀』（平安時代初期　物部氏作成）では「天津瑞」は「十種神宝」と呼ばれる。
十種神宝をもち、尾張・鴨縣主の祖ら三十二人の防衛、五部人、五部造、天物部等二十五部人、船長という多数の随伴者を従えて天降った。また、 饒速日尊は、天神御祖の詔を受け、天盤船（あまのいわふね）に乗って 河内国河上の哮峰（いかるがのみね）に天降り坐し、大倭国鳥見白庭山（とみしらにわのやま）に遷り坐す。そして、長髄彦の妹御炊屋姫（みかしやひめ）を娶り妊娠させるが、子が生まれる前に、 饒速日尊は死んでしまう。 神武への服従は避けている記述である。 はたして邇芸速日命の正体、役割とは？
記紀と、国宝 海部氏「勘注系図」、物部氏「先代旧事本紀」を総合すると、答えは一つしかない。 天照大御神の長男、邇芸速日命（ニギハヤヒ）は自らは降臨せず、大国主の娘を娶るため、婿入りして海部氏や物部氏の祖となった。 この説は、その男の別名「天照　國照　彦天火明命」 が裏付ける。
すなわち、丹波の海部氏の地は、眞名井神社「豊受大御神」と、同氏の祖として籠神社に祀る「彦火明命」、別名「邇芸速日命」「天照　國照　彦天火明命」を以て、大事業「和合」を成し遂げたのである。 『日本書紀』では饒速日命、『古事記』では邇藝速日命と表記する。別名、櫛玉命（くしたまのみこと）。
『先代旧事本紀』では、「天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊」と記する。

スサノオとはどんな存在であったか？　記紀と同時代730年頃までに成立した名神大社や、現代なお多くの神社で祀られている大国主ではなく、スサノオがアマテラスと対極として語られている。大国主＝出雲勢力＝銅鐸(出雲から大和に分布)＝弥生時代(大和では唐古・鍵遺跡)を前提とするなら、その祖とされるスサノオは弥生初期か縄文時代を絶対条件に考えせざるえない。 実在の是非より、条件に沿って何を象徴しているか？を検討する事に意味があると考える。 実はその時代にスサノオ神話と関係する確かな手掛かりがあった。 山陰から近畿、北陸中部、東海、そして紀州熊野にも、他の地域と異なる「北白川下層様式土器」が連なる。出雲では東部を中心に出土、北九州の「轟様式」が混在している境界である。以上は越の姫、宗像の姫などの記事とも符合する。 古事記の「速須佐之男命、宮可造作之地、求出雲國、爾到坐須賀此、下效此地而詔之「吾來此地、我御心須賀須賀斯而。」スサノオの宮はその出雲東部に「須我神社」として残る。

一方「出雲風土記」に描かれた彼は平和で、古事記高天原での悪態は無い。『日本書紀』天から追放された素戔嗚尊は、新羅の曽尸茂梨(そしもり)に降り、この地吾居ること欲さずと言い息子の五十猛神(いそたける)と共に土船で東に渡り出雲国斐伊川上の鳥上の峰へ到った記事。そこから新羅との関係説があるが時代適合しない。また、鉄剣神話から奥出雲の鉄生産タタラとの関係を指摘する説もあるが同様である。 鉄は弥生初期に北九州で盛んとなり中期から後期、日本海、瀬戸内、畿内と伝播している。これはアマテラスへのスサノオ服従、天皇威信として三種神器の付加である。

スサノオの実像は、古事記では、穀物神との関係、出雲と紀伊の記事。さらに日本書紀では、樹木の創造神として、他の二神と明確に差別化される。 彼の子、五十猛神が天降る際に多くの樹木の種を持っていたが、筑紫から始め各地(大八洲国)に植えたともされる。

日本書紀 「鬚髯から杉、胸毛から檜、尻毛から槇と榧、眉毛から楠など体毛を抜いて作った各種の樹木を、五十猛神、大屋津姫命と柧津姫命が全国に植えた」とされるスサノオ。「亦能分布木種 即奉渡於紀伊國也 然後 素戔嗚尊 居熊成峯 而遂入於根國者矣」と紀伊に至り根国に入ると記す。五十猛命は、「 爲有功之神 即紀伊國所坐大神是也」と、熊野に大神として祀られた。 とする。

古事記では、五穀を「二目生稲種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥(麦)、於尻生大豆」と生んだ大氣津比賣神(穀物神)。その神を誕生させたのはスサノオである。 スサノオは、アマテラスの勾玉から、正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊(天孫降臨する邇邇藝命の親)。天穂日命是出雲臣・土師連等祖也、天津彦根命是凡川内直・山代直等祖也、活津彦根命、熊野櫲樟日命、凡五男矣。を生む。そして熊野大社など熊野三山に表現されているのは、古代の自然神、神倉神社や速玉の「岩」・本宮の「川」・那智の「瀧」である。 農耕の神ではなく、明らかに漁撈・狩猟に関係する縄文の神である。

出雲熊野の櫛御気野命や紀州熊野本宮の家都美御子大神は、縄文時代の狩猟生活、海人族・山麓(族)たちの自然神と考える。

出雲では西方の大国主と和合継承、銅鐸に「網」紋様が残る。対するアマテラスは、弥生時代・絹織文化の象徴であり、皇祖神の立場が付加された存在と考えれば理解できる。絹織文化は弥生初期の北九州有田遺跡から、弥生時代末に大和の纏向遺跡に至る。スサノオはアマテラスの織姫を驚かせ織機の道具、杼(ひ)で死んだ。

八坂神社の祭神がスサノオとなったのは明治以降の神仏分離からで、それまでの祭神は「牛頭天王」であった。牛頭天王は仏教の天部、釈迦生誕地に因む祇園精舎の守護神が原型。『釈日本紀』に引用された『備後国風土記』逸文を初見とする「蘇民将来」、その伝説に登場する悪態疫祓いの武塔神がそこでは牛頭天王と称された。 新羅の牛頭山や前出「日本書紀、スサノオの新羅降臨」が、時代考証とは関係無く「新羅・悪態」関連で同一し習合したと考える。 663年(天智2年)倭国は百済の救援のため、朝鮮半島で唐・新羅連合軍と白村江の大敗。天智天皇7年(668年)、新羅の僧沙門道行の草薙剣盗難事件。700年代、新羅南部沿海の流民・海賊が対馬・北九州に襲来していた。古事記編纂当時、新羅とは良好な関係ではなく、悪態新羅に仮託した悪態スサノオの演出である。

藤原基経が始めた関白を廃し天皇親政、菅原道真進言で遣唐使を廃した寛平の治の宇多天皇。延喜4年(904)仁和寺御室を建立し初の法皇に、国風文化大成である古今和歌集から二年後、907年熊野詣でた。992年花山上皇詣を経て、応徳3(1086)年から院政の白河上皇、石清水八幡宮の次に1090年熊野詣に。その後、亀山上皇まで約200年、鳥羽・後白河・後鳥羽上皇で熊野詣が最盛。熊野詣の本質は「皇祖神以前、自然神への畏敬崇拝」と考える。新羅入寇の時代、清和天皇は貞観元(859)年熊野速玉と坐神を昇位、翌860年に石清水八幡宮創建。宇多天皇も新羅危機「寛平の韓寇」で熊野詣を始め、気比神宮を正一位勲一等に。古代神(スサノオ)への天皇親政国防祈願と考える。上皇時代906年月読神極位、907年熊野二神昇位。保元・平治の乱後永暦元(1160)年後白河上皇の熊野詣、新熊野神社創建も同じ心情であろう。密教を背景に天台本覚「草木国土悉皆成仏」森羅万象の仏性、古代自然神への聖域詣。親鸞伝記、曾孫の覚如著「御伝鈔」では、「証誠殿」熊野神の本地を阿弥陀如来と差別したが、一遍は神仏無差別した。 熊野詣は室町に衰退するが、聖・御師(おし)・山伏による全国勧進活動により江戸時代には大衆盛況する。

応神天皇は敦賀の気比神、伊奢沙和気(いざさわけ)大神に、「我に御食(みけ)の魚(な ・ 名？)給へり」と言った。
神武天皇は若御毛沼(わかみけぬの)命、熊野大社も神祖熊野大神櫛御食野(みけぬの)尊である。では「御食」とは何か？
それは古代自然・食物神の魂を表し、御食を給わることは、神の魂を賜り「誓約」即位と考える。
御食(御気・家)の名を持つ古代自然神への高い価値感は、難局に遭遇した天皇たちの熊野詣や神位昇格で明らかである。

古事記より 三貴神誕生から天孫降臨直前まで （宇氣比と氣比神宮　神武系と崇神系の和合を、応神天皇即位で誓約　御食はその誓約）

① 海との由来　伊邪那岐命の禊から誕生、海の統治を命ぜられるが断り、母(伊邪那美)のいる根の堅洲国に行きたい「僕者欲罷妣國根之堅洲國、故哭」というが追放される。天照大御神に願いに行き「宇氣比(誓約)」で、速須佐之男命から宗像三神が、天照大御神からは正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命(のちに天孫降臨する邇邇藝命の父)、天菩比命(その子、建比良鳥命は出雲國造らの祖)たち五神が誕生する。

② **穀物神の創造神**　(鉄器の生産　武力服従　櫛の呪力) 速須佐之男命の悪態はひどくなり、「天の岩戸」のあと夜良比(流刑)とした。不潔を嫌い速須佐之男命が切った大氣津比賣神からは五穀が誕生する。 出雲に追放された速須佐之男命は、大山津見神の孫である櫛名田比賣を救うため神聖な櫛に変身させ自身の美豆良(角髪みずら)にさし八俣遠呂智(おろち)を退治、草那藝之大刀を天照大御神に献上した。(天皇の権威たる三種の神器の一つになる)出雲の須賀に宮殿を作り、櫛名田比賣と、八嶋士奴美神が誕生、大山津見神の娘、大市比賣を娶り、大年神、次宇迦之御魂神が誕生。八嶋士奴美神子孫が大國主神(大穴牟遲神・葦原色許男神・八千矛神・宇都志國玉神)。

③ 出雲 と 紀伊の国　(出雲から倭国へ)大穴牟遲神は、因幡の素兎を助けた後、八十神の罠で死ぬが神産巣日神の使いで再生。母親刺國若比賣の勧めで木國(紀伊の国)之 大屋毘古神之御所へ遣わしたが、またも八十神から逃れるため須佐能男命がいる根堅州國行きとなる。そして、須佐之男命の娘、須勢理毘賣を娶る時、黄泉比良坂まで追い駆けてきた須佐之男命から、奪った大刀と弓矢で八十神を追い払い、大國主神また宇都志國玉神となって宇迦能山の麓に御殿を建てる様に告げられる。
その後、大国主は、高志(越)の国の沼河比売、胸形(宗像)の多紀理毘賣命とも結ばれ、出雲から倭國に向かい神産巣日神之御子である少名毘古那神(書紀で、行至熊野之御碕、遂適於常世鄉矣)、御諸山上神(三輪山の神)と葦原中國を作り堅めた。(冒頭 銅鐸分布と適合)

考古学から紀州熊野（以下、熊野）の信仰起源を確認する。 縄文前期、山陰から近畿、北陸中部、東海、そして熊野にも、他の地域と異なる「北白川下層様式土器」出土地が連なる。 中期には「船元・里木様式」、後期には「元住吉山宮滝様式」と同様の地域性を保ち、熊野では、沿岸の三重県尾鷲市の曽根（そね）遺跡や熊野市の釜ノ平（かまのだいら）遺跡、速水大社（速玉大社）境内にも中期遺跡がある。 縄文晩期「凸帯紋系土器」、弥生初期「遠賀川様式」で、一旦、北九州から東海まで共通するが、弥生時代の中期から後期に九州とは違う「櫛描紋」でまた「山陰から近畿、北陸、東海、そして熊野（沿岸）」共通に戻る。そして大和「唐古・鍵遺跡」など畿内一部をごく最後に、後期から晩期に消滅する。 つまり熊野は今の速玉大社が所在する沿岸部を主に、縄文から弥生まで、出雲から近畿、東海と共通した文化を持ち、人々の交流が継続されていたと考える。一方、熊野祭神の初見は、大同元(806)年『新抄格勅符抄（しんしょうきゃくちょくふしょう）』。天平神護2(766)年、速玉神と熊野牟須美神にそれぞれ4戸の封戸（ふこ）が与えられたと記される。　なお、気比も東方の「諸磯様式」などとの境界地域にあたる。

以上、考古と封戸祭神から、熊野信仰は速玉大社の場所が起源と判断され、古事記では安曇・宗像・住吉の名で登場する、縄文時代の海人族を関係させる。
速玉大社の祭神は、熊野速玉大神、熊野夫須美大神であるが、前述その封戸を受けた「速玉神と熊野牟須美神」と考える。 夫須美と牟須美、つまり古事記で神産日神と高御産日神などと表現される「産日（むすひ）、生命誕生・再生の神」である。 古事記では、神産日神と高御産日神の系統から伊邪那岐神と伊邪那美神が生まれ、そのあと山神、海神、穀物神、建速須佐之男命、天照大御神、月読命が誕生する。 熊野にとっては「速玉神と熊野牟須美神」が信仰の誕生、むすびの神である。

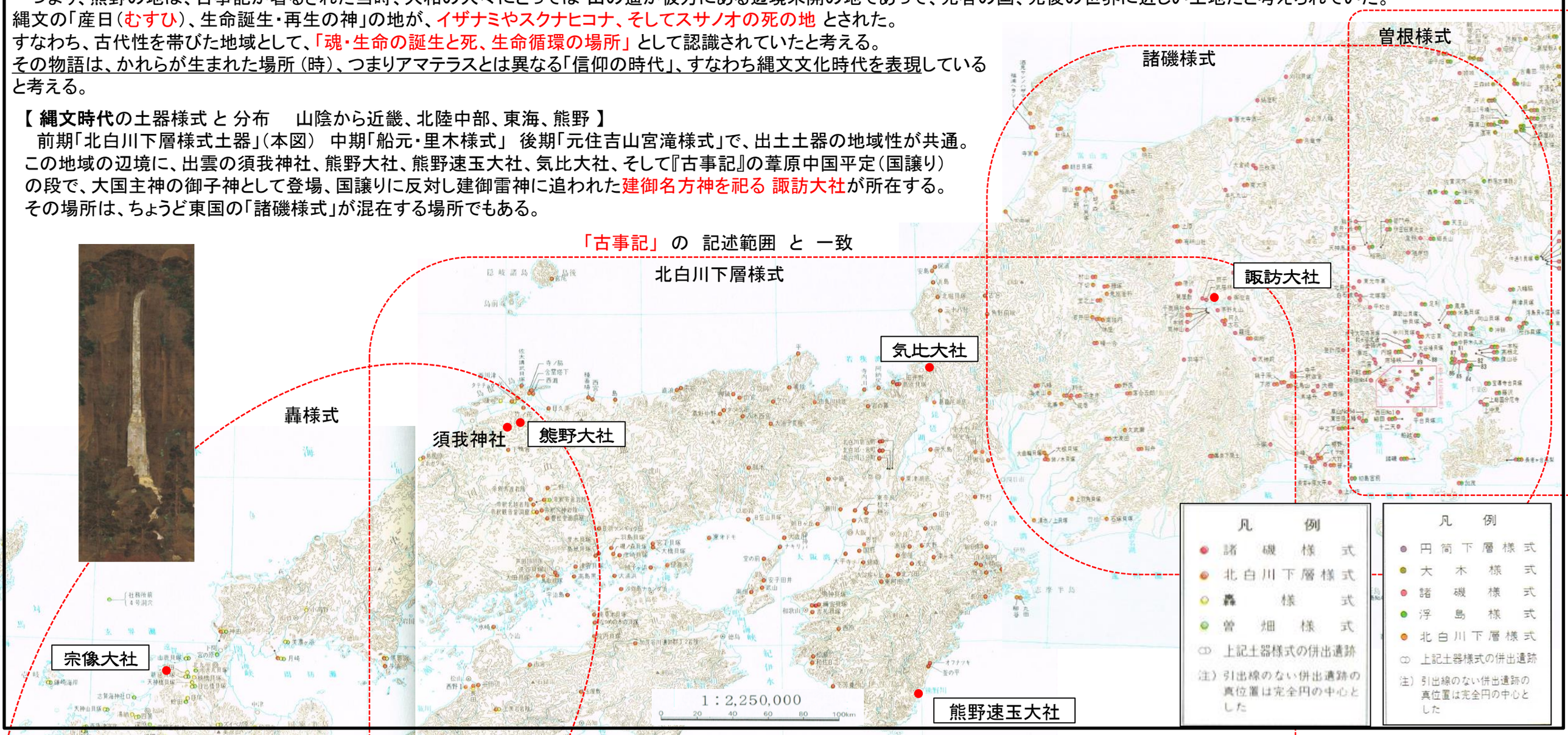
現存する熊野縁起最古の文献「熊野権現御垂迹縁起」（後白河法皇・二条天皇 1163年長寛勘文）など諸書では、熊野の神々は、まず初めに神倉山のゴトビキ岩に降臨され、その後、景行天皇58年、現在の社地に新しい宮を造営してお遷りになり、「新宮」と号したことが記されている。 熊野速玉大社の1km南方、神倉神社（今の祭神は高倉下命（タカクラジノミコト）と天照大神だが）のゴトビキ岩（その形状からヒキガエルの熊野方言）の場所が磐座信仰、「速玉神と熊野牟須美神」の坐す場所にふさわしい。 さらに、ゴトビキ岩の下からは銅鐸の破片が発掘されている。 縄文から弥生への「出雲と熊野」 土器・銅鐸の遺跡が、神話のスサノオやオオクニヌシを象徴している。

神武天皇が東征、上陸した場所は熊野とされる。熊野灘で神武は二人の兄を失う。 稲飯命（イナヒノミコト）三毛入野命（ミケイリノミコト）は海に苦しめられ死んだ。
『日本書紀』で、イザナミがカグツチを生んで死んだのち、遺体は紀伊国の熊野の有馬村に葬られた。イザナギの唾液より速玉神が化生したとされる「乃所唾之神、號曰速玉之男」。
また、スクナヒコナが熊野の御崎から常世（死後の国）に渡った。 さらに、スサノオも紀の国に渡り、熊成峯から根の国（死後の国）に入った、と記されている。

つまり、熊野の地は、古事記が著るされた当時、大和の人々にとっては 山の遥か彼方にある辺境未開の地であって、死者の国、死後の世界に近しい土地だと考えられていた。
縄文の「産日（むすひ）、生命誕生・再生の神」の地が、イザナミやスクナヒコナ、そしてスサノオの死の地 とされた。
すなわち、古代性を帯びた地域として、「魂・生命の誕生と死、生命循環の場所」 として認識されていたと考える。
その物語は、かれらが生まれた場所（時）、つまりアマテラスとは異なる「信仰の時代」、すなわち縄文文化時代を表現していると考える。

【 **縄文時代**の土器様式 と 分布　山陰から近畿、北陸中部、東海、熊野 】

前期「北白川下層様式土器」（本図）　中期「船元・里木様式」　後期「元住吉山宮滝様式」で、出土土器の地域性が共通。
この地域の辺境に、出雲の須我神社、熊野大社、熊野速玉大社、気比大社、そして『古事記』の葦原中国平定（国譲り）の段で、大国主神の御子神として登場、国譲りに反対し建御雷神に追われた建御名方神を祀る 諏訪大社が所在する。
その場所は、ちょうど東国の「諸磯様式」が混在する場所でもある。



神社祭神

出雲

熊野大社　伊邪那伎日真名子 加夫呂伎 熊野大神　櫛御気野命（くしみけぬのみこと）と称える素戔嗚尊 （ 社伝より ）

櫛御気野命は、櫛は奇霊（くしび）、御気は**御食または御木**のことで、明治以降の復古主義神名「神祖熊野大神 櫛御食野命」と同神

敦賀

氣比神宮　伊奢沙別命（社伝で笥飯けひ大神 、御食津大神とも）　神功新羅遠征後　応神天皇と名（魚）を交換 「日本書紀」

宇多期の寛平5（893）年までに正一位勲一等 （同時代では、山城賀茂神、藤原系の春日大社、松尾神、月読神に限られる）

御食津神は、食物を司る神　宮中で祀られていた宮中八神の一柱　八神殿は、日本の律令制下で古代から中世の間に神祇官西院に設けられた、天皇守護の8神を祀る神殿。

他は、神産日神（カミムスビ）と高御産日神（タカミムスビ）、玉積産日神（タマツメムスビ）、生産日神（イクムスビ）、足産日神（タルムスビ）　大宮売神、事代主神。

皇祖神であるアマテラス（天照大御神）が含まれていない。

紀州

熊野三山　熊野本宮大社（ 家都美御子大神 けつみみこのおおかみ（社伝 素蓋鳴大神））樹木を支配する神、 須佐之男命、五十猛命の説あり。

第二殿 中御前 速玉之男神 （日本書紀に掲載）　家都美御子大神は『出雲国造神賀詞』に出てくる神名を採用したものであり、

『出雲国風土記』には「伊佐奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命（いざなひのまなご くまのにます かむろのみこと）」とある。

『先代旧事本紀』「神代本紀」にも「出雲国熊野に坐す建速素盞嗚尊」とあり、素戔嗚尊とは同一神と考えられていた。

熊野速玉大社　熊野速玉大神　熊野夫須美大神　　摂社の神倉神社　弥生中期の銅鐸破片が発見

熊野那智大社（ 熊野夫須美大神 ） 第一殿 瀧宮 大己貴命（飛瀧権現）主祭神

玉置神社　国之常立神 伊弉諾尊 伊弉冊尊 天照大神 神日本磐余彦命　　古くより熊野から吉野に至る熊野・大峰修験の行場の一つ

玉置山山頂近くの玉石を神体とする末社玉石社を玉置の称の由来とし、地主神または奥の院と位置づけ、山容神奈備崇拝が起源説。 玉置山を「熊野三山の奥の院」は江戸中期に初見

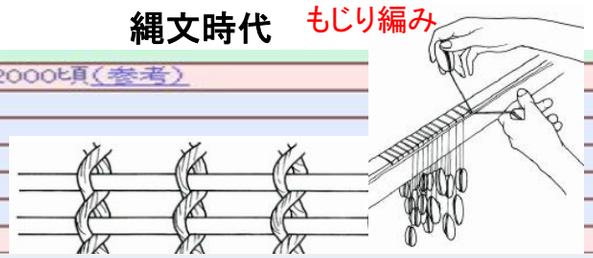
文化継承と重層　　編む文化 と 織る文化

和合思想

布の製法には、主に「編む」と「織る」がある。 その二つの製法は、縄文と弥生の暮らしに関係する。
「編む文化」と「織る文化」　編む文化を受け継いだ「出雲」と、織る文化の「神武」と仮説し、検討したい。
重要なことは、今日も、二つの製法、文化が、和合・共存していることである。

中国	夏（伝説上の国）	殷（商）	周（西周）	春秋	戦国	秦	前漢	新	後漢	三国時代（魏・呉・蜀）	西晋	東晋 / 五胡十六国	南北朝	隋	唐	五代十国	北宋	金 / 南宋
	2070頃	1600頃	1046頃	770	403	221	202	8	25	220	265	304	439	581	618	907	960	1127
日本	縄文時代				弥生時代					古墳時代				飛鳥	奈良		平安時代	
	12000頃（参考）				5世紀頃（参考）					3世紀頃				6世紀末	710	794		
朝鮮										弁韓			任那		新羅			高
										辰韓			新羅					
										馬韓			百済					
							箕氏朝鮮	楽浪郡・帯方郡					高句麗					
							夫余	高句麗										
								前1世紀頃					4世紀半ば		676		918	

隋・唐の絹織物などの染織品　技術輸入



編む文化

編布（あんぎん）

縄文時代草創期前期
鳥浜貝塚 （福井県）編物や縄の断片が出土
縄文時代前期 中期
三内丸山遺跡（青森県）
編籠（通称「縄文ポシェット」）が出土

縄文時代の布　もじり編み
縄文土器早期
土器底部に残された網代底から実証
敷物の模様　　手作業で作成

もじり編みとは、両端におもりをつけた糸を多数横木に吊り下げ、これに直交する横材をおもりのついた糸でからげとめていく方法である。蓆（むしろ）や簾（すだれ）などと同様、横材に柔軟な糸をもちい、編布をつくる。

九州地方の晩期遺跡出土土器
蓆目（むしろめ）や布目（ぬのめ）、網目（あみめ）といった編み物や織り物の圧痕が残されている、これを組織痕土器と呼ぶ。 土器作成は型づくりによって形づくられ、型から粘土を取りはずしやすくする目的で布などをあて、これが組織痕として土器表面に残る

不織布（ふしょくふ）

樹皮の内皮を叩いて作っていた。中国南部原産の梶の木が、その不織布の原料として一般的で、越人女性が日本列島に持ち込んだ。
ハワイに達したオーストロネシア語族は、最近まで梶の樹皮から作った不織布で、衣服を作っていた

織る文化

縄文晩期
宮城県山王遺跡　絡み編みによってつくられた布
北海道朱円遺跡出土の布（後期）についても同じ構造
細密な布
縄文時代の主要食物 トチの実のアク抜き工程「水さらし」に利用
食物加工技術、さらには食料生活史へと研究展開
道具　魚網用あるいは編み物用　共通の道具としての錘具（すいぐ）
編み物用としての石錘（せきすい）は、糸巻き具としての機能 もある

織布（しょくふ）

織機（しょっき）と織布
縄文時代の織布そのものが出土した例はない
弥生時代初頭が通説、織布の初現についてはなお問題が残る
平織　織布の中でもっとも基本的織り方　経糸と緯糸が一本づつ上下にあらわれ交叉する

弥生時代の織機
縄文時代晩期～弥生早期　　福岡県雀居遺跡　国内最古級の織機
弥生時代中期～後期全盛　奈良県 唐古遺跡、 静岡県登呂遺跡・大分県安国寺遺跡など

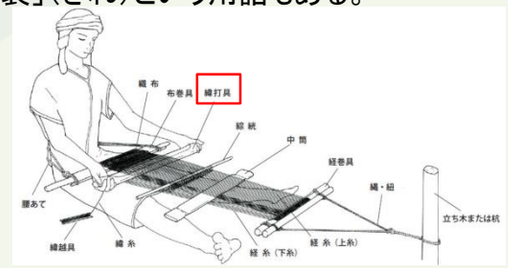
日本、アジアでみられる織機は原始機（げんしばた）・地機（じばた）・高機（たかはた）に分類
この中でももっとも古くから使われていた原始機が、弥生時代の織機と考えられている
発展形態の地機・高機は、渡来系の技術として渡来したが時期不明。
古墳時代以降の遺跡からは、有機台機（地機・高機）の部品に相当する木製品が出土

織布またはその痕跡である資料
　弥生時代前期、有田遺跡（福岡県）出土の銅戈（どうか）付着の平絹片（へいけんへん）が日本最古の絹遺物。 神奈川平塚 王子ノ台遺跡からは、弥生時代中期須和田式の土器底部に、布の圧痕。すべて平織
中には1cm四方の中に経糸30 本以上、緯糸15本以上と織りの密度が非常に高いものもある
東日本では、須和田式をはじめとする弥生時代中期に多くみられ、北関東以北では弥生時代後期にまで認められる。
　弥生時代後期の方形周溝墓から出土した鉄剣に付着した平織の布。
鉄剣をつつんでいた布が残片となって付着した状態で出土、関東地方の方形周溝墓出土の鉄剣にはこのような類例。
経糸・緯糸とも0.6mm前後でいずれも右撚りの糸を使用。
　平安時代の住居址から出土した平瓦の凹面にみられる平織布の痕跡。カマドの構築材として集落内に持ち込まれたものである。
平瓦には製作時に型からはずしやすいように布をあて、その布の痕跡が圧痕となり残存。経糸・緯糸とも右撚りの糸を使った平織布圧痕。

応神天皇20年（289年）阿知使主（あちのおみ）父子が来朝、大和檜隈で綾を織った。
同37年（306年）呉の職工の呉織（くれはとり）、穴織（あなはとり）が移住。
雄略天皇7年（462年）百済の織工・定女那錦（じょうあんなこむ）来朝、韓様錦を織る

奈良・中宮寺 「天寿国繍帳」
京都・勧修寺「刺繍釈迦説法図」（奈良国博蔵）唐渡来品
奈良・當麻寺の「綴織当麻曼荼羅図」（絹糸の綴織）も同様

織物を総称して「布帛」（ふはく）、
「布」は植物性の「ぬの」（特に麻布）
「帛」は絹織物を指す。
染織品を指して「裂」（きれ）という用語もある。



緯越具（よここしぐ）で緯糸を通した後、緯糸を手前に打ち込む道具が緯打具。
杼、梭（ひ）とも書く。
天照大御神、坐忌服屋而、令織神御衣之時、穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮入時、天服織女見驚而、於梭衝陰上而死。

文化継承と重層　　編む文化 と 織る文化

和合思想

編布には、縄文海人族 と 関係する 国津神、出雲文化 が伝わる。　**織布**には、そのあとの神武王系、天津神 の文化が伝わる。
考古資料、習俗、神話、神社などから、両者の違いと、それぞれの継承を纏めた。 布の二つの形態には、縄文から弥生、弥生から古墳時代への 異なる文化と、その習合がまつわる。
そして、「編む」は、ペルシャや天竺の木綿や編みにさかのぼり、「織る」はエジプト、高級材料の絹、養蚕は中国起源とされる。

編む文化

（あんぎん）編布　海人族 から 出雲　国津神

① 縄文土器の底に敷かれていた布の型　網代（あじろ）

その素材は何であるのかについては今のところ完全にはわかっていない。植物繊維の痕跡が微細な平行の筋となって残されていることが多いことから、竹類（マダケ、ヒメザサなどイネ科タケ属・ササ属）を薄く加工して、これを使用したとも考えられているが、ある程度の強度を保ちながらも比較的柔軟な植物質の素材であれば、竹類に限定しなくともつくることができる。
　現在の編み物工芸や伝統工芸をみる限りでは、製品を組み立てる際には手のみを使い、編み組む道具は使用していない。縄文時代の網代つくりも「編み組む」技術、すなわち手のみでつくられていたと考えるのが一般的である。網代つくりに「編み組む」の語をもちいた。

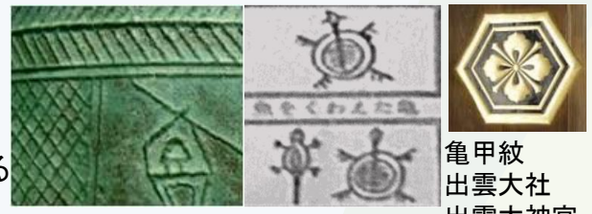
② 竹を編み込んでつくる籠舟

「日本書紀」の一書、山幸(火遠理命)が、兄の海幸(火照命)の釣針を無くして困っていると、塩土老翁神が現れて、袋から櫛を出し地面に投げると竹林となって、その竹で籠舟を作った。別の一書では、浜辺で罠にかかった川雁を解き放ってやると、塩土老翁神が現れて、籠舟で海神宮へ送ってくれた。
　古代の海人は、竹で堅く籠を編んで、天然のタールなどを塗料として塗り、「舟」として用いたそうです。この「カタマ」とか「カタ」とかいうのは、台湾から南の島々で、「舟」とか「筏」とか「籠」をさし、同様の舟が、台湾・ベトナムを始め、ビルマ・南洋群島・中国奥地の河川でも見られる(上野喜一郎著「船の歴史」より)。つまり、筏(いかだ) の「カタ」です。
　「籠」という字は、何故「竹」冠に「龍」か？ 「籠」という字は「こもる」とも読みます。「海人籠り」という海人の祭がある。「籠もる」という字からして、「御籠り」 神社に籠って神に祈願することの元になった儀式と考えられる。「海人」と「竹籠」は、大変関係深い。 海部氏が奉斎する籠神社の社伝に、社名の由来ともなったと、天火明命が常世に行き来した「籠」。 籠神社は元浦島でもありますから、龍宮へ行き来した浦島の「亀」もこれだったのではないか。 篭目（かごめ）の中心部が亀甲というのにも繋がる。

弥生時代、出雲文化への継承

布 と竹の編み　海人と 亀

楮（こうぞ）科（しな）藤、葛、からむし(苧麻)で編む藤布 は 京都丹後半島で継承されている



亀甲紋
出雲大社
出雲大神宮

③「銅鐸」の編み模様

初期（弥生前期）のものは、網状の模様が多い。 また、亀の絵が描かれているものもある。

④「櫛描（くしびょう）紋＋縄紋 土器」 出土分布

　弥生式土器の紋様には、条痕紋、櫛描紋、縄紋、条痕紋十縄紋、櫛描紋＋縄紋、櫛痕紋＋櫛描紋＋縄紋がある。 その中で、櫛描紋＋縄紋土器は、弥生前期から中期にかけ地域を拡大し、出雲の「布田遺跡」や、大和の「唐古・鍵遺跡」など、現在の中国地方から近畿地方にわたり出土される。　一方、九州や中部、関東では、その他の紋様土器が出土。
この紋様の地域差、時代は、銅鐸出土と一致、山陰から近畿、出雲と大和との交流を示す。

出雲大社の檜皮は竹釘でとめている

編む・綯う

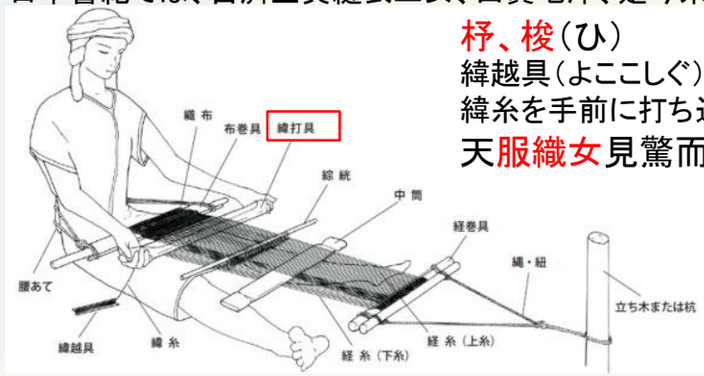
参考伝承
出雲人は高貴な人が他界すると、藤と竹で編んだ籠に遺体を収め高い山の常緑樹（檜・杉など）に吊るした。 風葬
三年過ぎるとこれを降ろし洗骨し山に埋める。そしてその木がご神木となり、山が神（祖霊）の座す磐座（いわくら）となった

織る文化

（しょくふ）織布　神武王系　天津神

① スサノオの乱行による、機織りの悲劇

古事記 「 天照大神 と須佐之男命 」
　天照大御神、坐忌服屋而、令織神御衣之時、穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮入時、天服織女見驚而、於梭衝陰上而死。訓陰上云富登。
同　応神天皇期　「 織縫衣褌及襪沓 」
　日本書紀では、百濟王貢縫衣工女、曰眞毛津、是今來目衣縫之始祖也。



杼、梭（ひ）
緯越具（よここしぐ）で緯糸を通した後、
緯糸を手前に打ち込む道具が緯打具（よこうちぐ）のこと
天服織女見驚而、於梭衝陰上而死。

② 「纒向遺跡出土 巾着状布製品 の総合調査」より抜粋

法量
高さ3.4cm、
幅3cm、
厚さ2.4cm、
重量13.0 g

- 巾着状布製品は布の部分が平織りの絹、紐の部分は浅く撚りをかけた植物性繊維（麻類）を束ねて作られている
- 絹の素材は天蚕の繭から取り出した絹糸を用いて作られた可能性
- 巾着状布製品全体が漆に浸け込まれており、漆が付着していること。

　などから
「内部に意味のあるものを包み、漆によって封じ込めたもの」と見た方が良いと考える。

③ 伊勢神宮　内宮　所管社の両機殿

松阪市　「神麻続機殿神社（かんおみはたどのじんじゃ）＝上機殿」
　　「神服織機殿神社（かんはとりばたどのじんじゃ）＝下機殿」
両機殿は神御衣祭（かんみそさい）に供える和妙（にぎたえ、絹布）と荒妙（あらたえ、麻布）の御衣（おんぞ）を調進する御料地（ごりょうち）である
　伊勢神宮で5月と10月に行われる神御衣祭に合わせ、上機殿で麻布の荒妙（あらたえ）が、下機殿で絹布の和妙（にぎたえ）が織られる。
「神様の衣替えともいわれる神御衣祭には深い意味がある　衣と食は生活の原点である。
　田植えと収穫の時期に合わせて神様の衣を新調する。」（皇学館大研開推S 岡田教授）

伊勢神宮では、注連縄 は用いられない。

参考 「倭文織」（しづおり）
下池山古墳（天理）石室の大型内行花文鏡の周囲付着の縞模様に染められた織物がわが国特有の織物とされる
倭文（しとり）神社　織物の神、所在地は、三角縁神獣鏡の出土地とほぼ重なる。貫之集より「しづはたに乱れてぞ思ふ悲しさを経緯（たてぬき）にして織れる君が恋」

記紀と史実　考古 と 記紀集約 から仮説　倭での 二つの 「 和合 」

和合思想

神武天皇、崇神天皇、固有名詞はともかく、この時代には以下の通り、考古学的に二種の新しい動きが認められる。 考古的内容、記紀、その他文献を並列し、時代別で横に同期させた。
先入していた大和の氏族や信仰と習合し、和合していくことに注目したい。なぜなら戦乱を示す人骨出土は多くない。 以下掲載の各古墳の年代順は詳細には特定されていないが、概略、副葬鏡種の増加がその証と解釈できる。『 国譲り 』に 語られる、出雲 と 神武・崇神 の 習合 である。

考古的資料　　記紀

縄文晩期
弥生前期
前400年頃

出雲　　**大和**

出雲 から 丹波、淡海、大和へ弥生中期 （紀元前200～紀元後50年） 全盛
（後期にかけ、新勢力の流入を受けて、各地方勢力に分断）

中期

加茂岩倉遺跡　　神庭荒神谷遺跡

銅鐸 畿内との流通　　出雲型銅剣 製作

唐古・鍵 遺跡　弥生時代通期
中期～後期全盛全国から ヒスイ、土器など集積
銅鐸の主要製造地

中期後半
紀元前後

銅鐸
大量埋納

主 に 銅剣
銅矛・銅鐸
大量埋納

丹波畿内勢力
吉備勢力

国譲 神話

後期
50年

九州勢力　**神武天皇**
弥生中期までは 北九州を主とした　鏡威信
内行花文鏡
後期には仿製鏡分布 が中国、近畿以東 に及ぶ

出雲・山陰 勢力維持

大和盆地 西方
鴨族との習合

大和盆地 東方

弥生
終末
200年～
250年頃

弥生後期　平原遺跡
大型内行花文鏡
内行・方格規矩鏡

四隅突出墓
西谷古墳群

古墳時代前期衰退
248年頃
「卑弥呼」没

崇神天皇

古墳時代 初頭
内行花文鏡 と 画紋帯神獣鏡
ホケノ山　大和天神山古墳

画紋帯神獣鏡は、大阪湾周辺地域に、拡大集中

黒塚古墳　画紋・三神
桜井茶臼山　花紋・画紋・方格・三神
椿井大塚山　花紋・画紋・方格・三神

纒向 遺跡
180～350年

200年代前半
大型掘立柱建物
突線鈕式銅鐸 破片

画紋帯神獣鏡

3C中～後半
ホケノ山古墳
箸墓古墳

古墳時代
前期

前方後円墳
鉄器

(古墳時代前期)
神原・大成・造山
三角縁神獣鏡

垂仁天皇、景行天皇
纒向之日代宮 時代

300年頃

三角縁神獣鏡
北九州
石塚山　舶載
3C中～4C初
原口古墳（初頭）
赤塚古墳3C末
南九州
西都原3C中

出雲　4C中
神原神社古墳
景初三年銘 三神

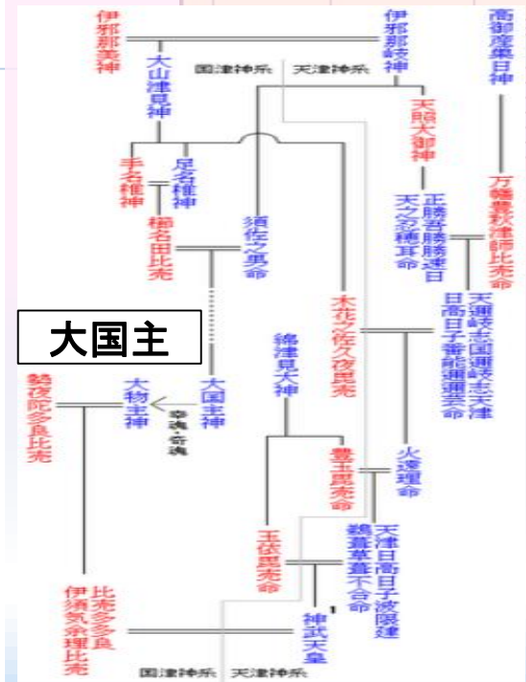
石塚山、赤塚、原口
椿井大塚山は
同笵鏡とされる

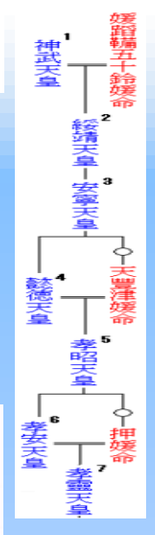
350年以降　三角縁神獣鏡　急減
柳本古墳群も衰亡
崇神天皇御陵とされる古墳群一帯

400年代

＊ ホケノ山の内行花文鏡は長宣子孫の銘　現大神神社が保存

弥生末期～古墳時代前期　　中国　三国～五胡十六国時代





その他 文献など

前150年頃　稲作文化
九州より畿内に伝来
前100年頃　銅鐸の鋳造開始

皇統との姻戚・血縁
大国主・・・日本書紀
事代主　鴨氏
・・・日本書紀の一書や先代旧事本紀

100年頃　大和を中心に小国家出現

100年後半 「倭国乱る」
邪馬台国卑弥呼の共立
・・・出典「魏志倭人伝」

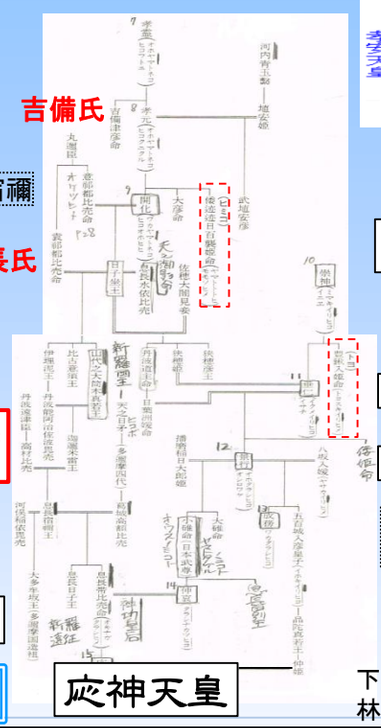
250年前後　内乱と収束
「国中不服」「壱与～國中遂定」
・・・出典「魏志倭人伝」

出雲系・神武系
氏族和合

神武天皇から
孝元天皇まで

神話時代

吉備氏
武内宿禰
息長氏
丹波氏
葛城氏



皇統との姻戚・血縁
息長氏・吉備氏・丹波氏・葛城氏

350年前後　蝦夷・熊襲を平定
統一と県の制定
古墳文化の伝播　丹波　吉備　越　東海

391年　新羅を征伐
・・・　出典「広開土王碑」
400年代　応神天皇 即位
（南山代葛城・息長王系）

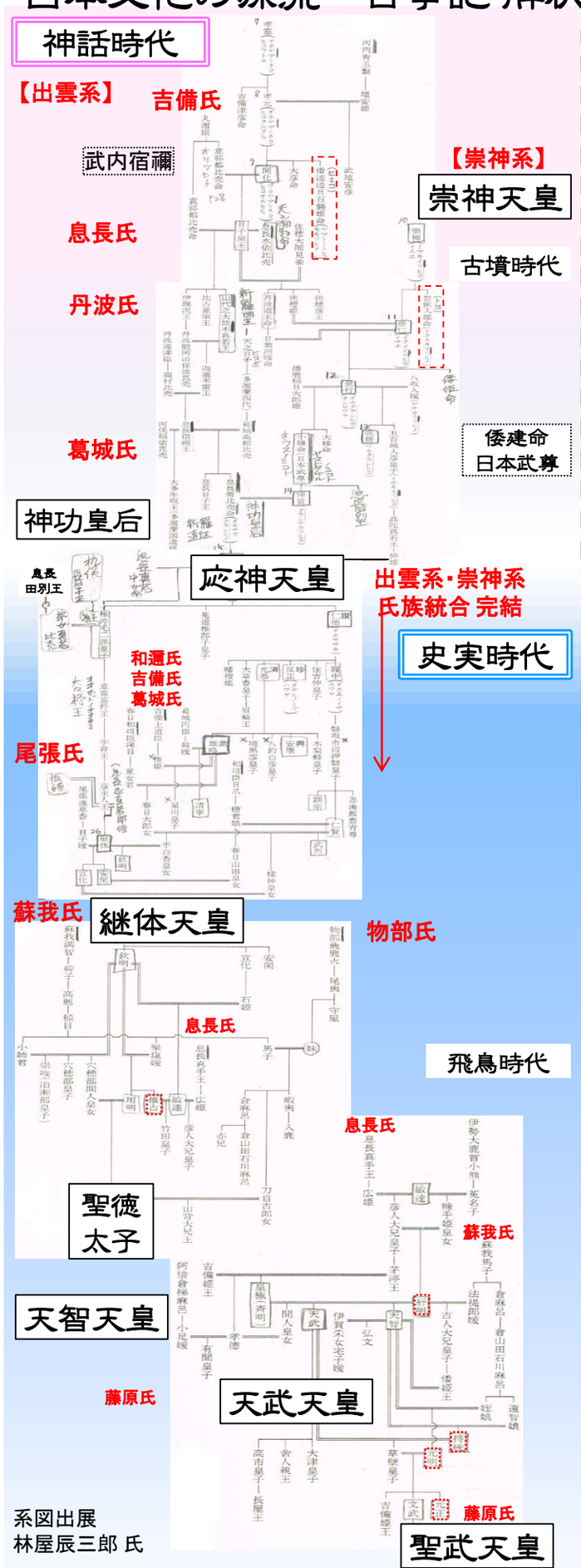
出雲神武系・崇神系
氏族和合

史実時代

下段 系図出展
林屋辰三郎 氏

日本文化の源流　古事記 解釈　神話分別　神話 が語る 「和合」　母系による氏族の 「和合」 の史実

和合思想



系図出展
林屋辰三郎 氏

史実（文献などより）

前150年頃　稲作文化　九州より畿内に伝来
前100年頃　銅鐸の鋳造開始
　「楽浪海中に倭人有り、分かれて百余国をなす
　　・・・出典「漢書」地理志
100年頃　大和を中心に小国家出現
100年後半　倭国大乱、邪馬台国卑弥呼の共立
　　・・・出典「魏志倭人伝」

250年前後　内乱と収束
　「国中不服」「壱与～國中遂定」
　　・・・出典「魏志倭人伝」

　皇統との血縁　息長氏・吉備氏・丹波氏・葛城氏

350年前後　蝦夷・熊襲を平定　統一と県の制定

　古墳文化の伝播　丹波　吉備　越　東海
391年　新羅と交戦　・・・　出典　高句麗「好太王碑」
　　（広開土王碑）

400年代　応神天皇 即位　（南山代葛城・息長王系）
　　履中天皇　国史（ふみひと）の設置
河内　楯状大型古墳の誕生
　横穴式石室へ　（死の意識　黄泉国の発想）
葛城氏の滅亡、平群氏の衰退・・・皇統系
大伴氏、（新興）物部氏・・・軍事部民　蘇我氏の台頭
秦氏の渡来と　蘇我氏との関係

507年　継体天皇即位　貢献者　物部氏・大伴氏
　　軍事部民　大伴連、久米直
528年 磐井の乱　物部麁鹿火（あらかひ）が活躍
　蘇我稲目　536年 大臣　娘が欽明天皇妃、用明天皇外戚
　大伴金村　540年 物部尾興 任那割譲糾弾 で失脚
　秦大津父　大蔵掾（おおくらのじょう）で財務担当
　仏教受容の対立

587年　蘇我氏・聖徳太子　物部守屋を討つ
　　中臣本流没落
620年　推古天皇、聖徳太子による歴史書編纂
　「天皇記」「国記」「臣・連・伴造・国造百八十部等の本記」

645年　乙巳の変　中大兄皇子・中臣鎌足　蘇我氏を討つ
663年　白村江の大敗
672年　壬申の乱　大海人皇子　大友皇子を討つ
　　貢献者　大伴馬来田・吹負、三輪氏、鴨蝦夷、尾張氏
　　天武朝は、近江方だった**物部**麻呂も重用、石上氏左大臣に
　　息長氏に真人姓を与える。　中臣金連刑死
673年　天武天皇即位
（天皇を称号、日本を国号　日本書紀、古事記の編纂勅命）
691年　18氏祖を申告させた。大三輪、雀部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛野、大伴、紀、平群、羽田、阿倍、佐伯、采女、穂積、阿曇
701年　文武天皇妃の不比等の娘が皇子出産、のち聖武天皇

712年　元明天皇期　太安万侶　「古事記」撰上
713年　諸国に「風土記」編纂を命ずる
720年　元正天皇期　「日本書紀」撰上　　藤原不比等没

神話分別　　【 以下、下線部分 は、藤原後補の可能性がある 】

高天原と葦原中国、黄泉の国　・・・　仏教　極楽浄土・現世・地獄の思想 を意識対抗
天地開闢　国生み　　・・・　対馬・隠岐・佐渡・淡路　渡来漂着地の地
　　神生み　　・・・　土着の自然（山・磐座）信仰 と 氏族の祖先設定
天照大御神　・・・　先住の銅鐸に対する銅鏡威信勢力　光と太陽信仰の表現

国造り　・・・　スサノオ出雲・嫁取り　日本海沿岸での開拓
　　大国主　葦原中国　　出雲から畿内など中央に進出

国譲り　・・・　大国主時代からの先住（葛城・吉備・息長・尾張など）による
　　銅鏡祭祀勢力との譲歩的共存　・・・特に大和地域
　天照大御神命で、高天原より、武御雷（タケミカズチ）、日本書記では経津主神（フツヌシ）が同行、主導。 事代主神（コトシロヌシ）は了解、建御名方（タケミナカタ）は諏訪に追放された　・・・　フツヌシは継体期まで有力な物部氏祭神、その神と重ねる様に、藤原氏の武神を構想した。中臣傍流（藤原）氏出身地？とされる常総（香取・鹿島）は、ヤマト王権の東国進出の重要拠点。

天孫降臨　・・・　女帝「天照大御神」と孫「邇邇芸命」 女帝「元明・元正天皇」に似す
　天照大御神から三種の神器（八尺勾璁、鏡、及**草那藝剱**）を授かり、天忍日命大伴連、天津久米命久米直、各祖神が先導
　　・・・　大和王朝創世からの軍事部民、継体期に勢力
天児屋命（中臣氏始祖）、布刀玉命（忌部氏　中臣補佐）、天宇受売命（猿目氏祭祀芸能）、伊斯許理度売命（鏡作氏　銅鏡造り）、玉祖命（玉作氏）の五伴緒（いつとものお）が従う。・・・　中臣（藤原）氏など祭紀支配者を強調
「神武東征」と、登場氏族が一致、かつ物語も重複的。 後補の可能性を強める。

神武東征　・・・　大伴連祖　道臣命（ミチノオミ）　久米直祖　大久米命（オオクメ）が大和宇陀でエウカシを討つ　・・・（同上、軍事部民　編纂時、大伴氏は壬申の乱の貢献者だが皇統関係、祭祀に関係せず、史実・神話の活躍と比較し、祀る神社は少ない）
先入していた邇芸速日命（ニギハヤヒ 物部氏祖）が参上し、神武天皇に仕える。
・・　（大国主の娘を娶った）物部氏が天孫へ服従。 しかし**神武も大物主姫を娶る**

日本武尊、倭武尊　・・・　古墳時代前期　北陸、東海、西道、丹波四地区への大和勢力・古墳文化の拡大　四道将軍の活躍とも符号。「倭比賣命、賜**草那藝剱**」で助かるが、尾張美夜受比賣に預ける。伊吹で果て最後に白鳥となり、伊勢から河内の国志幾に飛び陵を造る。・・・　応神天皇までの統一抗争と、それ以降の河内王朝創始を表現

神功皇后　三韓征伐　・・・　**武内宿禰**の活躍
　北陸・東国を視察して、蝦夷征討を進言。成務天皇3年に大臣となる。
　神功皇后の朝鮮出兵を決定づけ、忍熊皇子らの反乱鎮圧にも功。
　武内宿禰は、命300年前後となる記述であり、祖とされる紀・巨勢・平群・葛城・蘇我氏など皇統関係、中央諸豪族の権威象徴とも考えられる。

記紀神話 の 構想

記紀の内容を分別すると、藤原氏有利に関係の無い「物部氏祖の大国主の姫娶り」、「神武天皇の大物主の姫娶り」が語られている。
国譲り、出雲と神武の和合この記事は史実か？　次に、古代神社・遺跡と総合することで、当時の気運、信仰、氏族の歴史が出現する。

古事記や祭神・伝承などから 信仰の対象、氏族で「名神大社」を体系した。「**名神大社**」は、712年古事記、720年日本書紀撰上の後、730年渤海の貢物奉納が初見。 律令下、神々の中で、特に古来より霊験が著しいとされる神を祀る社。 体系してみると、天津神 神武系に比し、**国津神、氏神が圧倒している**ことが判る。（征服者の代表である神武天皇を祀る主神社「橿原神宮」は明治の創建）。 なぜでしょうか？ **そのことは 物語より真実を伝えている** と考えます。 息長帯姫命（神功皇后）と応神天皇に代表される様に、国譲りした側の「出雲系」息長・吉備・丹波・葛城氏たちの姫が皇統に嫁ぎ、その**母系が、代を重ねて復権、和合**した結果です。 神話では、「天照御大神」母系が主役でしたが、史実は逆の形、つまり「出雲系の姫たちの皇統への嫁ぎ」で統合された。

そして、藤原氏は、その和合の歴史に学び、母系政策を進めた。 そのために必要な家柄として、 自らの祖神を創造、古来からの神と関連し記紀に登場させて、祀ったのです。 当時の祖神、家系への価値観の高さが伺われます。

神話～史実

高天原と葦原中国
黄泉の国
天地開闢　国生み
神生み
天照大御神
スサノオ
大国主　葦原中国

実際の創建は
古墳 ～ 飛鳥時代

（国譲り）
（天孫降臨）

神武東征
九州勢力 大和へ
銅鐸 から 銅鏡へ

日本武尊
有力豪族 連携

神功皇后
応神天皇

継体天皇
欽明天皇

天武天皇
元明天皇
古事記 撰上
元正天皇
日本書記 撰上
聖武天皇
称徳天皇

【自然神】

宗像大社　宗像三女神　海神
熊野大社（出雲）　熊野大神櫛御気野命
熊野三山　山神
本宮大社　家都御子神　素盞嗚尊
志賀海神社　海神
住吉大社　海神
大山祇神社　山神
三嶋大社　山神
富士山本宮浅間大社　山神
日吉大社　山神
松尾大社　山神　海神
貴船神社　水神
上賀茂神社　古来山神
賀茂氏

【出雲系】

出雲大社　大国主
出雲大神宮　（丹波氏）
大国主　三穂津姫尊
＊大神神社 大物主　大輪氏
＊高鴨神社　賀茂氏
高天彦神社　葛城氏
高皇産霊尊
市杵嶋姫命、菅原道真
＊加夜奈流美命神社
加夜奈留美命
天長六年（829）飛鳥神奈備にも
飛鳥坐神社　賀夜奈流美乃御魂
＊鴨事代主神社（河俣神社）
鴨八重事代主神
下鴨神社　賀茂氏

大和神社
中殿：日本大国魂大神
左殿：八千戈大神（大国主）
右殿：御年大神

籠神社　彦火明命　海部氏
天火明命、天照御魂神、
天照国照彦火明命、饒速日命

吉備津神社
大吉備津彦命
吉備氏

石上神宮　物部氏
主祭神　布都御魂大神
神体　布都御魂剣

物部神社　物部氏
石見　宇摩志麻遅命
西～関東まで　饒速日命も

気多大社　大己貴命

山津照神社　国常立尊
息長氏

御上神社　天之御影命
息長氏

諏訪大社　武御名方神
（尾張氏）　御柱
旧宝殿 大国主命社

熱田神宮　熱田大神　尾張氏
神体 草薙神剣

【物部系】

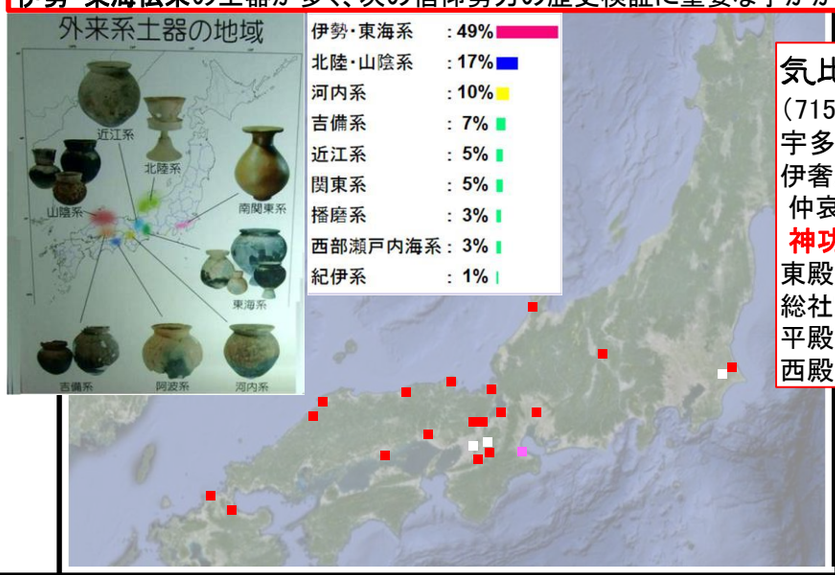
香取神宮　**経津主大神**　物部氏

宇部神社　建内宿禰　蘇我氏 他
紀・巨勢・平群・葛城・蘇我氏など中央諸豪族の祖

参考　＊マーク
出雲国造の神賀詞(かんほぎごと)　皇室の「近き守神」とすることを述べる
「 大穴持の和魂を大物主櫛甕玉（くしみかたま）、と称し**大御和（三輪）**に
阿遅須伎高孫根、を　**葛木の鴨の神**に
事代主を、**うなて**に
賀夜奈流美（かやなるみ）命の御魂を**飛鳥の神なび**に坐せて、、、」

主たる 出雲系 神社（赤）
白 は 藤原氏系神社

出雲系 神社分布　の 考古学 照合　奈良 纒向遺跡から出土した土器分布
氏族、信仰、勢力範囲が完全一致　外来土器 纒向編年 280年から290年
伊勢・東海伝来の土器が多く、次の信仰勢力の歴史検証に重要な手がかり



【神武系】

橿原神宮　神武天皇
1890年（明治23年）
狭野神社　神武天皇

建部大社　日本武尊
天平勝宝7年（755年）　大己貴命
大神神社から勧請

大鳳大社　日本武尊　大鳥連祖神

気比神宮　大宝2年(702)勅命で社殿修営
（715年、神宮寺建立）　天平3年（731年）までには従三位（『新抄格勅符抄』）
宇多天皇　寛平5年(893)　正一位勲一等
伊奢沙別命（いざさわけのみこと）－主祭神。　気比大神とも呼ばれる応神天皇の元名
仲哀天皇　－第14代。本名は帯中津彦命（たらしなかつひこのみこと）
神功皇后　－仲哀天皇の妃。　**息長帯姫命**（おきながたらしひめのみこと）
東殿宮　日本武尊
総社宮　応神天皇　－第15代。　誉田別命（ほんだわけのみこと）
平殿宮　玉妃命　－神功皇后の妹・虚空津比売命を指す
西殿宮　武内宿禰命

水尾神社　三尾氏

宇佐神宮
八幡大神 比売大神　神功皇后

神話による起源設定

垂仁天皇期
伊勢神宮　内宮
天照大御神

鏡祭祀 起源

雄略天皇期
伊勢神宮　外宮
豊受大御神

神話に沿う
関連付け

（中臣・藤原氏）

鹿島神宮　武甕槌大神
藤原氏

校岡神社　天児屋根命
中臣氏

天照御大神
信仰

春日大社　春日神
藤原氏
（武甕槌命、経津主命、
天児屋根命、比売神）
神護景雲2年（768年）創建

天照大御神は、「神武東征」に表現される「鏡」威信文化の人々からもたらされた。 やがて、「銅鐸」にかわる祭祀の象徴となり、生活・豊穣にとって光、太陽が貴いという価値感を導入、新しい神とした。

縄文から弥生にかけて神山、水を崇める先住の人々とは、「国譲り」として伝えられる交渉、征服被征服の過程を経て、やがて大和の地を中心に、風習、文化の混流が進んだ。
「神武の出雲系大物主の姫娶り」に語られる様に、共に暮らす生活が日常、政治的側面を持ちつつ、二系統の歴史は先住者の母系による皇統統合がなされる。
「息長帯姫命（神功皇后）と応神天皇」「雄略期の諸豪族姫の嫁入り」と浸透し、出雲系・神武系氏族統合が史実となる。　しかし、伊勢神宮の「天照大御神」「豊受大御神」 は、女神への母系融合である。 このことは何を表現しているのか？

大和の新体制は、「大国主」と「天照大御神」を共に祀った。 そのことはまさに「和合」への取組であったが、「混乱と破綻」を招いた。 なぜか？　「大国主」と「天照大御神」の関係は、上記の「皇統と母系」とは立場が逆、もしくはあまりにも天照大御神が強力だからである。
相容れない神々の関係である。
その打開策は、神武系、邇芸速日命（ニギハヤヒ）、あるいは（**出雲系に婿入りした**）彦火明命、天照國照彦天火明櫛玉邇速日命（尊）を祖とする海部氏が祀った「豊受大御神」に託された。
「豊受大御神」は、出雲文化圏である山陰、眞名井の地の「水」に発祥した五穀農耕の祖神であり、宇迦之御魂神（うかのみたま）と同神である。 天照大御神と豊受大御神が出逢った丹波（現 丹後）の地は、出雲と大和の中間地、「和合」の役割も果たした。
この出来事は、新しい価値との「和合」と、そのための打開策の「創造」である。
「創造」された「豊受大御神」は、「宇迦之御魂神」の別名を持つ。 その確かな価値観は、のちに渡来した秦氏が「伏見稲荷大社」の神として認め、今日、我が国最多の分祀社を全国に持つ。

「和合」と「創造」は、その後の日本文化の特質として、渡来の仏教、工芸、絵画、技術、産業などの分野で継承されていく。
また、山からの「水」、そして「太陽」を崇めた「自然と豊穣への信仰」、当初は稲作や暮らしのために求められた「現世利益」の思想は、こののち仏教でも「草木国土悉皆成仏」「観音信仰」へと受け継がれる。

さて、太陽信仰の証は、最終地 伊勢までの過程、祭祀の地に残る。
確実な証は、遺跡、神社、古墳として、これもまた今日、この日本で継承されている。
祭祀の地は、以下の通り
天照大神の笠縫邑（現「檜原神社」）
倭大国魂神の遷座地（ 箸墓古墳、檜原神社付近　のちに現「大和神社」に祀る）、
そして、神話時代の末となる誉田御廟山古墳（応神天皇陵）
その祭祀の場所たちは、神山「三輪山」に昇る太陽発祥の地、和合の地として
伊勢と、日の出方向に一直線に繋がる。

誉田御廟山古墳（応神天皇陵）は神話の末、一般には古墳時代の中期でもある。
「出雲系の姫たちの皇統への嫁ぎ」は、「息長帯姫命（神功皇后）」の仲哀天皇への和合嫁ぎで一旦完結する。 そして誕生した「応神天皇」、その陵とされる誉田御廟山古墳は、伊勢と、和合の過程である祭祀場所とを、三輪山に太陽が昇る方向で一直線に結び、「神話」と「和合」を完結させた。

「大国主」と「天照大御神」　「混乱と破綻」の事実

① 『日本書紀』によれば、元々、倭（日本）大国魂神は天照大神とともに大殿に祀られていた。
しかし、世の中が乱れ謀反を起こすなどするのは、両神の勢いだと畏れられた。
「 天照大神・倭大国魂、二の神を天皇の大殿の内に並祭る。然うして其の神の勢いを畏りて、
共に住みたまふに安からず。故、天照大神を以ては、豊鍬入姫命に託けまつりて、倭の笠縫邑に祭る。」
倭（日本）大国魂神（やまとのおおくにたまのかみ）は、大己貴神の荒魂とされる。

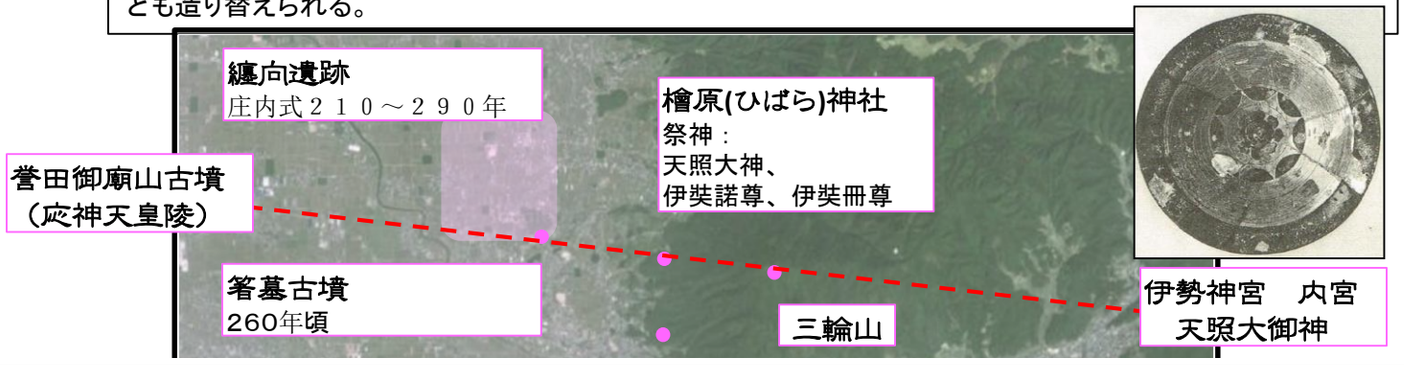
② 崇神天皇6年（紀元前92年）勅命で、二神は別れて、それぞれの場所を探す。
天照大神は、皇女 豊鋤入姫命（トヨスキイリヒメ）に託され、倭の笠縫邑に遷座。斎王（斎宮）の始まりとされる。 そののち、丹波で「豊受大御神」と出逢い、伊勢に落ち着く。　笠縫邑の主説比定地は、元伊勢とされている「檜原神社」。「台与」とする説があるこの豊鋤入姫命を祀った豊鍬入姫宮が、大神神社末社として、檜原神社境内に建っている。 三輪山の中にある磐座をご神体とし、檜原神社には本殿、拝殿もない。

一方、倭大国魂神は、崇神天皇と尾張大海媛の間に生まれた皇女 渟名城入媛命（ぬなきいりびめのみこと）が祀るが、髪が抜け落ち、体も痩せて、祭祀が出来なくなった。
神武系の父系血統には、馴染まなかったことを意味している。
崇神天皇7年、倭迹迹日百襲媛命が、「大物主神が現れ、大田田根子命を大物主神を祀る祭主とし、市磯長尾市を、倭大国魂神を祭る主とせば、必ず天下太平ぎなむ」と、神託を受けた。
大倭直の祖・市磯長尾市（いちしのながおち）を祭主として、神地が定められ鎮座・創建され、やがて疫病が収まり、国内は鎮まった。 この神地は、箸墓古墳、檜原神社付近との説がある。
その後、倭（日本）大国魂神は遷座、今の「大和神社」に祀られる。
またこの際、探された大田田根子命は、陶邑の大田の森に住んでいた。彼の祖霊を祀る目的で陶荒田神社（すえあらたじんじゃ）が創建された。 大田田根子命の子孫が大三輪氏である。
大三輪氏（大神氏）は、大物主神の後裔として同神の祭祀をつかさどる有力氏族である。
天武天皇即位の前提、壬申の乱で、この末裔 三輪高市麻呂は功労者となる。

「斎王」と「神宮式年遷宮」

斎宮　崇神天皇が皇女豊鍬入姫命に命じて宮中に祭られていた天照大神を大和国の笠縫邑に祭らせた、これが斎王（斎宮）の始まり。垂仁天皇の時代、豊鍬入姫の姪にあたる皇女倭姫命が各地を巡行し伊勢国に辿りつき、そこに天照大神を祭った。用明天皇皇女の酢香手姫皇女（すかてひめのひめみこ）の、推古天皇期退去で途絶えたが、天武天皇が壬申の乱の戦勝祈願の礼として伊勢神宮に自らの皇女大来皇女を捧げたのが初代とし、制度として確立『扶桑略記』。 以後は天皇の代替わり毎に必ず新しい斎王が選ばれ、南北朝時代まで続く制度となった。斎王（さいおう）または斎皇女（いつきのみこ）は、伊勢神宮または賀茂神社に巫女として奉仕した未婚の内親王または女王（親王の娘）。
伊勢神宮の斎王を斎宮、賀茂神社の斎王を斎院とも称し、斎院は平安時代から鎌倉時代まで継続。
室町、江戸、戦後と三度祭が断絶、1956年の葵祭以降、市民から選ばれた未婚女性を斎王代とする。

神宮式年遷宮　天武天皇が定め、690年（持統天皇4年）に第1回が行われた。その後、戦国時代に120年間の中断や幾度かの延期を経て、2013年（平成25年）に正遷宮（神体の渡御）が斎行され、起源後1300年以上となる第62回式年遷宮が完結。
20年ごとに、内宮（皇大神宮）・外宮（豊受大神宮）の二つの正宮の正殿、14の別宮の全ての社殿を造り替えて神座を遷す。このとき、宝殿外幣殿、鳥居、御垣、御饌殿など計65棟の殿舎のほか、装束・神宝、宇治橋なども造り替えられる。



神社の文字「社」(やしろ)には、「神の信仰」の源流を留めている。 我が国の「 地域社会のまとまり、集団 」は、信仰の場所である「社」(やしろ)を中心とする。 そして、その場所で祀る人々や地域から、祭や芸能などの「文化」が誕生した。
山、森、木への信仰は、「柱」を主とした神社の建築構造に継承される。 信仰の場所「社」は、それまでの仮設的な依代から、寺院建築の影響を受けて、常設の建物となる。
その背景には、古代からの皇統を重視する天皇や豪族の威信意識があった。 個人埋葬の古墳から、共同体の「社」へ建造意識が移行した。また、例えば日吉大社・松尾大社・貴船神社・伏見大社のごとく、山や水、穀物の神を祀る「社」から、伊勢神宮や春日大社の様に、祖霊を祀る「社」へと複合しながら主祭神は遷移していった。
その中でも、古代に起源する「社」は、それぞれの信仰の原点が建築様式に表現されている。 例えば、出雲大社は神木の構造を留め、家屋に近い「田の字」の形、背後にある八雲山を神体にした祭祀の宮殿とされる。 元来、高層であった建築の理由である。 伊勢神宮は穀物倉、住吉大社は船団が主説である。 その後、「社」は神仏習合を反映し様式習合へ、寺院など他の建築と影響相乗する。

まず、文字について、以下簡単に一般論を確認し、推論を加える。
元来、「社」(やしろ)は「屋代」という字があてられていた。 本来は、神を祀る場所、敷地を指し「依代としての仮の屋」という意味を表したのであろう。 「遷宮」は、その名残であり、**清浄を保つ 禊ぎ・祓え、魂振の意味もある**と考える。 「社」について、中国最古の部首別漢字字典『説文解字』(せつもんかいじ)に、「地の主なり」とあり、「示と土に従う」としている。

その文字の構造について、同じく『説文解字』で、「社」の偏、「示」は「天、象を垂れて吉凶をあらわす。人に示す所以なり」と述べ、天文現象を通じて人々に示される天の啓示とし、「二」に従い、三つの垂れているものは日・月・星を表すという。 甲骨文の研究からは形状由来から諸説あるが、祭祀の際に犠牲を捧げる祭壇という説、神や祖霊が宿る木や石でできた神主(位牌や神体といった依り代)といった説がある。 そして、「土」は生産力を持った「土地の神」が由来で、その土地に生える代表的な樹木を土地神の型代(かたしろ=御神体の代わりとして身代わりにするもの)としたからであろう。

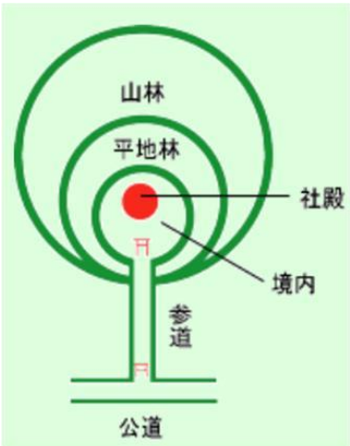
① では、なぜ我が国で、「屋代」から「社」になったのか？
「やしろ」の文字は、形状の「屋代」から、より信仰的意味を持つ「社」となったと考える。 すでに奈良時代の歌人、佐伯赤麻呂は 和歌で「社」の文字を使っている。

② そしてまた、「社」は「やしろ」と読まれるが、「もり」とも読まれる。 これもまた なぜか？
元来、信仰の対象とした、山、森の名残であろう。　生活・稲作に関係する「水」や「雷」に対する神信仰が、山への信仰を生んだ。
上田正昭氏「古代日本のこころとかたち」によると、『 古代やまと言葉の「モリ」は、朝鮮語の"mori(山)"と同源とみなされているが、
古文献にみえる「モリ(母理・文理・茂理)」の本来は自然の樹林を意味し、なんらかの人工が加わった樹林は「ハヤシ(拝志・拝師)」とよんだ。
自然林は山にあって「モリ」をなし、里や山麓などには「生やし」た樹林が形づくられる。』とされる。
つまり、神を祀っていた場所がいわゆる 山の「森」であり、その場所を「社」という文字としたから、「社」も 「もり」と呼ばれたと考える。

③ 平安時代以降、示偏の「社」を「やしろ」、木偏の「杜」を「もり」と使い分けるようになった。 この場合、示偏の「社」(やしろ)は、社殿を示し、木偏の「杜」(もり)は、その地の森、木そのものである。 このため、「杜(もり)」は神社の「鎮守の森」「ご神木」を意味するともされる。
では、なぜ使い分かれるようになったのか？　古墳時代から天武天皇の頃までに徐々に神社・社殿が整備され、元来の樹木・森の信仰から区別された。
「自然信仰から皇祖・氏神信仰に変遷」していく、その宗教政策が 社会的に定着し、文字にも表現されたのが、平安期と考える。

示偏の「社」(やしろ)、木偏の「杜」(もり)と使い分ける以前の「社」(やしろ・もり)は「鎮守の森」であり、「カミとヒトとがまつりを媒介として集いあう 寄合の場」であるといえる。
「社」という文字はもともと耕作神や土地神を意味したが、やがてそれを祭祀する建物、神社を指すようになり、そこが人々の団結のきずなを固める場ともなったので、人間の組織や集団にも「社」の字が用いられるようになる。 つまり「社」は土地の神々を中心とするコミュニティーを意味するようになり、里神楽の「社中」そして「社会」「結社」「会社」など熟語も誕生した。

「社叢学会」ロゴ



(参考)

京都 「社叢学会(しゃそうがっかい)」 (初代理事長　上田正昭先生)
鎮守の森を学際的に研究するNPO法人。社叢とは神社の森、すなわち「神々の森」のことでだが、「神々の森」には鎮守の森をはじめとする社寺林、塚の木立、ウタキ(沖縄の聖域)などが含まれる。 「叢」(そう)は草木のむれだが、「社叢」は土地の神のモリであり聖なるコミュニティーのモリでもあった。
社叢学会は、こうした「神々の森」について関連する様様な研究分野の垣根を取り払って調査研究を進め、地域に密着した新しい学問の創造と社叢の保存・開発をめざして2002年5月26日に設立されたNPO法人である。

万葉集　佐伯赤麻呂(さへきのあかまろ)
「春日野に粟まけりせば鹿(しし)待ちに継ぎて行かましを社(やしろ)し恨めし」
意味: 春日野(かすがの)に、粟(あは)が蒔(ま)いてあったら(あなたに逢えるのでしたら)、鹿を待ち伏せるように、毎日のように逢いにゆくのですけど。
神の社(やしろ)があるので逢えなくてうらめしいことです。 この歌の題詞は、"娘子(をとめ)に贈った歌"と書かれているが、"娘子(をとめ)"が誰かはわかりません。 「神の社(やしろ)」は、地域社会か？　神の対する罪の意識か？　ご夫人か？　だろう。

天智天皇崩御、672年の壬申の乱に勝利した天武天皇は、神武天皇「第一次鏡威信勢力」の象徴、「内行花文鏡」伝来当時の原初太陽信仰を**復活**させ、その鏡を神体として、天照大神を祀る「伊勢神宮」を創建した。 そのため、日本書紀にその鏡を奉祭した勢力を神日本磐余彦天皇 神武天皇として記録した。「天照大神」の名としての信仰が、崇神以前か、記紀編纂当時か、は別として「内行花文鏡」は、弥生時代中期から後期に北九州より伝来している。 そのあと「前方後円墳」とともに「画紋帯・三角縁神獣鏡」威信勢力台頭の事実も遺跡に残る。 その交代が、崇神から垂仁天皇期に表現される「崇り」を理由とした「天照大神の宮中排除と変遷」と記され、丹後籠神社や元伊勢伝承に残った。

天武天皇により伊勢神宮の斎王が制度化。 持統天皇4(690)年、内宮で 第1回式年遷宮が行われた。また伊勢に一度、紀伊に一度の行幸を記録する。 その内行花紋鏡は、古墳時代当初、崇神天皇の「第二次鏡奉祭勢力」により宮中から遷却され、大阪湾周辺は画紋帯神獣鏡が主となった。 遷却された天照大神を復活させ、天津神の頂点とする物語として、「古事記、日本書紀」神話の基本構想が創られた。 そして、仏教からは「帝王神権」、道教からは「仙人真人の天皇」を採用、新しい天皇信奉を構築した。
武力によって得られた地位を確実にし、秩序するための天武天皇の政治的、宗教構想である。 その根拠となる「根本思想」 信仰典拠を本紙後半に記す。

内行花文鏡

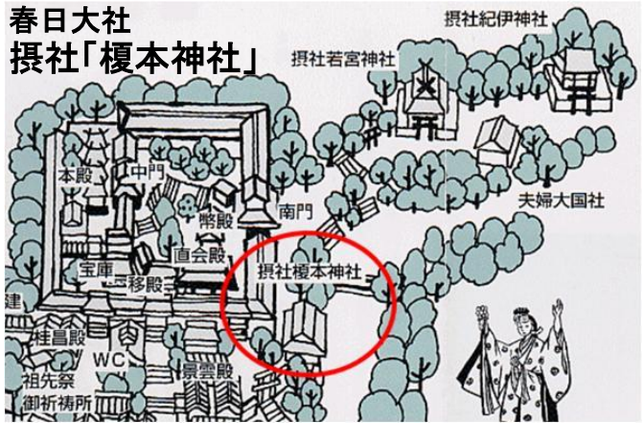
画紋帯神獣鏡

686年、天武天皇亡き後、藤原不比等が、平城京への遷都と平行して、神話に天孫降臨や神武東征で活躍する「建御雷之男神」を加えた、と考える。 春日大社社伝では、『 およそ1300年前、奈良に都ができた頃、日本の国の繁栄と国民の幸せを願って、遠く鹿島神宮から武甕槌命(タケミカヅチノミコト)を神山御蓋山(ミカサヤマ)山頂浮雲峰(ウキグモノミネ)に迎えた。神護景雲2年(768年)11月9日、称徳天皇の勅命により左大臣 藤原永手によって、中腹となる今の地に壮麗な社殿を造営して香取神宮から経津主命、枚岡神社から天児屋根命・比売神を招き、あわせ祀った 』 と鎮座の時期を明確にしない。『春日古社記』では、神護景雲2年(768)創建とされる。

『古事記』では登場させていない経津主神(ふつぬしのかみ)は、正史である『日本書紀』の天孫降臨では「建御雷之男神」と共に登場する。 また『古事記』で、建御雷之男神の別名が建布都神(たけふつのかみ)または豊布都神(とよふつのかみ)であるとし、建御雷之男神が中心となって葦原中国平定を行うなど、建御雷之男神と経津主神が同じ神であるかのように記載している。
ではなぜ『日本書紀』では、その様な配慮が必要であったのか？　藤原氏としては「建御雷之男神」の活躍だけでよかったのではないか？
物部氏は平城京遷都の折、まだ過去の氏族ではなく、現存していた。 物部氏 石上神宮の主祭神は布都御魂剣(ふつのみたまのつるぎ)に宿る神霊は「布都御魂大神」であるが、似通う別称として経津主神を『日本書紀』で活躍させたのである。 その藤原氏が配慮すべき物部氏は、石上 麻呂(いそのかみのまろ、舒明天皇12年(640年) – 霊亀3(717)年)、氏姓は物部連、のち物部朝臣、石上朝臣である。 大華上・物部宇麻乃の子。官位は正二位・左大臣、贈従一位。 彼は、壬申の乱で天智天皇の息子、大友皇子側につき、皇子の自殺まで従った。のちに赦されて遣新羅大使、筑紫総領になった。701年に大納言となって以後、右大臣、左大臣に任じられ717年に死去するまでの数年は太政官の最高位者であった。 つまり、平城京で復活する「天智天皇皇統と中臣氏」側である。公の歴史書である『日本書紀』からは、消すことはできない。 仮に、古事記から「建御雷之男神」を消し「経津主神」と入れ替えても、大意遜色なく神話は成立する。『日本書紀』に記された「神宮」は 伊勢神宮 と 物部氏の石上神宮 だけであり、当時の氏族の勢力、価値を表現している。 石上麻呂は、平城京遷都に反対した。万葉集の元明天皇「ますらをの 靭の音すなり　もののふの　大まへつ君 楯立つらしも」、姉である御名部女「わが大王　物な思ほし　皇神の　つぎて賜へる　吾無けなくに」が、根拠である。 しかし、石上麻呂は藤原京の留守司に甘んじ、養老元年(717年)没っした。
その子、石上乙麻呂も中納言。孫、宅嗣(やかつぐ)は藤原永手らと光仁天皇を擁立した。宅嗣の弟は息嗣、その子 振麻呂の子孫が石上神宮祠官家につながる。古代豪族の代表物部氏は、平安時代、中央政権から遠ざかる。 神山 三輪山を中心とした祭祀から、新たな神山三笠(春日)山の祭祀へ　　蘇我氏、物部氏 から 藤原氏へ　その集大成であり、「平城京」遷都の理由である。

鹿島神宮の地名「カシマ」は、養老5年(721年)に成立した『常陸国風土記』では「香島」と記載されてる。風土記の中で、「香島郡」の名称は「香島の天の大神」に基づくと説明されている。「カシマ」を「鹿島」と記された初見は、延暦16年(797年)に完成した『続日本紀』の記述、「養老7年(723年)条」である。 つまり、日本書紀が記されたあとに神護景雲2年(768)春日大社が創建され、そのあとに「香島」が「鹿島」に改称された。そして、それまで、神格が与えれていなかった鹿島神は、突如、宝亀8年(777)、正三位 (『続日本紀』)となり、承和6年(839)には従一位勲一等 (『続日本後紀』)となる。
710年の遷都後間もない、712年「古事記」が元明天皇に 献上。養老4年(720)『日本書紀』完成した。先に記述された歴史があり、その内容に合せて「香島」が「鹿島」となり、春日大社が創建されたのである。『古事記』『日本書紀』『常陸国風土記』に、鹿島神宮の祭神をタケミカヅチとする記述はなく、初見は『古語拾遺』(807年成立)または『延喜式』所収の「春日祭祝詞」(768～927年)にまで下る。
興福寺と同じ時期に春日大社が創建できなかった事情には、元来、その地に先住していた春日氏(和邇氏の一族)の存在がある。春日氏は、猿田彦大神(榎本明神)を祀っており、その神は、記紀で天孫降臨の先導役として活躍させられる。 同じ和邇氏一族の小野氏が、桜井の阿部山と交換に『三笠山譲り』したことが「**春日古社記**」に記されている。 小野氏一族の小野朝臣人足たちは、遷都で造京司になっており、当時、従二位まで昇進し権勢した小野毛野(けぬ)も藤原不比等の腹心で、小野妹子の孫であった。 「榎本明神」は、今も春日大社の一角で、摂社として祀られている。

春日大社
摂社「榎本神社」



武甕槌命 – 藤原氏守護神(常陸国 鹿島の神)
経津主命 – 同上(下総国 香取の神)
天児屋根命 – 藤原氏 祖神(河内国 平岡の神)
比売神 – 天児屋根命の妻(同上)

巻向遺跡祭殿は三輪山を遥拝する東西方向　　天平勝宝8年(756)「東大寺山堺四至図」によると　春日大社 神地は三笠山を遥拝する東西方向

以下、天武天皇の、信仰・宗教関連記事　　天武・持統天皇期には、飛鳥の大官大寺など以外に、関東から九州に500以上の寺院創建、急増した。「国家仏教」創始の時でもある。また、飛鳥浄御原令に起源説がある神祇官制度により、各地の八百万の神々の掌握をもくろんだ。 朝廷による幣帛の直接授受などで、太政官を介入させずに全国の神社を掌握するための構想である。

・ 壬申の乱の戦勝祈願を「天照大神に望拝」日本書紀　天淳中原瀛眞人天皇 天武天皇　　丙戌旦、於朝明郡 迹太川邊、望拜天照大神。
・ 仏教『金光明経』正論品の「帝王神権」　　日本書記 天武天皇期に、三度説かれる。
『金光明経』曇無讖の同名漢訳や、唐の義浄(ぎじょう、635年-713年)が漢訳した『金光明最勝王経』がある。
『金光明経』『金光明最勝王経』は、四天王などが国王や皇帝の利益を第一に守ることを説いている護国経典である。のちに最澄は、『金光明経』『法華経』『仁王経』を護国三部経(ごこくさんぶきょう)として括めた。
『金光明経』四天王品で、世尊(せそん・梵語で「福徳ある者」「聖なる者」の意・仏の尊称)、如(も)し諸の国王の所有する土境、是の経を持(たも)つ者、若し其の国に至らば、是の王、応(まさ)に当(まさ)に是の人の所に往いて、是の如き微妙の経典を聴受し、聞き已(おわ)って歓喜すべし。復(また)、当に是の人を護念し恭敬すべし。世尊、我等四王、復た当に勤心(ごんしん)に是の王、及び国の人民を擁護し、為に衰患(すいげん)を除き安穏を得せしむべし。『金光明最勝王経』滅業障品にも、この経典を講説して得られる種々の利益があげられる。
1. 国王が無病息災、2. 国王の寿命が長遠、3. 怨敵がなく、将兵が勇健、4. 国が安穏豊楽で、正法が流通することという。

以下、天武天皇の、信仰・宗教関連記事　天武・持統天皇期には、飛鳥の大官大寺など以外に、関東から九州に500以上の寺院創建、急増した。「国家仏教」創始の時でもある。 またその時代、飛鳥浄御原令に起源説がある神祇官制度により、各地の八百万の神々の掌握をもくろんだ。 朝廷による幣帛の直接授受などで、太政官を介入させずに全国の神社を掌握するための構想である。

・ 壬申の乱の戦勝祈願を「天照大神に望拝」　日本書紀巻第廿八　天淳中原瀛眞人天皇 上　天武天皇　丙戌旦、於朝明郡迹太川邊、望拜天照大神。

・ 仏教『金光明経』正論品の「帝王神権」　日本書記 天武天皇期に、三度説かれる。

十一月乙丑朔、以新嘗事、不告朔。丁卯、新羅、遣沙飡金清平、請政。幷遣汲飡金好儒・弟監大舍金欽吉等、進調。其送使奈末被珍那・副使奈末好福、送清平等於筑紫。是月、肅愼七人、從清平等至之。癸未、詔近京諸國而放生。甲申、遣使於四方國、說金光明經・仁王經。丁亥、高麗、遣大使後部主簿阿于・副使前部大兄德富、朝貢。仍新羅、遣大奈末金楊原、送高麗使人於筑紫。是年、將都新城。而限內田園者、不問公私、皆不耕悉荒。然遂不都矣。

『金光明経』曇無讖の同名漢訳や、唐の義浄（ぎじょう、635年−713年）が漢訳した『金光明最勝王経』がある。『金光明経』『金光明最勝王経』は、四天王などが国王や皇帝の利益を第一に守ることを説いている護国経典である。のちに最澄は、『金光明経』『法華経』『仁王経』を護国三部経（ごこくさんぶきょう）として括めた。

『金光明経』四天王品で、世尊(せそん・梵語で「福徳ある者」「聖なる者」の意・仏の尊称)、如(も)し諸の国王の所有する土境、是の経を持(たも)つ者、若し其の国に至らば、是の王、応(まさ)に当(まさ)に是の人の所に往いて、是の如き微妙の経典を聴受し、聞き已(おわ)って歓喜すべし。復(また)、当に是の人を護念し恭敬すべし。世尊、我等四王、復た当に勤心(ごんしん)に是の王、及び国の人民を擁護し、為に衰患(すいげん)を除き安穏を得せしむべし。

『金光明最勝王経』滅業障品にも、この経典を講説して得られる種々の利益があげられる。1.国王が無病息災であること、2.国王の寿命が長遠であること、3.怨敵がなく、将兵が勇健であること、4.国が安穏豊楽で、正法が流通することという。

『金光明経』正論品の偈(げ)　集業(しゅうごう)に因るが故に、人中に生じ、王として国土を領す。その前世で積み重ねた善業によって、人と生まれて王として国土を領すとし、胎中(たいちゅう)に処在(あり)て、諸天守護し、或いは先に守護して、然して後に胎に入る。人中に在って、生まれて人王と為ると雖(いえど)も、天、護るを以ての故に、復た天子と称す。三十三天、各己(おの)が徳を以て、是の人に分与す。故に天子と称す。　『日本書紀』は、「継体紀」6年12月条に、住吉大神、初めて海表(わたのほか)の金銀の国、高麗(こま)・百済・新羅・任那(みまな)を以て、胎中(はらのうちにまします)誉田天皇に授記(さず)けまつれり。とある。『日本書紀』は、応神が、住吉大神などの神意によって生まれたとし、「胎中誉田天皇」と書いた。「授記(じゅき)」は、仏教用語で、「仏が弟子の未来の成仏を予言すること」を意味し、『金光明経』と『金光明最勝王経』にはそれぞれ「授記品」がある。 天皇が、自己の王統の正当性を『金光明経』『金光明最勝王経』によって主張していたこと、また、応神天皇の生誕に皇統の正当性を含ませた。

また、『金光明経』が重視されたもう一つの理由は、この経典が農業を護り、繁栄させることを約束していることである。『金光明経』堅牢地神品では、堅牢な地の神が、『金光明経』の演説を聞くと、「身力を増益し」、世界中の大地を豊穣にし、「凡そ是れ地に因って生ずる所の物は、悉く増長滋茂広大なることを得、諸の衆生をして、快楽を受けしむ」と説いている。

・ 道教の神格「天皇大帝」

天武天皇、和風の諡は、「天淳中原瀛真人」（あまのぬなかはらおきのまひと）。真人は中国で仙人の上位階級。 天武天皇が定めた身分秩序「八色の姓」の最上位とされる。 天皇も道教の最高神に近い存在であることを示す。ここに天武天皇の宗教観に道教の要素がみられる。天皇の称号（大宝律令で制定）　古代中国で、天体の中心である北極星を意味し、道教にも取り入れられ神格化され「天皇大帝」（てんおうだいてい）などと呼ばれた。 ここから、中国の唐の高宗（649年− 683年）は「天皇」と称し、死後は皇后の則天武后によって「天皇大帝」の諡（おくりな）が付けられた。 称号天皇を定めた大宝律令編纂の起源は、その当時、681年まで遡る。 天武天皇（673年− 686年）により律令制定を命ずる詔が発令、天武没後の689年（持統3年6月）には、まず飛鳥浄御原令が頒布・制定された。

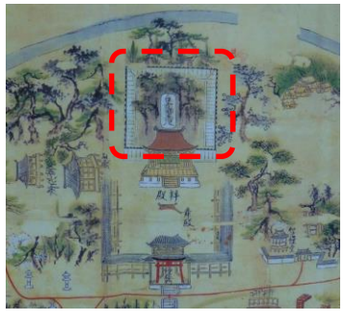
コラム　「庭」　庭は、「石」「樹木」「池」という素材を使い大自然を抽出する 知的な芸術活動の所産である。
人間はいかに機械化されようと自然の一部であり、大自然から離れて生きることが出来ない。
自然と共に生きるから安らぎを得ることが出来る。これが「自然なるこころ」「自然なる思考」である。
日本人にとって「庭」の原点は、「神の坐ます場所」、「仏のおわす場所」であった。
神話の「庭」は、神の坐ます場所、神聖な田であった。実在としては、古代の神奈備「祭場」が、その場所と考えられる。言葉として正式に「祭場」が「庭」と呼ばれた用例として「**石上神宮**の高庭」がある。

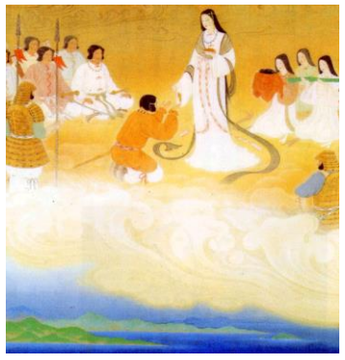
（縄文・弥生時代）
巨石、磐座、磐境、依り代として巨石・巨木信仰。
天の斎庭(ゆにわ) の発想「古代祭場」 麓は祀り場 神社起源。
磐境：垣根のように依代と磐座を取り囲んで配置されている添え石、神域との境界を示すもの
古墳時代になると巨石を移動させ、身近に祀る場所で再現した。

（飛鳥・奈良時代）　神仙蓬莱思想は不老不死の願望を満たす
飛鳥時代になると中国、韓国から、不老不死を願う神仙蓬莱思想が伝えられた。
（秦の始皇帝、漢の武帝など古代中国の権力者がこの思想に熱狂）
蘇我入鹿は、池、蓬莱山島を作り「嶋大臣」（しまのおおおみ）と言われた。
斉明天皇　外国使者を迎え「須弥山石（しゅみせんせき）」のもと饗宴した記事。
この時代、文献と一致する、庭として唯一の石造物。
天武天皇・持統天皇　飛鳥浄御原宮「飛鳥京庭園」は、我が国独自に工夫した流水・涼み台。
天武天皇14年(685)　飛鳥京庭園推定として「白錦後苑」の記述　以上3件『日本書紀』
飛鳥の園池は百済渡来の「方型池」が多いが、奈良時代は新羅渡来の「曲型池」が多くなる。
「飛鳥京庭園」は、その習合的で過渡的な形態。

貴船神社　「石庭」
天津磐境がモデル

「祭場」が「庭」と呼ばれた用例「石上神宮の高庭」

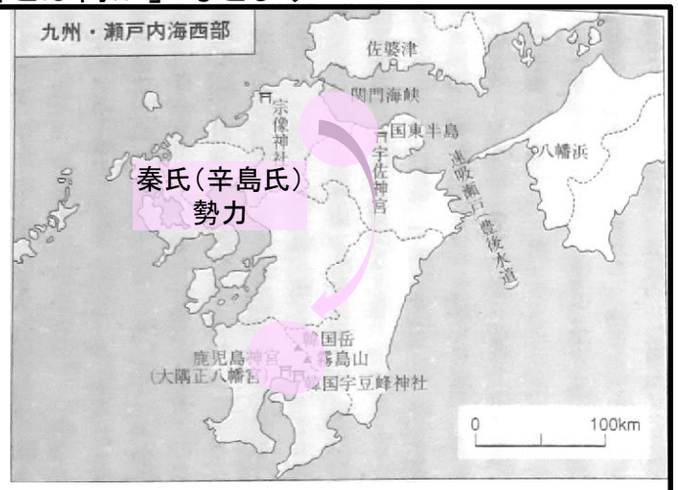



『 日本書紀 』
神に捧げる稲穂を耕作する
神聖な田（庭）
「 斎庭（ゆにわ） 」

飛鳥浄御原宮
「飛鳥京庭園」

苑池のイメージ

張り出し部から見た苑池の景観



宇佐八幡宮は、元来は筑紫に渡来、勢力した秦氏の国境神に大神氏による大和の信仰が重層、そして同じ秦氏が筑紫から移住した大隅国の神、その二神が720年隼人の乱で軍神として出現した。1313年成立の弥勒寺学僧の「神叫（じんうん）」編纂『八幡宮宇佐御託宣集』によると、大神諸男が考案した薦枕を御神体とした神輿を奉じて、宇佐から大隅「辛国城」に向かい救援した時のことである。

先住土着の海人族出身説をもつ宇佐氏の磐座信仰、神山・御許山（馬城峯）は姫神。 そのあと渡来した秦氏、その一族である辛島氏、香春岳の神は母子神で姫神（母神）と太子神の二神を祀って宇佐方面にも進出、比売大神信仰を導入、720年隼人の乱で太子神が八幡大神となった。大和から派遣された大神氏の領導で、733年比売大神は元の宇佐氏姫神に替わり、同時にそれは神功皇后で、八幡大神は応神天皇となる。 奈良時代末期以降は、宇佐八幡宮の大宮司は大神氏、少宮司は宇佐氏、禰宜（ねぎ：祈ぎ）・祝（はふり）は辛島氏に一応固定し各氏が世襲した。 大神氏は宇佐氏を抱き込み、辛島氏の八幡神を徐々に奪取していった。823年、神功廟とされる筑紫香椎宮から大帯姫神（神功皇后）が分遷され、宇佐八幡宮祭神は三柱となった。 その時、宇佐氏姫神（比売大神）は、同じ海人族出身でかつ大和にも勧請されていた宗像三女神が同体とされた。 神山・御許山の磐座が三神、「うさ」に通じる「スサ」の名を持つスサノヲの娘が宗像三女神、スサノヲの新羅出身伝承が影響したとも考える。 つまり八幡神は、古代海人族の信仰を基礎に渡来人である秦氏、さらに戦闘に際し大和の信仰が加わった和韓習合の武神、それは神仏習合も惹起した。 重層する信仰思想に注目したい。

これと関係し、神功皇后や応神天皇の実在について否定論がある。ちょうど神話と史実の狭間に登場し内容も伝説的だ。 しかし、三韓征伐に時期該当する、高句麗「好太王碑」の391年「倭の百残(百済)、加羅・新羅を破り臣民とした」この実行者や、日本書紀記載、百済から神功皇后に献上された「七枝刀」、すなわち推定では石上神宮に伝わる国宝「七支刀」の存在理由が求められる。朝鮮半島への渡航で関係した海人族由来の、住吉大社・宗像大社の祭神や歴史、また京都祇園祭の山鉾御神体にまで影響する。現代なお重要課題である。

京都市左京区上高野の三宅八幡宮の縁起。 小野妹子が、筑紫（九州の北部）で病気になったが、宇佐八幡宮に祈願するとたちまち病気が治り無事帰国することが出来た。そのため隋からの帰国後に、報恩の意味を込めて自らの所領である山城国愛宕郡小野郷に宇佐八幡宮を勧請したのが始まりとされる。『隋書』倭人伝によると、608年、小野妹子は隋使・裴世清を伴い帰国した。裴世清は、筑紫から瀬戸内海に入ったとき、中国人が住むという「秦王国」の存在を知らされる。「秦王国」とは、渡来帰化人の秦氏が多く住んだ豊前の地（現在は福岡・大分両県に二分）のことである。
秦氏は、秦の始皇帝の流れを汲む氏族を自称し、五世紀後半以降、朝鮮経由で数度にわたり渡来した。 秦氏は新羅系加羅人と思われ、六世紀半ばに加羅は新羅に吸収されるが、その前から加羅には新羅人が多く住んでいた。秦氏もそういう一族で、「宇佐八幡宮託宣集」の「辛国」のカラとは、秦氏の故地である「加羅」を指している。

「宇佐八幡」とは、八幡神の「分神」後の呼称で、当初は単に「八幡」（やはた）である。現宇佐八幡宮の祭神は、応神天皇、神功皇后、それに宗像の三姫神。 延喜式（905～927年撰述）によれば、八幡大菩薩宇佐大神、大帯（たらし）姫神、姫神の三神とある。 最後の姫神とは宇佐地方・御許山の神である。 そして大帯姫神が息長（おきがな）帯姫、つまり神功皇后に擬せられ、その結果として八幡大神は神功皇后の御子・応神天皇とされる。 神名「八幡」は「はちまん」ではなく「やはた」が古名である。「八」は多さを表し、「幡」は後ちの「旗」である。旗とは単なる目印ではなく、神の依り代（：ヒレ）であり、そのはためく様子は神が示現する姿そのものであり、鳥に化身した神が飛ぶ様子でもある（神使・乗り物としての鳥が、より古形）。八幡とは文字通り、多数の幡を立てて祀る神である。

秦氏の神山は、筑紫に近い北豊前（現福岡県南東部）にある香春岳（福岡県田川郡）である。 香春は「かはる」と読むが、もとは「カル」である。カルとは金属、特に銅のことである。飛鳥の天香具山の「カグ」も「カル」のことで、ここの銅から鏡（カガミ）や矛を作った。香春には古い採銅所があり、ここの銅から八幡宮の神鏡が作られ、そこには古宮八幡宮がある。

延喜式神名帳記載、豊前国の神社は六座だが、その半分の三座が香春神社（かわらじんじゃ）にある。（残りの三座はすべて宇佐神宮内） 三座は、辛国息長大姫大目神社、忍骨神社、豊比咩神社で、もともと香春三山（一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳）の山頂にあった。 和銅2年（709年）に山頂の三社を現在地に移設したのが現在の香春神社。古来より宇佐神宮と共に豊前国を代表する大神社である。承和10（843）年、辛国息長大姫大目神社と忍骨神社に正一位の神階が与えられたが、これは奈良の大神神社（859年）、石上神宮（868年）、大和神社（897年）が正一位になった年より早い。

秦氏は香春地域から、南東の宇佐地方へも広がっていった。 八幡宮で創始されたという放生会（仏教法会）は、その神仏習合ぶりをよく示すが、この祭事の巡幸路が「秦王国」の領域であった。香春岳の銅で作られた神鏡を、古宮八幡宮から宇佐八幡宮の東方和間浜まで十五日間、豊前各地を巡る神幸である。「秦王国」の両端に二つの八幡宮が置かれた。 宇佐の地での香春八幡神祭祀は秦氏一族の辛島氏が担った。『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』（844年）によると、宇佐八幡神は「宇佐郡辛国宇豆高島」に天下ったとされる。これは香春とのつながりこそ失われているが、辛島氏の香春八幡神祭祀を証明している。「辛国」とは「日本の加羅国＝秦王国」であり、ここでは辛島氏の本拠・宇佐郡辛島郷のことである。「宇豆高島」の宇豆（うず）とは「貴・珍・太」などの美称で、高島は「辛国の城（き）」と同じで峯や山のことである。

香春社の神官は、赤染氏と鶴賀氏でどちらも秦氏一族である。 後者の「鶴賀」は「敦賀」と同音であり、その「ツルガ」とは書紀にある「オホカラの王子ツヌガアラシト」の上陸地（福井県・ケヒの浦）にちなむものである。その名は「大加羅の王子ツヌガ」であり、「アラシト」とは加羅の一邑・安羅の人の意である。 秦氏も多く居住した敦賀には気比（けひ）社がある。八幡神とされる応神天皇（ホムタワケ）には、この気比の神（イザサワケ）に「我に御食(みけ)の魚(な ・ 名？)給へり」と言った。神武天皇は若御毛沼(わかみけぬの)命、熊野大社も神祖熊野大神櫛御食野(みけぬの)尊である。では「御食」とは何か？　それは古代自然・食物神の魂を表し、御食を給わることは、神の魂を賜ることで、つまりは即位の宣言「誓約」と考える。

香春社の主祭神・オシホネ命の「シホ」、古代朝鮮語の原語「ソホ」よりの転訛、ソホとは「ソフル」（聖地の意：大韓民国の首都名も同様）の「ソフ」と同じで、神の降臨する聖地を意味する。オシホネ命は、本当は新羅の「御子神」である。そしてその神名はニッポン神・天忍穂根命（アメノオシホネ命）への付会と考える。

『八幡宮宇佐御託宣集』によれば「八幡神は天童の姿で日本の辛国の城（き：峯、山）に降臨し、そこは神武天皇再臨の蘇於峯（そほだけ）である」とある。「辛国の城」とは、秦氏の神山であった豊前・香春岳に他ならない。太宰府の命で「秦王国」の人々の一部は、七世紀頃から日向南部に移住した、そこは未だ朝廷に服さぬ「隼人」たちの国であった。699年に「稲積」（辛島氏の神山の名）城が築かれ、713年には日向国から大隅国として分立されるが、隼人の叛乱が相次いでいた。『続日本紀』714年、「豊前国の民二百戸（五千名ほどか）を移して」とある。秦氏は曽於郡とそこから分けられた桑原郡に多く住んだ。「曽於」はソホで、新郡名「桑原」とは豊前香春にある地名である。そして、曽於郡には、「辛」ではなく「韓」の字が用いられた韓国宇豆峯社が、桑原郡には鹿児島神宮が建てられた。鹿児島神社が大隅正八幡宮と称するのは、宇佐八幡宮を支配するようになった大神氏に対抗した「大隅、辛島氏の主張」である。 のちに島津氏の尊崇を受けた。

720年の隼人叛乱で、宇佐から辛島ハトメ率いる「神軍」が出動している。太宰府の命や大神氏の督促もあったが、大隅に住む一族の危難の救済に向かった。「放生会」は、この隼人征伐に発っす。八幡宮神軍が隼人を殺生、これを放生供養せよとの八幡神のお告げによる。 つまり八幡神の神幸に「放生会」仏教的儀式が付け加えられた。

神話時代　　史実時代

一 | 二 | 四 | 五 | 八世紀 | 九世紀 | 十 | 十一世紀 | 十二世紀 | 十三 | 十四

周（東周） 戦国 | 秦 | 前漢 | 新 | 後漢 | 三国時代（魏呉蜀） | 西晋 | 東晋 五胡十六国 | 南北朝 | 隋 | 唐 | 五代十国 | 北宋 | 金 南宋 | 元

この時代の詳細図

国家意識の芽生え　　和風の芽生え

403 | 221 | 202 | 8 | 25 | 220 | 265 | 304 | 439 | 581 | 618 | 907 | 960 | 1127 | 1271 | 1368

弥生時代 | 古墳時代 | 飛鳥 | 奈良 | 平安時代 | 鎌倉

5世紀頃（参考） | 3世紀頃 | 6世紀末 | 710 | 794 | 1185 | 1336

弁韓 辰韓 馬韓 | 任那 新羅 百済 | 新羅 | 高麗

箕氏朝鮮 夫余 | 楽浪郡・帯方郡 高句麗 | 高句麗

前1世紀頃 | 紀半ば | 918

該当期間

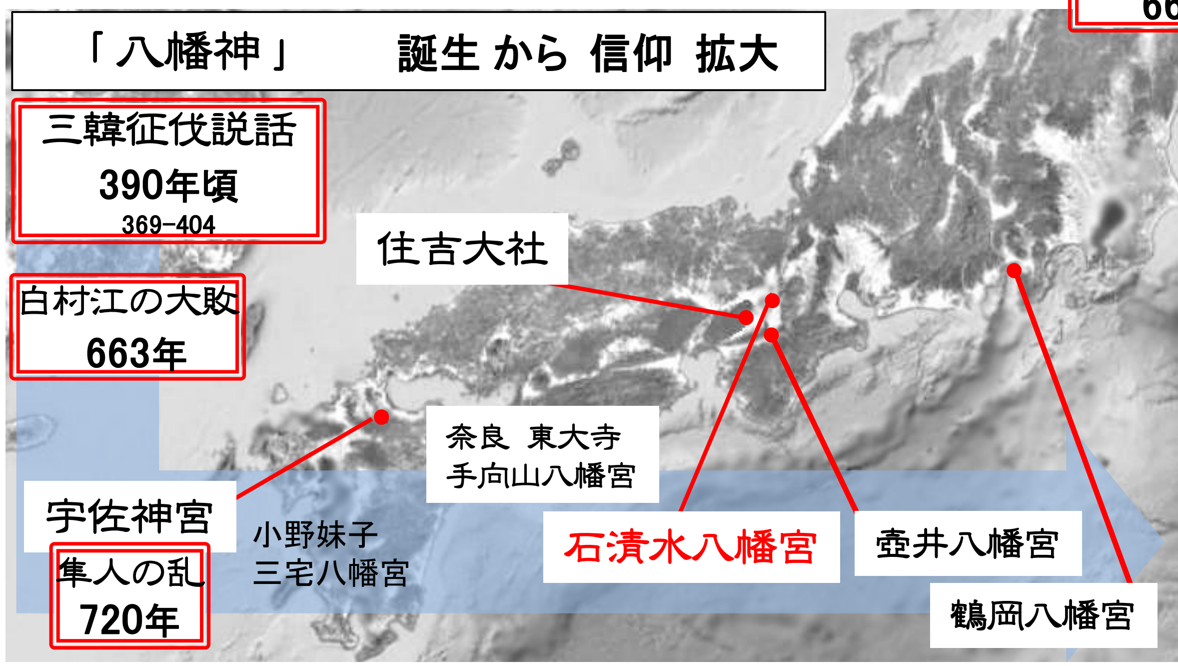
三韓征伐 390年頃 369-404

白村江の大敗 663年

記紀・風土記

「 縄文から弥生時代にかけて継承された、神山、神奈備、磐座の信仰は、
それまでの歴史伝承と、編纂の事情により、風土記 や 記紀 で 集約された。
物語の中で、名づけられ体系化された神々は、地域、氏家の系統を表現し、その
先祖意識を高める作用と相乗した。国家統一の過程で、生み出された戦闘神の誕生も
語られた。その神々は鎮魂のため仏とも共存、やがて権威正当の証にも進化した。」

神道の起源
日本の風土や日本人の生活習慣に基づいて神観念は自然と生じたといわれる。
『古事記』や『日本書紀』『風土記』などから神道のあり方や神々の根元が覗えるが、
開祖がいたり、教典があるわけではない。
神社の基礎 （建築物の神社ではなく、その起源となる神域）
弥生時代から古墳時代に築かれたとされています。
仏教が伝来し、奈良時代から近世（安土桃山時代・江戸時代）の間には、
長い時間をかけ神への信仰と融和する神仏習合の時代となる。



平安時代から中世には、朝廷が国家の大事を神社に祈願しましたが、伊勢神宮・賀茂神社・春日大社・松尾神社など22社に及んだ。 この時代には68の国があり、その国の第一位の神社を国司が参拝し、これが一宮と呼ばれた。
明治時代にはいると、明治政府によって神仏分離令が発せられ、太平洋戦争後は、GHQによって日本における国家と神道との繋がりが禁止されて、今日に至っている

神 論

籠神社　　出雲大社　大神神社　　熊野大社

地域 ｜ 氏家 ｜ 国家 ｜ 人

信仰 起源

磐座　貴船神社 日吉大社

氏神　高鴨神社 賀茂神社　石上神宮（いそのかみ）

① 海神

住吉大社　創建起源 400年頃　古事記神話冒頭で登場する神を、さらに記紀の中で祀られるまで記述
国生みの際、やけどで死んだ妻イザナミを救うため、イザナギは黄泉の国にいった。
その穢れを洗い禊だ 時に生れた海神 ツツノヲノ三神が住吉大神。
（ 同時に生れたワタツミノ三神は、阿曇連（あづみのむらじ）が、祖とし志賀海神社（しかうみじんじゃ）に祀る 福岡志賀島）
日本書紀によれば、神託を得た**神功皇后**は、熊襲、隼人など大和朝廷に反抗する部族と、その背後の三韓を征討に向かった。 このとき、住吉大神の和魂が神功皇后の身辺を守り、荒魂は突風となり、神功皇后の船団を後押し、三韓の軍を苦しめた。 高句麗「高太王の碑」からも390年頃に史実。
神功皇后は凱旋の折、住吉大神の神託を得て、大神の荒魂を穴門（山口県）に奉斎、また、和魂を大津の渟中名倉の長峡に鎮めて祀り、**本霊である住吉三神 を 摂津の国 大坂 の地に、住吉大社 総本社 を 創建。**
遣隋使・遣唐使の航海無事祈願　源氏物語で光源氏が明石からの帰還に住吉詣でする。関屋「澪標」図屏風　宗達

白村江の大敗 663年

② 戦神　伊勢神宮　春日大社　松尾大社　伏見稲荷大社　豊饒　出雲大神宮

宇佐神宮　社伝　欽明天皇32年（571年?）　社殿創建 和銅年間（708-715） 〜 現地へ 神亀2年（725年）
祭神　・比売神（ひめがみ）　アマテラスとスサノオとの誓いで誕生、対新羅として祀られた宗像三女神が主説。
・神功皇后　三韓征伐に由来　**・八幡大神**　応神天皇に由来
713年大隅国設置のときに隼人が反乱。 **720年の隼人の乱**は最大で、国守を殺した。これに対し大和朝廷は征伐軍を送り込み、敵対するものを倒す神力を授かれるとして宇佐八幡（宇佐神宮）の神輿が同行。 続日本紀では、文武天皇養老5年（721年）の戦いに同行した宇佐市山本の虚空蔵寺の法蓮が、**隼人鎮魂のため放生会**、法蓮一族に「宇佐君」 を授かる。
神仏習合創世期の神宮寺、天平10年 738年 弥勒寺創建（金堂・講堂建立）。旧跡確認される最古
610年頃、遣隋の病気祈願回復で、京都に小野妹子が三宅八幡宮を勧請創建。 天平勝宝元年（749年） 東大寺大仏開眼に向け託宣し、仏法守護のため八幡大神が入京 「続日本紀」。　神護景雲3年（769年） 宇佐八幡宮神託事件。

愛宕神社

③ 武神　護国　城南宮 平野神社　梅宮大社（橘氏氏神）　愛宕山白雲寺

石清水八幡宮　創建 貞観2年 （ 860年 ） 宇佐八幡宮から勧請
祭神　中御前：誉田別命（ほんだわけのみこと）第15代応神天皇の本名。西御前：比咩大神（ひめおおかみ）宗像三女神のこと
東御前：息長帯姫命（おきながたらしひめのみこと）神功皇后の本名。
南都大安寺の僧行教（空海の弟子）が宇佐神宮にて受けた「われ都近き男山の峯に移座して国家を鎮護せん」との神託により、翌 貞観2年（860年）**清和天皇**が社殿を建立。「石清水」の名は、男山に既に鎮座していた石清水山寺（現 摂社・石清水社）による。
皇室・朝廷に、京都の南西の裏鬼門を守護する王城守護の神、王権・水運の神として篤く崇敬され、天皇・上皇・法皇などの行幸啓は250余を数える。中世以降は勧請元の宇佐神宮に代わって、**伊勢神宮と並び二所宗廟**の一つに。
源氏に篤く崇敬され、足利氏・徳川氏・今川氏・武田氏など氏神ため武神・弓矢の神・必勝の神とされた。
源頼義による**壺井八幡宮**や、頼義・頼朝による**鶴岡八幡宮**など、当社から勧請された八幡宮が各地に建立された。
創建より、境内の**護国寺と一体になる宮寺形式**をとった。

人神様　延喜2年(904年) 防府天満宮　延喜19年(919年)大宰府天満宮　天暦元年(947年) 北野天満宮

日本文化の原理　　自然との自然（じねん）なる 調和　　「 神 の 思想 」 形成

仮説「日本文化の特性　基本原理」を、縄文、弥生から古墳時代までの歴史を辿りながら、成立過程とその傾向をみてきた。 以下、簡単に整理する。

古代日本で、自然は、狩猟の山麓、稲作の水など、現実の生活に「恩恵・現世利益」をもたらし、一方では猛威を振るう「畏怖」の対象となった。そこに魂を感じ、木、草、山、川、岩、嵐、雷などを対象に「自然信仰、自然の法則・力」を感じた。 その価値観が 古事記で神々の有り様に描かれている。「神山」、「神奈備　磐座」 などの存在も、その地域の「現世利益」を願う「自然信仰」の証である。
その信仰の発祥理由を、「国土の立地・地形」と「気候」、そこからもたらされる 「自然環境」 にあると考えた。
「列島を取り巻く環境がもたらす山からの恩恵」である。 暖流が温暖と、豊富な雨量をもたらし、森林を育む。そして山の水が川となり下流に集まる。　その水は森が生んだ栄養含み、川や沿岸を、貝や魚の良き生き場とする。 縄文時代においては、その多くの河川、山麓環境で採種・漁撈を分かち合った。 それは、気候が一定の範囲で定まると、安定かつ豊富な自然を循環させるからである。
西欧と比較し明らかに生活環境は異なる。 大陸から離れている列島は、その中でも多様な気候と、断続的な人々や文化の渡来、防御の役割となる。
縄文から弥生時代への移行では、漁撈を共通に、採集に水稲稲作が加わり、次第に稲作が主となる。 ここでも大きな混乱はなかったと考える。 もともと陸稲の生産効率を改善する水稲であり、先住者の狩猟、漁撈とは棲み分けられた土地活用だからである。 漁撈技術にも好影響があったに違いない。 また、山、森林からの恩恵を共通、つまり価値観も異ならないからである。
同じ価値観は、信仰を違えず、自然の循環サイクルの中で「和合」した。 その前提条件は、自然への 感謝と畏怖 である。 「穢れ 禊ぎ・祓え」などの清浄心も自然信仰によると考える。

その自然循環は、天地の柱、生死の「循環思想」をもたらした。 のちの仏教伝来 「彼岸と此岸」「浄土信仰」 が、我が国で根付いた理由でもある。
信仰の遺跡　天と繋ぐ柱、魂の再生思考は、環状列石（ストーンサークル）環状土籬（周提墓）環状木柱列（ウッドサークル） 古事記 「 伊邪那岐命と伊邪那美命」の 於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿 「円＋柱」「村・大地」そして「山」「神奈備山」へと広がったのではないか。　諏訪大社の御柱祭　出雲大社の心御柱、伊勢神宮心御柱はそんな縄文祭祀の名残りである。
土偶埋葬も再生信仰の表れと考える。 死産児の遺骨を、住居近辺のトイレや玄関など、女性がよくまたぐ場所に埋葬して再生を願う、近年まで残った風習である。
四季を持つ「日本の森」があって初めて生まれた言葉、自然の音を捉えた擬音、日本特有の「擬態語・擬音語・擬声語」、「言霊（ことだま）」という思想がある。 日本では「モノ」という言葉に、物質以外の要素を詰め込んできた。「物思い・物語・物静か・物の怪・物のあわれ・物忌み…」と、物質以外のモノは多い。 その一方でモノづくりの場においても、モノに魂を吹き込むという日本人の特性に、「マナ」という（モノに霊性を認める）心根の継承がある。 語源的に見ても「マナ」と「モノ」とは共通性がある。 交易にあたる人たちを、マレビト（稀れ人）＝まろうど（客人）と呼び、手厚くもてなした。
「渡来文化」への高い価値観、憧憬になる。

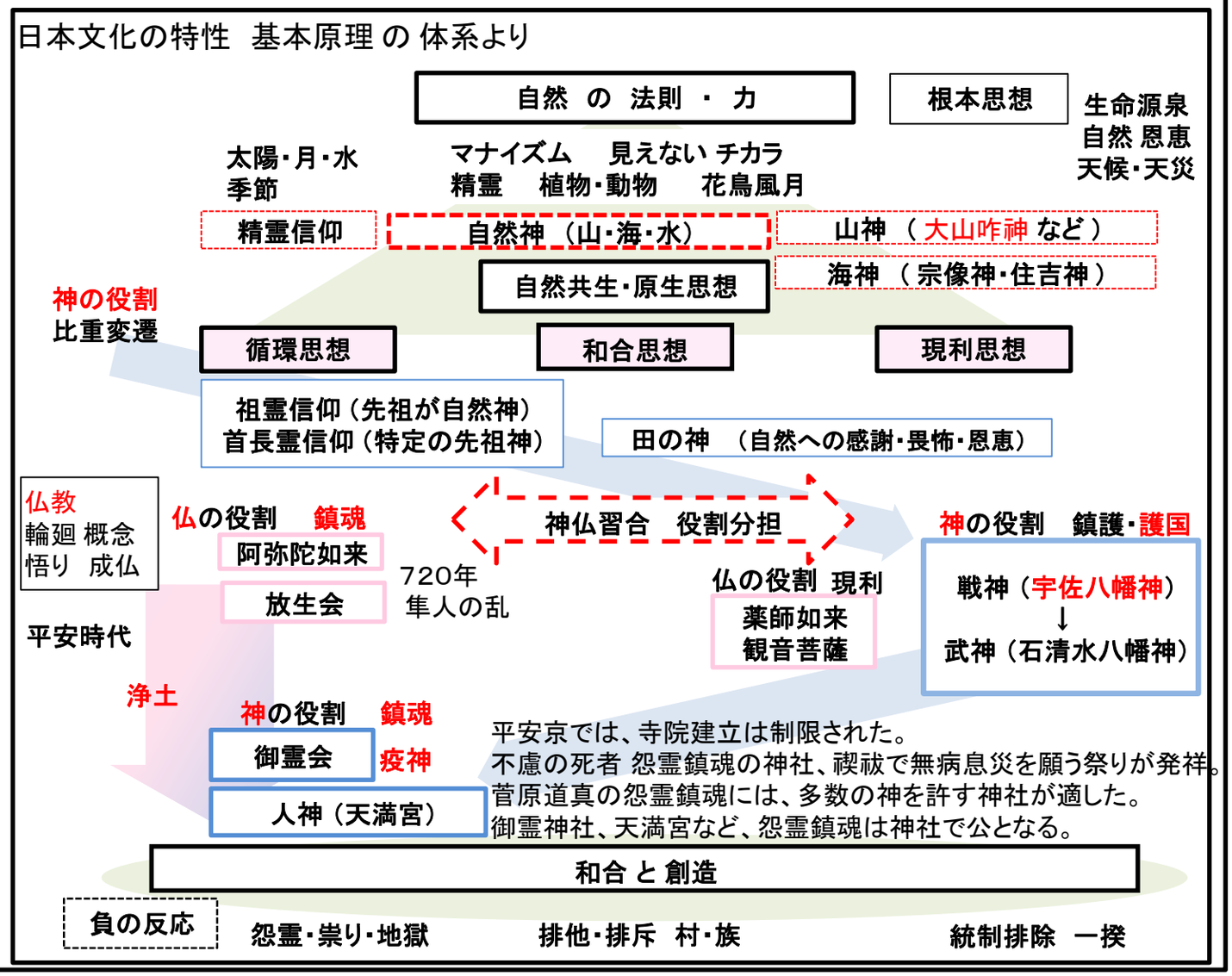
「循環思想」は、殯（モガリ） 魂振　鎮魂の儀式に残る。
その深層度は、神社建築や放生会、御霊会、怨霊への恐れ、行事、仏壇に出現する。
モノへの霊性は、唐物から和物など中世の「物数奇」に繋がる。
魂の「循環」、「継承」と「根本（原点）」への崇敬に繋がり、皇統・貴族・家系や、工芸・芸道など伝統文化への高い価値感を生む。

「和合思想」については、重要であり、多くの事例、仮説を提示した。
漁撈から出雲文化の継承は、銅鐸の編み紋様や、大社の亀甲紋に残る。
出雲と神武天皇の名の勢力交渉は、「国譲り」として その状況を詳しく語られている。
現代に残る多くの出雲祭神の神社が、その交渉の結果、和合を裏付ける。
出雲系姫たち母系や「天照國照彦天火明命」の名にも、その手掛かりを探した。
鏡勢力は、神武天皇と崇神天皇を、内行花紋鏡と画紋帯神獣鏡に仮説比定し、その鏡の合祀埋葬に和合を見た。伊勢神宮の構成、天照大御神と豊受大御神も同様である。

「現利思想」で、神への願い、信仰の変遷を追った。
農耕・漁撈・狩猟に関わる神、田の神、そして祭司、支配のための神、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、争乱から誕生した神が、宇佐の八幡神。
戦いの神への変遷・拡大である。その戦う神が誕生した時、神の概念は、自然世界を前提とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。

以上が、我が国、古代生活から誕生した「神」への信仰である。
同時にそれは、日本文化の基礎部分でもある。
仮説「日本文化の特性　基本原理」が、歴史とともに徐々に骨格されてきた時代である。

このあと、古墳時代、仏教・儒教の公伝以降の歴史となる。
基本原理と整合しながら、人々の願いに応じて神仏儒教が役割分担していく。
そして「和合と創造」の産物 が 誕生する。

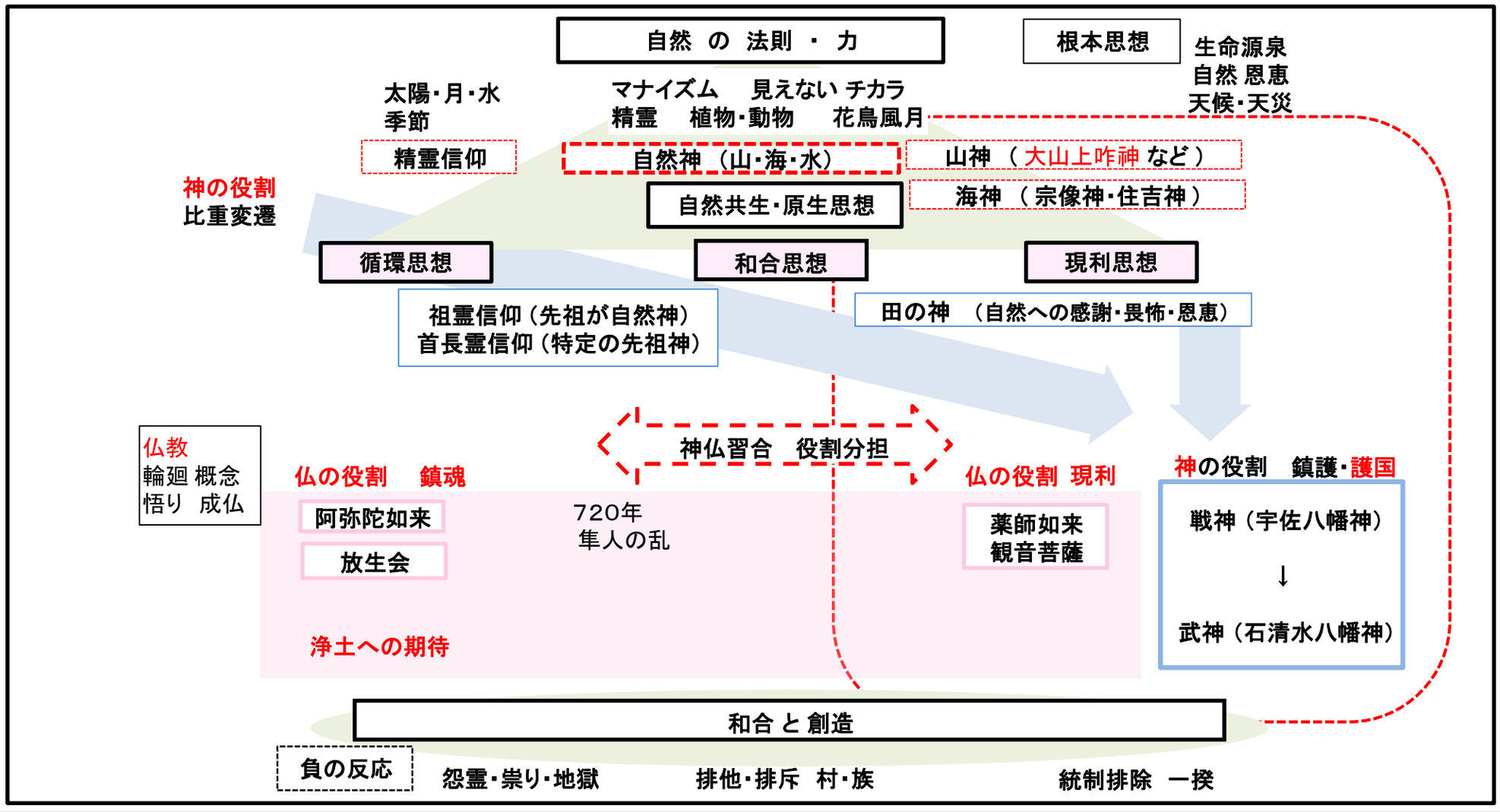


「現利思想」の概説
現世利益を求める合理思想現実主義　真摯に現実の生き方を考え、自身や家族、一族の生活維持を求める志向。 自然への感謝、畏怖を前提とする。（以下の詳細は後述）

古事記からも判るように、神信仰は自然への畏敬・恩恵から発祥、神は山・海・水にあった。 今に伝わる神奈備・磐座の存在がその信仰の証である。 稲霊（いなだま）すなわち「倉稲魂」（うかのみたま）、「豊受媛神」（とようけびめのかみ）、穀霊神の大歳神（おおとしのかみ）の名も古事記に記され、農耕神、一般に「田の神」をまつる習俗を語る。 そして太陽、日の神と系統すると物語された氏族、首長霊に変貌していく。 北九州には、縄文時代 漁撈民族の海・航海の神、住吉神・安曇神や宗像神が信仰されていた。 そのあと、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、海の神に航海安全を祈願しつつ、争乱から誕生した神が、宇佐の八幡神である。 宇佐八幡宮には、海神、宗像三女神とされる比売神（ひめがみ）に加え、三韓征伐に語られる神功皇后、その闘争の中で誕生したとされる応神天皇に由来する八幡大神が祀られる。 のちに京都石清水や鎌倉に勧請され、武将の神 武神として鎮座する。
縄文から弥生時代にかけた農耕・漁撈・狩猟に関わる神、そして祭司、支配のための神、その次に求められた戦いの神への変遷・拡大である。 戦う神が誕生した時、神の概念は、自然世界を背景とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。しかしそれらは、収穫や安全、戦勝と、「現世利益」を願う信仰、思想であることに変わりはない。

古墳時代の末である500年代中期に仏教は公伝した。 初期の主たる寺院 飛鳥寺、法隆寺、百済大寺などは、基本的な仏として、釈迦如来を本尊とする。 しかし、釈迦如来以外の仏を本尊とし、その名称とした寺院が現われた。 天武天皇が680年に建立勅願、法相宗の道昭、義淵により創建された薬師寺である。 藤原京やそのあとの平城京でも西方に建立され都の大寺となった。天武天皇が 後の持統天皇である鵜野讃良（うののさらら）皇后の病気平癒を願うためのもの。つまり、「現世利益」を願う特別な寺院が、公伝した飛鳥から遠くない時期・場所に、天皇によって誕生した。また、「観音菩薩」も早い時期から独尊像として信仰される。 その理由は何か？水瓶を持ち、慈悲すなわち「現世利益」をもたらすからである。神話時代の、水をもたらす神山「磐座信仰」の源流が、「現世利益」という共通で仏教と合流、「和合」が進み、山岳での観音信仰となる。 元来は法華経に典拠する仏であるが、法華経を主たる経典としない例えば法相宗寺院でも本尊とされた。 義淵による、600年代後半の南山背の観音寺、700年代初頭には隆豊禅師の西山 金蔵寺、725年、行基の葛井寺（大阪藤井寺）などである。 山科法厳寺やその系譜の清水寺も同様である。 そこでは、宗派を超えた「観音信仰」があり、その特性の強さが感じられる。 また「和合」から、「神仏習合」 神と仏の役割分担と共存が誕生する。 古代からの「神々習合」の歴史を経験して、「神仏習合」が誕生した。

日本文化の特性　基本原理 の 体系より



「和合思想」の概説
列島に渡来した民族混淆の生い立ちを基礎に、信仰や収穫支配、知識・文化を受容と選択。 独自の創造の源となる志向。　（以下の詳細は後述）

今日の日本、もちろん奈良や京都にも、信仰・文化が重層し和合した歴史を留めている。
漁撈生活の時代、海の神を信仰する歴史は、住吉大社や宗像大社の祭神に伝わる。
弥生時代、出雲文化の継承は、現代でも銅鐸、鐸鈴を用いる祭祀や飾り、なにより多くの神社御祭神が証である。 銅鐸の編み模様・亀紋様、編布は、漁撈の海人族との継承関係を残す。
「編む文化」は、綯う構造を包含しており、注連縄にも通ずる説を提案する。 なぜなら、伊勢神宮では注連縄は用いられていない。
そのあとの鏡威信文化は、北九州の遺跡に我が国への流入痕跡を残し、奈良など畿内、瀬戸内周辺に多く伝わる。 絹製品も同様に弥生時代から古墳初期に東伝した。
「織る文化」は、古事記の機織り、巻向遺跡の巾着袋、伊勢神宮内宮所管社である両機殿に関係する。 その祭祀に、古来から荒布（麻布）と 和布（絹布）が用いられ、新旧の共存を衣で表す。
異なる鏡を埋葬する初期古墳は、闘争もあったにせよ異なる勢力の和合の表現かもしれない。 徐々にその種類が増えていることに注目したい。 内行花紋鏡・画紋帯神獣鏡・三角縁神獣鏡など古墳時代中期 を中心に、朝鮮半島から多くの渡来があり、養蚕、機織、土木、漢字や論語が伝わり受容した。 そして、その末期に仏教が公伝した。

神仏習合はよく認知されている。 しかし、その前提はそれまでの民族、信仰、神々の習合である。 受容して選択し、編集、変化・創造していく素地、特性はすでに備わっていた。
和合から誕生する文化の創造は、必然として多様となる。 そして、創造される文化は特性を反映したものとなる。　「和合と創造」の産物に続く

日本文化の特性　基本原理 の 体系より

旧石器

縄文時代

縄文晩期
弥生前期
前400年頃

弥生終末
200年～250年頃
古墳時代初期

古墳時代

自然 の 法則 ・ 力

マナイズム　見えない チカラ
精霊　植物・動物　花鳥風月

自然神（山・海・水）

自然共生・原生思想

太陽・月・水
季節

生命源泉
自然 恩恵
天候・天災

循環思想　**和合思想**　**現利思想**

精霊信仰

山神 （ 大山上咋神 など ）

海神 （ 住吉神・安曇神、宗像神 ）

祖霊信仰（先祖が自然神）
首長霊信仰（特定の先祖神）

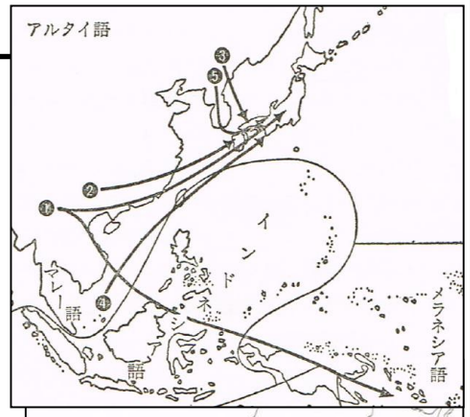
田の神　（自然への感謝・畏怖・恩恵）

狩猟・漁撈民族の渡来　南北流入
分散居住、遊住・定住　緩やかな和合、集団生活

信仰勢力の列島変遷　出雲・北九州
開拓・信仰・収穫の集団生活　秩序のための和合

新興文化の渡来　朝鮮半島から再流入
知識・文化　摂取のための 享受と和合・選択

和合 と 創造



農耕と魂の循環思想が神への信仰、祀りである。
神道的行事の祀り(祭り)は、農耕の季節性を根底にしている。 季節の循環「年」は稲の古字原字「禾」と豊かを表す「千」を合成した文字であり、古事記の大年神、皇室祭祀の祈年祭はその意味に由来する。
その稲魂への信仰から、皇祖霊の招魂・鎮魂、継承のための「殯」(もがり)に見れる魂振の儀式が発祥した。
神宮では春先の祈年祭(きねんさい)から秋の神嘗祭(かんなめさい)まで、稲作に関わる神事(かみごと)が多く行われる。
古事記では、出雲の須佐之男命が「大山津見神之女、名神大市比賣、生子、大年神、次 宇迦之御魂神」とされる。 宇迦之御魂神は食物の魂の神格である。他の食物神の大気都比売(おほげつひめ)・保食神(うけもち)などと同様に、伊勢神宮外宮に祀られている豊受大御神も宇迦之御魂神と同一視される。古事記で豊宇気毘売神と記され、伊弉冉尊(いざなみ)の尿から生まれた稚産霊(わくむすび)の子である。天孫降臨の後、外宮の度相(わたらい)に鎮座したと記されている。
祈年祭では畿内の神々に農具である鍬(すき)などを奉幣。 祝詞では、神祇官の八神殿の神々、伊勢神宮に続き、大和の御県(直轄地)・山の口の神・水分の神に称辞をあげている。
夏越の大祓、年越の祓も同様である。 稲が毛と言われる様に食物をケとし、ケが枯れた状態がケガレ、その回復のため清浄な空間をつくりあげ稲魂や心身を清める行為が祓いである。 したがって枯れや病害の夏、稲種年越しの冬に行われる。
神事中心だが、御田植式や神楽では民間とも関わる

田遊びの原生的歌舞は仏教行事と習合多様 した。
者(モノ)マネと歌舞を主に、田遊びから田楽、散楽から猿楽、猿楽から狂言・能へ　仏教では修正会と田遊び・猿楽・能、融通念仏と狂言、盂蘭盆会とお盆・灯籠・送り火へ。
やがて季節と関係無い 浄瑠璃・歌舞伎が誕生する。

仏教的現利祈願悔過 から仏教的循環信仰 お盆へ
悔過(けか)とは仏教において、三宝に対して自ら犯した罪や過ちを悔い改めること。更に悔過を行うと同時に利益を得ることを目的として行う儀式。
正月法会が修正会、二月が修二会。
夏の精霊迎から供養・送りが行事・祭りに
奈良、平安時代に毎年7月15日公事となった盂蘭盆会が起源

＊　六斎日とは1ヶ月のうち悪鬼が出てとても縁起の悪い日で念仏を唱えて精進潔斎しなければならない日で、8日・14日・15日・23日・29日・30日の6日

春

神道的　循環　祀り

祈年祭　2月　天武天皇創始
明治改暦前は旧暦2月4日　改暦後は2月17日

民間神楽

巫女神楽
春日大社社伝神楽
神楽始式1月　旬祭(毎月各1日)

種下ろし祭りなど
賀茂雷神社「土解祭り」 4月3日
　稲種の卜占
住吉大社 「松苗神事」 4月3日
熊野舞・白拍子舞

御田植式
松尾大社　6月1日　稲種　卜占
多賀大社　お田植祭　6月第一日曜
住吉大社 「御田植神事」 6月14日
神楽女8名による八乙女の田舞など

夏越の大祓(なごしのおおはらえ)　6月30日

神嘗祭
元来は9月17日(旧暦)に奉納。明治以降は新暦9月17日に実施したが、稲穂の生育が不十分な時期であるため、1879年(明治12年)以降は10月17日に改定

民間神楽

伏見稲荷大社
御神楽　11月8日
古の鎮魂祭にもとづく神事

鎮魂祭　天武天皇創始　招魂
　石上神宮、彌彦神社、物部神社でも祭祀
新嘗祭(にいなめさい)皇極～天武天皇創始
収穫感謝から、勤労感謝の日となる。11月23日
天皇が五穀の新穀を天神地祇(てんじんちぎ)に進め、自らもこれを食して、収穫に感謝する
大嘗祭　(だいじょうさい)天皇即位儀礼　11月

御神楽

年越の祓
(としこしのはらえ)
12月31日

宮中神楽　12月中旬
宮中賢所神楽舎にて

夏

秋

冬

原生的　躍動　歌舞

田遊び　(墾り・耕作始め)
春の田打ちから刈り上げまで物真似
伊勢神宮　鍬山祭 2月
奈良 飛鳥坐神社　おんだ祭り
　2月第1日曜日(元は旧暦1月11日)
大神神社　おんだ祭り　2月6日

田の神舞　霧島神社 3月　雨乞祭　貴船神社 3月

鎮花祭(御霊会)　厄病祓い
今宮神社　(やすらい祭)　4月2日曜
出雲大神宮　4月18日

田楽

御田植式　　田楽が重要無形民俗文化財指定
京都南丹田原の御田 5月3日
住吉大社　田舞 6月

＊平安時代より
祇園祭(御霊会)
厄病祓い
八坂神社　7月

＊江戸時代より
火伏せ　松上げ神事　愛宕信仰　火祭り　8月
愛宕神社　火伏せの護符と愛宕の神花である「樒」(しきみ)を持ち帰って火災からまぬがれることを祈願した。
「鞍馬の火祭」 10月22日
「御火焚」 11月
　八坂神社、今宮神社、広隆寺　知恩院など

収穫祭　　亥(旧暦10月)の子・十日夜の祭り
元来、刈り上げの稲魂を祀り、山に帰す行事
田楽・猿楽・神楽・雨乞踊り・風流踊りなど一般芸能

舞楽　**雅楽**

江戸時代に復興
南都楽所(奈良)
　興福寺など全国行事公演
天王寺楽所(大阪)
　四天王寺 「篝の舞楽」 8月4日
京都方楽所(宮中)

仏教的　現利　祈願

修正会(しゅしょうえ)(吉祥薬師悔過)
　東寺　1月
修二会　(観音悔過)
東大寺(お水取り) 3月
法隆寺　2月

念仏狂言
融通大念仏　勧請が起源
涅槃会や鎮火祭、桜見物とからめ、春行事が起源
壬生寺　4/29～5/5　10月
ゑんま堂狂言 5/1～4
引接寺千本閻魔堂

猿楽　**能**
興福寺・春日大社 「薪御能」 5月

念仏踊り　**六斎念仏**
盂蘭盆会が起源
壬生六斎念仏踊り　8月　＊
引接寺千本閻魔堂六斎念佛 8/14

盆踊り
信仰的背景
旧暦7月13～16日
明治～新暦8月15日(月遅れ盆)
精霊迎え・供養・送り
「精霊送り」「万灯籠」
「燈籠流し」「精霊流し」
＊江戸時代より　(五山の)送り火

薪御能(たきぎおのう)の名称由来
興福寺の法要は全て春日大社の神々擁護を仰ぐ。西金堂修二会で、仏にさしさげる神聖な薪を春日の花山から迎える儀式を猿楽に真似させ神事芸能に。

伎楽
練供養
當麻寺　中将姫ご縁日　5月14日
泉涌寺塔頭 即成院　10月第三日曜
　二十五菩薩お練り供養法会
獅子舞にも名残り

農耕と魂の循環思想が神への信仰、祀りである。
神道的行事の祀り(祭り)は、農耕の季節性を根底にしている。 季節の循環「年」は稲の古字原字「禾」と豊かを表す「千」を合成した文字であり、古事記の大年神、皇室祭祀の祈年祭はその意味に由来する。
その稲魂への信仰から、皇祖霊の招魂・鎮魂、継承のための「殯」(もがり)に見れる魂振の儀式が発祥した。
神宮では春先の祈年祭(きねんさい)から秋の神嘗祭(かんなめさい)まで、稲作に関わる神事(かみごと)が多く行われる。
古事記では、出雲の須佐之男命が「大山津見神之女、名神大市比賣、生子、大年神、次 宇迦之御魂神」とされる。 宇迦之御魂神は食物の魂の神格である。他の食物神の大気都比売(おほげつひめ)・保食神(うけもち)などと同様に、伊勢神宮外宮に祀られている豊受大御神も宇迦之御魂神と同一視される。古事記で豊宇気毘売神と記され、伊弉冉尊(いざなみ)の尿から生まれた稚産霊(わくむすび)の子である。天孫降臨の後、外宮の度相(わたらい)に鎮座したと記されている。
祈年祭では畿内の神々に農具である鍬(すき)などを奉幣。 祝詞では、神祇官の八神殿の神々、伊勢神宮に続き、大和の御県(直轄地)・山の口の神・水分の神に称辞をあげている。
夏越の大祓、年越の祓も同様である。 稲が毛と言われる様に食物をケとし、ケが枯れた状態がケガレ、その回復のため清浄な空間をつくりあげ稲魂や心身を清める行為が祓いである。 したがって枯れや病害の夏、稲種年越しの冬に行われる。
神事中心だが、御田植式や神楽では民間とも関わる

田遊びの原生的歌舞は仏教行事と習合多様 した。
者(モノ)マネと歌舞を主に、田遊びから田楽、散楽から猿楽、猿楽から狂言・能へ　仏教では修正会と田遊び・猿楽・能、融通念仏と狂言、盂蘭盆会とお盆・灯籠・送り火へ。
やがて季節と関係無い 浄瑠璃・歌舞伎が誕生する。

仏教的現利祈願悔過 から仏教的循環信仰 お盆へ
悔過(けか)とは仏教において、三宝に対して自ら犯した罪や過ちを悔い改めること。更に悔過を行うと同時に利益を得ることを目的として行う儀式。
正月法会が修正会、二月が修二会。
夏の精霊迎から供養・送りが行事・祭りに
奈良、平安時代に毎年7月15日公事となった盂蘭盆会が起源

＊　**六斎日**とは1ヶ月のうち悪鬼が出てとても縁起の悪い日で念仏を唱えて精進潔斎しなければならない日で、8日・14日・15日・23日・29日・30日の6日

春

神道的　循環　祀り

祈年祭　2月　天武天皇創始
明治改暦前は旧暦2月4日　改暦後は2月17日

民間神楽

巫女神楽
春日大社社伝神楽
神楽始式1月　旬祭(毎月各1日)

種下ろし祭りなど
賀茂別雷神社「土解祭り」 4月3日
　稲種の卜占
住吉大社 「松苗神事」 4月3日
熊野舞・白拍子舞

夏

御田植式
松尾大社　6月1日　稲種　卜占
多賀大社　お田植祭　6月第一日曜
住吉大社 「御田植神事」 6月14日
神楽女8名による八乙女の田舞など

夏越の大祓(なごしのおおはらえ)　6月30日

秋

神嘗祭
元来は9月17日(旧暦)に奉納。明治以降は新暦9月17日に実施したが、稲穂の生育が不十分な時期であるため、1879年(明治12年)以降は10月17日に改定

民間神楽

伏見稲荷大社
御神楽　11月8日
古の鎮魂祭にもとづく神事

冬

鎮魂祭　天武天皇創始　招魂
　石上神宮、彌彦神社、物部神社でも祭祀
新嘗祭(にいなめさい)皇極～天武天皇創始
収穫感謝から、勤労感謝の日となる。11月23日
天皇が五穀の新穀を天神地祇(てんじんちぎ)に進め、自らもこれを食して、収穫に感謝する

大嘗祭　(だいじょうさい)天皇即位儀礼　11月

御神楽

年越の祓
(としこしのはらえ)
12月31日

宮中神楽　12月中旬
宮中賢所神楽舎にて

原生的　躍動　歌舞

田遊び (墾り・耕作始め)
春の田打ちから刈り上げまで物真似
伊勢神宮　鍬山祭 2月
奈良 飛鳥坐神社　おんだ祭り
　2月第1日曜日(元は旧暦1月11日)
大神神社　おんだ祭り　2月6日

田の神舞　霧島神社 3月　雨乞祭　貴船神社 3月

鎮花祭(御霊会)　厄病祓い
今宮神社 (やすらい祭) 4月2日曜
出雲大神宮　4月18日

田楽

御田植式　　田楽が重要無形民俗文化財指定
京都南丹田原の御田 5月3日
住吉大社　田舞 6月

＊平安時代より
祇園祭(御霊会)
厄病祓い
八坂神社　7月

＊江戸時代より
火伏せ　松上げ神事　愛宕信仰　火祭り　8月
愛宕神社　火伏せの護符と愛宕の神花である「樒」(しきみ)を持ち帰って火災からまぬがれることを祈願した。
「鞍馬の火祭」 10月22日
「御火焚」 11月
　八坂神社、今宮神社、広隆寺　知恩院など

収穫祭　　亥(旧暦10月)の子・十日夜の祭り
元来、刈り上げの稲魂を祀り、山に帰す行事
田楽・猿楽・神楽・雨乞踊り・風流踊りなど一般芸能

舞楽　**雅楽**

江戸時代に復興
南都楽所(奈良)
　興福寺など全国行事公演
天王寺楽所(大阪)
　四天王寺 「篝の舞楽」 8月4日
京都方楽所(宮中)

仏教的　現利　祈願

修正会(しゅしょうえ) (吉祥薬師悔過)
　東寺　1月
修二会 (観音悔過)
東大寺(お水取り) 3月
法隆寺　2月

念仏狂言
融通大念仏　勧請が起源
涅槃会や鎮火祭、桜見物とからめ、春行事が起源
壬生寺　4/29～5/5　10月
ゑんま堂狂言 5/1～4
引接寺千本閻魔堂

猿楽　**能**
興福寺・春日大社 「薪御能」 5月

念仏踊り　**六斎念仏**
盂蘭盆会が起源
壬生六斎念仏踊り　8月　＊
引接寺千本閻魔堂六齋念佛 8/14

盆踊り
信仰的背景
旧暦7月13～16日
明治～新暦8月15日(月遅れ盆)
精霊迎え・供養・送り
「精霊送り」「万灯籠」
「燈籠流し」「精霊流し」
＊江戸時代より (五山の)送り火

薪御能(たきぎおのう)の名称由来
興福寺の法要は全て春日大社の神々擁護を仰ぐ。西金堂修二会で、仏にさささげる神聖な薪を春日の花山から迎える儀式を猿楽に真似させ神事芸能に。

伎楽
練供養
當麻寺　中将姫ご縁日　5月14日
泉涌寺塔頭 即成院　10月第三日曜
　二十五菩薩お練り供養法会
獅子舞にも名残り

神仏史　　祭りと 芸能　　楽芸発祥 から 座芸へ

我が国の祭り、芸能は、自然・季節・魂の循環信仰を基礎とする。
その信仰思想から発生した山の神、田の神、穀物神は、生活を支える稲作に必要な天候・水を願う 現実的な信仰、現利思想である。
その願いは、渡来した仏教においても 五穀豊穣を法会で祈願した。
また魂の循環信仰からは、鎮魂供養やお盆の行事を定着させた。
ごく自然に身に付いた原生的な日常・農耕動作は、渡来芸能の影響を受けて、習合・和合し、定型化するが、定着し創造発展していくものは、やはり大衆に受容される日常・楽天的なものであった。

「祭りと芸能」は、以上の様に、文化特性である循環・現利・和合を共通の基本構造とする。 その信仰原理の違いから「神道的な祀り」と「仏教的な祈願」に大別され、双方と相互に関係・影響し、しだいにその二つの信仰から独立し、芸能化していくものが、原生的な躍動・歌舞である。

神前で行う招魂・鎮魂・魂振、その時の歌舞が「神遊び」。 稲作作業を模擬的に演じてその年の豊作を祈願する予祝行事が「田遊び」である。
推古20(612)年に「伎楽」、そのあとの「舞楽」とその演奏部分「雅楽」、「散楽」と宮廷に渡来。
上代歌謡と結び「神楽」を生む。 それらを時代背景に「田遊び」から「田楽」が、「田楽」と「散楽」から「猿楽」が誕生する。 また、中国由来の追儺儀式は、宮廷以外にも仏教の修法、修正会に鬼走り(悪神払い)として合流した。 念仏から節を強調した声明・五会念仏、空也の口称念仏から、この時代の歌舞化の影響を受け 踊念仏へと大衆化する。

その平安中期900年代は、承平天慶の乱(じょうへいてんぎょうのらん)将門・純友の乱)後、摂関政治安定への時代であり、日記・物語文学も全盛した。

芸能大衆化の要因には、国家に帰属した芸者や隷民の律令崩壊後の社寺・荘園への拡散があり、やがて「座」としてまとまり、芸能を主導していく。

階級 から 自由平等
律令国家・宮廷芸能から、社寺・民間芸能へ
「散所」 律令系賤民の 荘園帰属
祇園社の神人(じんにん) 寄人・雑人
結座性 の 発生
「座」結成
「宮座」 頭人:神主帰属、神祭への物的手配
「商工業座」 「芸能座」へ

今の認識　地方文化・信仰の都 回帰参集
歌謡の**今様**
古代地方神社の勧請　**今**熊野・**今**日吉神社

民間芸能が 貴族世界 へ
宮廷 和歌歌合せ流行
「巡事」の文化　茶・連歌・香

「一味同心」 郷土愛　郷村制
土地所有～生産性向上・余剰～蓄積蓄財

日本文化の特性　基本原理 の 体系より

自然 の 法則 ・ 力

自然共生・原生思想

循環思想　**和合思想**　**現利思想**
信仰の基礎　**歌舞の習合**　**収穫・利益への願い**

生命源泉
自然 恩恵
天候・天災

神道的　循環　祀り

タマ・モノ
穢れ　禊ぎ・祓え
招魂・鎮魂・魂振
巫女　呪術
神遊び

原生的　躍動　歌舞

山の神　田の神　(自然への感謝・畏怖・恩恵)
穀物神　大年神　年神

仏教的　現利　祈願

護国
息災・増益・
敬愛・調伏

天武期
仏の役割
鎮魂　供養
放生会

大嘗祭　賀茂祭　上代歌謡
鎮魂祭
農耕と結びついた
霊魂の再生信仰

伝来
舞楽　**伎楽**　面・所作　仏教と関係へ
雅楽　演奏　**散楽**　奇術・曲芸　娯楽性

田遊び

修法
「金光明経」加持祈禱

平安時代
神の役割
怨霊祭祀
神泉苑 御霊会
疫神
雅楽/散楽
田楽/読経

伝来
追儺式
宮廷行事へ
雨乞祭
貴船神社

神への慰撫
奉納の歌舞
神楽
神楽歌

889年、賀茂社
(霜月祭り)「大鏡」、
石清水八幡宮などから「宮中御神楽」発祥
1005年 内侍所にて
松前健「春記」

天平勝宝4年(752年)
東大寺大仏開眼供養法会 奉納

延歷元(782)年 散楽戸廃止
律令体制崩壊
猿楽法師として社寺など拡散

田楽
田植しぐさ

「住吉大神社　田楽」
摂津名所図会

修正会と関係

声明
伝来
追儺式
節分へ
修正会
(しゅしょうえ)
五穀豊穣
呪師・　鬼走り

傀儡子

中期

催馬楽(大衆～貴族)
伴奏　琵琶・笏拍子

猿楽

今様で
集約

藤原明衡(あきひら)～1066年
「新猿楽記」「雲州消息」に情景記録
散楽本来の物真似や軽業・曲芸、奇術、
幻術、人形まわし、踊りなどに加え、
猥雑な演劇など 庶民娯楽性 が高まる。

田楽も
広義猿楽へ

円仁
五会念仏　招来
5種の音声からなる
音楽的な称名念仏

970年
祇園社
御霊会

白河法皇の田楽好き

空也
太鼓・鉦(かね)などを打ち踊り、念仏・和讃を唱えた。

末期

平曲
弾き語り
琵琶法師
「平家物語」など
無常世相を語る

今様
当世民衆の心情歌謡
法文歌、童歌、艶歌
貴族 「巡事に各、芸能を施す」今様、朗詠、読経など
平信範「兵範記」に記録
後白河法皇「梁塵秘抄」歌集

1096年 永長の大田楽
京都祇園会で田楽流行
田楽法師の登場
田楽踊り

踊念仏

巫女舞起源？
白拍子
男装遊女や子供が
今様や朗詠を歌い舞う

良忍　五会念仏
融通念仏　声明
(歌詠性　大衆化)

法然　六時礼讃

念仏踊り
踊り手と歌い手が別

鎌倉時代

室町　大和猿楽四座　能へ
(現:金春、金剛、観世、宝生)

室町時代
一遍　踊念仏

(びわほっし)　職人尽歌合(七十一番職人歌合)より
室町時代初期、平曲琵琶法師の組織　当道(とうどう)成立

上記、田楽風景
「摂津名所図会」住吉御田祭式 「田楽法師舞踏曲」
第一本殿前の田楽法師。手前、大傘を持つ住吉踊り舞手

神仏史　　祭りと 芸能　　座芸 から 大衆芸能へ

「座」を中心とした専門・地方芸能は、武家・貴族からも注目され「猿楽」の観阿弥・世阿弥は足利家に命運される。
「神楽」も宮廷から、巫女、神主、山伏によって伝承し民間に普及した。「踊念仏」は、念仏と踊りの演者が別れて踊りを主に芸能化していく。また融通念仏からは六斎念仏、念仏狂言が誕生した。
融通念仏は平安末期に良忍が創始。 元来は勧進行脚で、宗派組織を持たず集団運動から発展したものである。
壬生寺や清涼寺、千本閻魔堂、神泉苑には融通念仏の中興者、円覚上人による大念仏狂言が伝えられている。

この背景には、元寇以来 自力に目覚めた大衆活力がある。
1400年当初まで「逃散」に留まっていた反抗は、1426年、近江の大社下級神主である犬神人と結んだ馬借暴動、1428年以降畿内中心に勃発した「一揆」が全国に江戸時代まで続く。

応仁の乱までに成立した様々な芸能は、戦国混乱期を経て安土桃山に一層、大衆化する。

芸能や商工業の専門的な「座」から、「集団」の形成
・・・「 争乱 」と「 娯楽 」 均衡原理 ・・・

京都の「町衆」、堺や石山、堅田、加賀など自治的な自由都市が次の文化、芸能の集団的主体となり大衆芸能を誕生させる。 室町時代～戦国に成長した惣村や郷村の「寄合」、信仰の「講」でも 茶で集まった。
宮廷での和歌歌合せを前兆に、この時代、武家や民衆での茶・連歌・香でみられる「巡事」は、「座」から「集団」に成長する過程で、開放的平等・和合精神が生み出したと言える。
その精神は同じく集団形成する侍・武家とも共通し浸透した。北条早雲を弔う「早雲寺」には、その箱根で客死した連歌師巨匠・宗祇の碑がある。

専門集団 から、京都町衆・地方都市の **大衆芸能** に
・・・ 信仰的 祀り・歌舞 から **芸能的** 祭り・演劇 **へ ・・・**

「浄瑠璃」「歌舞伎」は、京都から上方全域、そして江戸に拡大していく大衆化と広域化の典型的な芸能となった。
同様に、絵画でも狩野派・琳派が江戸に波及し、大衆絵画として浮世絵が生まれる。

＊ 結崎座の創立者、観阿弥
猿楽に、曲舞（くせまい）と語りの音曲の舞を導入、新しい芸能を創造。 観阿弥の子・世阿弥は能の大成者。
1374年、京都「新熊野神社」での公演を機会に、足利義満や二条良基ら権力者のバックアップ、芸を取り入れ幽玄の美学による「複式夢幻能」の様式を確立、「井筒」50曲以上の作品創作。 ほぼ当時のままの詞章で上演されている。
世阿弥の没後も、甥・音阿弥、娘婿・金春禅竹が発展、応仁の乱で衰退するも戦国武将、特に豊臣秀吉は能に興じ、金春大夫を重用して能を深く学び、自らも舞った。

日本文化の特性　基本原理 の 体系より

自然 の 法則 ・ 力

自然共生・原生思想

循環思想 信仰の基礎　**和合思想** 歌舞の習合　**現利思想** 収穫・利益への願い

神道的　循環　祀り　　**原生的　躍動　歌舞**　　**仏教的　現利　祈願**

鎌倉時代

神楽

猿楽　　**田楽**

空也　一遍
踊念仏
融通念仏　**踊り念仏**

南北朝

寺社由来や神仏と人々の関わり方の寸劇が能・狂言に　大和四座
外山（とび）座、坂戸座、円満井（えんまんい）座、結崎（ゆうざき）座
近江猿楽六座など

演劇的要素

鎮魂　供養
（ 循環的 要素との習合）

室町時代

民間（里）神楽普及
太（だい）神楽
伊勢神人

田遊び 芸能化
鎌倉後期～室町
修正会・能・狂言
の影響

六斎念仏
盂蘭盆会 （送葬）
との習合 定着

今熊野勧請猿楽

応仁の乱
1467年～
1477年

東北の山伏神楽
出雲流神楽
巫女神楽

女猿楽
手猿楽

町衆による素人芸
自由な演技

滑稽
猿楽狂言
名主と庶民
人間関係の風刺

物まね
猿楽能
観阿弥・世阿弥
貴人本意・秘伝性

舞い
田楽能
貴族社会、
都で流行

幸若舞
武家
語り舞い

芸能化

念仏踊り
盂蘭盆会の浸透
京都・奈良・
大阪流行
三条西実隆ら創作

能 と 狂言 の合流

猿楽など
勧進

弾き語り　舞台の発祥

琵琶法師

安土桃山時代

神楽能（神能）
出雲佐太神社
中国・四国・北九州に

浄瑠璃
琵琶・三味線による 語り物へ
義太夫節

念仏狂言
京都三寺で成立
涅槃会・春行事へ

盆踊り
信仰的背景
精霊迎え・
供養・送り

江戸時代

傀儡子

踊り演劇
歌舞伎
出雲阿国　遊女歌舞伎
歌舞、演劇　舞台客席の一体

踊り念仏

人形浄瑠璃（文楽）

京都・上方

江戸

踊念仏
六波羅密寺
空也踊躍念仏
12月13日 ～ 除夜

宮中神楽
宮内庁　式部職楽部
御神楽　賢所 12月

神楽「岩戸開き」安芸高田
石見神楽　原田神楽団

唄浄瑠璃
唄物 的傾向の強い流派
河東節・常磐津節、新内節、清元節

民間神楽
・巫女神楽　**春日大社**社伝神楽
　神楽始式1月　旬祭（毎月各1日）
・太（だい）神楽　伊勢・熱田神人
・出雲流 石見　　・山伏　東北

民間神楽
伏見稲荷大社
御神楽　11月
古の鎮魂祭にもとづく神事

猿楽
興福寺・春日大社
「薪御能」5月

田楽
京都南丹田原
の御田 5月
住吉大社
田舞 6月

田遊び
（墾り・耕作始め）
伊勢神宮
鍬山祭 2月
奈良 飛鳥坐神社
おんだ祭り 2月

修二会
東大寺
お水取り 3月
法隆寺
修二会　2月